町　田　遺　跡

目　　次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 93
第２章　発掘調査の成果 …… 93
　1. 調査の方法と経過 …… 93
　2. 基本層序 …… 95
　3. 発見された遺構と遺物 …… 96
第３章　考察 …… 111
　1. 土器について …… 111
　2. 石器について …… 113
　3. 遺跡の広がりについて …… 115
第４章　まとめ …… 115
引用文献 …… 116
写真図版 …… 117

調 査 要 項

遺　　跡　　名：町田遺跡（まちだいせき）
宮城県遺跡地名表登録番号：45069
遺　　跡　　記　　号：ＰＨ
遺　　跡　　所　　在　　地：栗原郡一迫町大字大川口字町田
調　　査　　主　　体：宮城県教育委員会
調　　査　　期　　間：1995 年（平成７年）10 月 30 日～11 月７日
調　査　対　象　面　積：約 1,100 ㎡
調　　査　　面　　積：約 960 ㎡
調　　査　　員：佐藤則之・山田晃弘（宮城県教育庁文化財保護課）
　　大場亜弥（一迫町教育委員会）
調　　査　　協　　力：一迫町教育委員会
整　　理　　協　　力　　者：中島敦子・菅原友子・大沼美代子・勝山美佐子・山岸加寿子・浜松由希・
　　千葉栄子・千田敦子・佐藤明典・佐久間広恵

第１章　遺跡の位置と環境

町田遺跡は宮城県の北西部、栗原郡一迫町大字大川口字田町に所在する。一迫町の中心部である真坂の市街地から南東に約２.５ｋｍ離れた場所にあたる。

宮城県の北西部には、奥羽山脈から派生して東に延びる丘陵が連なっている。この内、栗原郡付近に発達する丘陵は大きく築館丘陵と呼ばれている。築館丘陵は郡内を東流する一迫川やその支流などによって複雑に開析され、樹枝状に分かれている。町田遺跡は、一迫川右岸に広がる緩らかな一丘陵上に位置する。遺跡周辺の標高は90m前後、谷部との比高は20～25mである。

遺跡は、北と南西の二方向から小さい沢が入り頂部の平坦面が狭くなった場所に立地する。遺物は丘陵の頂部から北斜面にかけて散布している。なお、遺跡は現在農道によって東西に分断されており、これまで遺跡地図に登録されていたのは農道の西側のみであった。

周辺の縄文時代遺跡について触れておく（興野1976、宮城県教育委員会1993）。

確認されている縄文時代遺跡は数多く、一迫川に沿う低地に面する丘陵上だけでなく丘陵内部の小さい沢に面する場所にも多く存在している。晩期になると、低地の自然堤防上にも著名な国指定史跡山王囲遺跡をはじめとしていくつかの遺跡が確認される。これらは弥生時代に継続することが多い。丘陵内部の遺跡は、散布している遺物量からみて小規模なものが多いと予測されるが、町田遺跡のすぐ南側にある小古（こんせ）遺跡は、前期～後期にわたる大遺跡である。丘陵頂部の広大な平坦面で広い範囲に遺物が散布し、また丘陵縁辺から南斜面にかけては中期の分厚い包含層が存在する。

第２章　発掘調査の成果

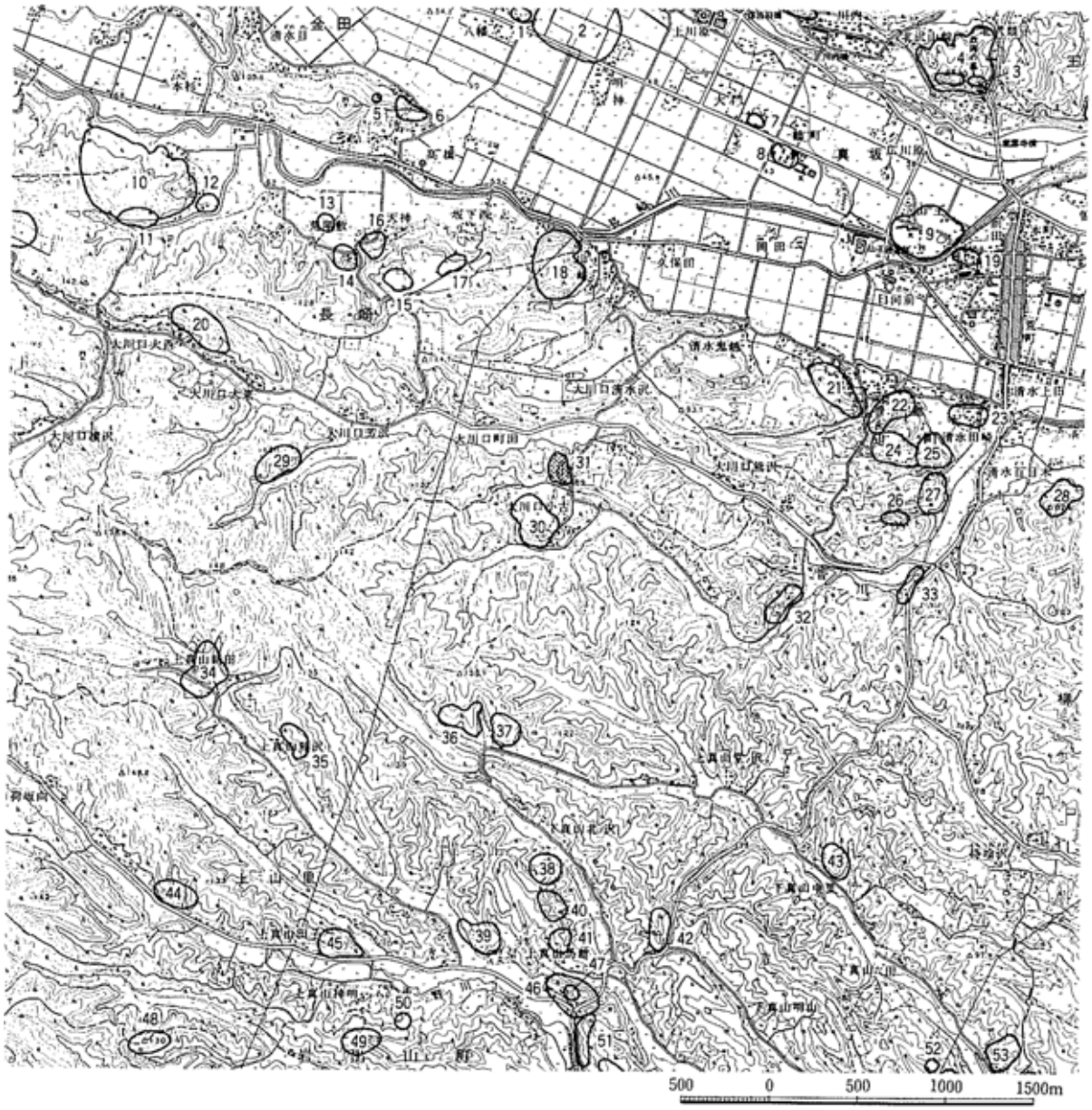
１．調査の方法と経過

今回の調査は、現農道の東側にこれとほぼ平行する形で広域農道を建設することに起因する。建設予定地の現状は杉林と荒れ地であった。前章で述べたように、周知の遺跡として確認されていたのは現道の西側のみであったが、近接地であるため予定地の北斜面を一部確認調査したところ、縄文時代前期の遺物包含層の存在が明らかとなった。

発掘調査は事前に樹木の伐採を行った後、10月30日に開始した。南斜面は、斜面下にある民家建設時に既に削られていたため調査対象外とした。表土の除去は重機によって行い、順次ジョレンで遺構確認を行った。

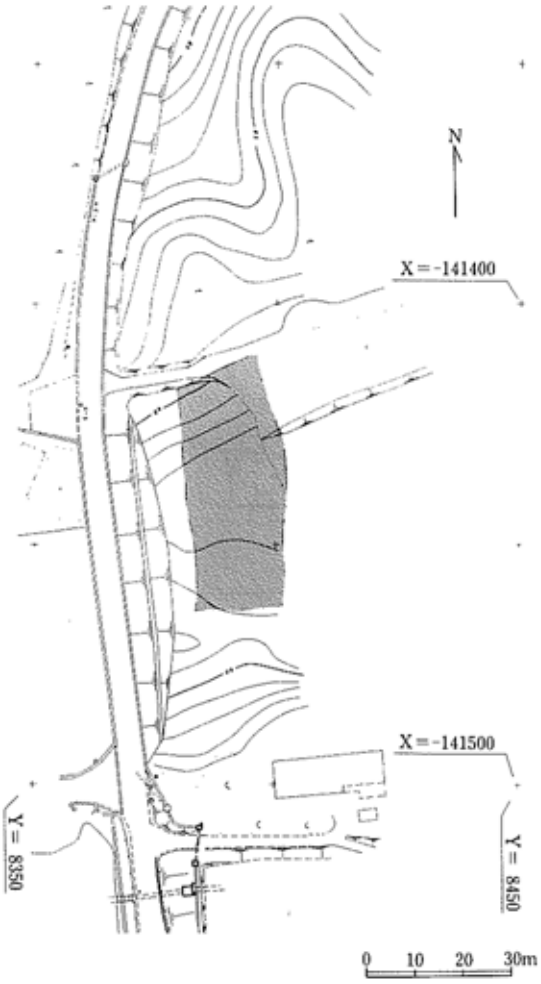
頂部平坦面は植林以前の畑地造成によると思われる削平を受けており、遺構面の保存状況は悪かった。確認された遺構は土壙が１基だけである。旧石器時代の遺物の有無を確認するため、一部区域のローム層を掘り下げた。最も深い場所で約 2m掘り下げたが、下層には分厚い火砕流堆積物が存在していたため、それ以下は断念した。遺物は発見されなかった。

北斜面では表土下に遺物包含層を確認した。調査は中央部に斜面の傾斜に沿う幅 1mのセクションベルトを設定し、その左右をそれぞれ縦に２分割して掘り下げた。ベルト部分を併せて５区に分割したことになる。

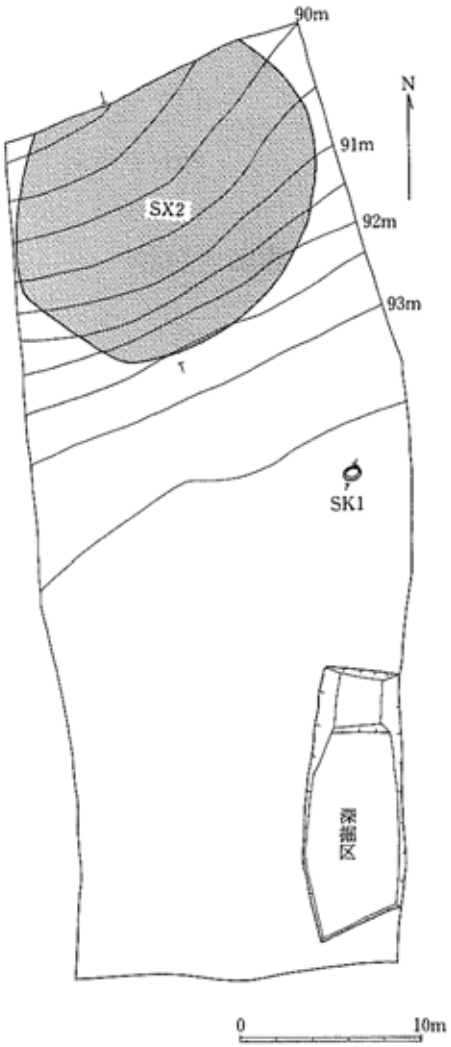


No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	阿弥陀寺跡	縄文、弥生	19	祖関遺跡	縄文晩、古墳、古代	37	堂の沢館跡	室町～江戸
2	真板平館	中世	20	大川口館跡	近世	38	北沢遺跡	縄文晩、弥生
3	西沢横穴古墳群	古墳後期	21	清水館跡	中世	39	機織遺跡	縄文中
4	鹿島館跡	中世	22	湯舞下遺跡	縄文、古代	40	狼塚古墳群	古墳
5	経塚山遺跡	平安？	23	小畑前遺跡	縄文前・中・晩、弥生	41	浦ノ前遺跡	室町、江戸
6	土川遺跡	古代	24	上野原遺跡	縄文、古代	42	潜松古墳群	古墳
7	鶴町B遺跡	古墳、古代	25	上野遺跡	縄文中・後	43	中里館跡	室町
8	鶴町A遺跡	縄文晩、古代	26	堀田B遺跡	縄文中	44	六田遺跡	縄文中
9	山王洞遺跡	縄文、弥生、奈良、平安	27	堀田A遺跡	縄文前・古代	45	八幡館跡	室町
10	境館跡	中世	28	八幡原遺跡	中世	46	馬館跡	室町
11	松原沢遺跡	縄文、弥生、古代	29	向芳沢遺跡	縄文前・晩	47	馬館塚跡群	古墳
12	日向遺跡	縄文中・晩	30	小吉遺跡	縄文前・後、古代	48	上南沢館跡	室町
13	神山遺跡	縄文後	31	町田遺跡	縄文前・中	49	黒松古墳群	古墳
14	高田B遺跡	縄文、古代	32	穴ノ原遺跡	縄文早・中、古代	50	黒松東古墳	古墳？
15	要害原遺跡	縄文、古代、中世	33	花栗遺跡	縄文、古代	51	馬館遺跡	古代
16	高田A遺跡	縄文晩、弥生、古代	34	山崎遺跡	縄文早	52	大坪古墳	古墳
17	鹿島館古墳群	不明？	35	熊沢遺跡	室町	53	大坪館跡	室町
18	鹿鼻館跡	中世	36	堂の沢遺跡	縄文早・晩、弥生	54		

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　遺跡周辺の地形と調査区



第３図　遺構全体図

遺構は、土壙については1/20の平面図と断面図を、遺物包含層については1/100平面図と1/20断面図を作成した。また、35㎜白黒写真、カラー・リバーサル写真による記録も行った。

２．基本層序

１層　表土　　黒褐色（10ＹＲ3/2）のシルト質粘土層。厚さは20～40㎝。

２層　漸移層　褐色　（10ＹＲ4/4）のシルト～シルト質粘土層。木の根などによって表土とローム層が混じりあった部分。肘折－尾花沢軽石は確認されなかった。
厚さは約10㎝。頂部には存在しない。北斜面の包含層をのせる。

３層　ソフトローム層　橙色（7.5ＹＲ6/6）シルト質粘土層。厚さは約20㎝。頂部には存在しない。

４層　ハードローム層　明黄褐色（10ＹＲ6/6）のシルト質粘土層。厚さ約25㎝程度。

５属　ハードローム層　明黄褐色（10ＹＲ6/8）のシルト質粘土層。岩片・火山砂混じり。厚さは約10㎝。

６層　火山砂　径2㎜程度の砂が集中する。７層と一連の降下堆積物と見られる。厚さ10㎝程

度。

7層　火砕流堆積物　上部　明褐色（7.5ＹＲ5/8）。径５㎜以下のパミス、部分的に火山砂と互層をなす。40～80㎝。

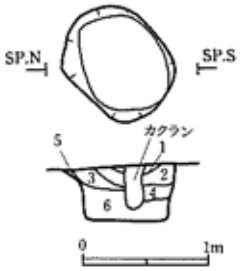
下部　灰褐色（7.5ＹＲ6/2）。1㎝程度のパミス。しまりなし。厚さ 2m 以上。

3．発見された遺構と遺物

ａ．遺構

土壙（ＳＫ1 第４図）

調査区の中央東側、丘陵頂部の平坦面の縁近くで１基確認された。平面形は楕円形をなし、長軸は 95㎝、短軸は 75㎝である。断面形はタライ形で深さは確認面から 45㎝ある。埋土は、3 層の灰混じり焼土が人為的な廃棄によるものと見られるが、他は自然堆積による。遺物は出土しなかったが縄文時代の遺構と予測される。



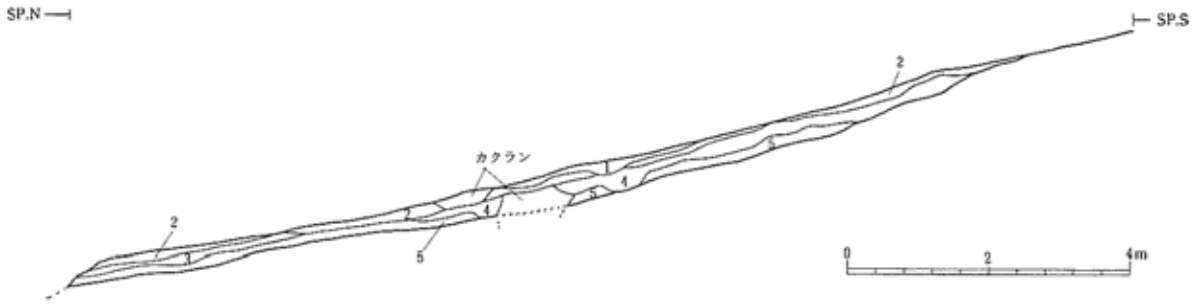
層	土質	土色	備考
1	シルト	7.5YR4/4、褐色	木炭粒多い、自然堆積
2	シルト	7.5YR4/6、褐色	径1cm土ローム粒少々
3	シルト質粘土	5YR4/6、赤褐色	灰混じり焼土、人為堆積
4	シルト質粘土	10YR3/3、暗褐色	自然堆積
5	シルト質粘土	10YR5/6、黄褐色	壁崩落土
6	シルト質粘土	10YR4/6、褐色	径1～2cm ローム粒

第４図　土壙（SK1）

遺物包含層（ＳＸ2 第３・５図）

北側斜面に確認された。規模は長さ 15m以上、幅約 17mである。斜面末端部は農道で削りとられていた。第３図に入れた 50㎝コンターでは十分に表現されていないが、斜面にあったわずかな凹地を中心に形成されている。斜面の傾斜角は約 20 度であり、二次堆積が生じやすいような強い傾斜ではない。

包含層の厚さは最も厚い中心部分で約 50㎝で、土色・含有物によって５層に分層できた。この内、2・4・5 層には炭化物・焼土・ロームブロックが少量含まれている。1 層と 3 層は含有物が少なく



層	土質	土色	備考
1	シルト	10YR1.7/1、黒色	比較的均質、自然堆積
2	シルト	10YR3/2、暗褐色	黒色土・ロームブロック含有、軟らかい
3	シルト	10YR2/1、黒色	斜面下部のみ、自然堆積
4	シルト質粘土	10YR2/3、黒褐	炭化物少量、ロームブロック、しまりなし
5	シルト質粘土	10YR2/1、黒色	炭化物・焼土粒少々、硬くしまりあり

第５図　遺物包含層（S×２）セクション

均質な土質を示しており、斜面の下部にのみ認められることと併せると自然堆積層と考えられる。遺物の含有量は全体的にそう多くはない。2・4 層が最も多いが、自然堆積と見られる 3 層にも一定量ある。同一個体の土器が一括して出土したのは 2 層と 4 層に 1 例ずつあるだけである。

以上より、各細分層は廃棄された状態を良好に残しているとは考えにくいであろう。

b．遺物包含層出土の遺物

遺物には、縄文土器・石器・動物遺体がある。各細分層ごとの出土遺物は、堆積状況から時間幅の短い良好なまとまりを示すとはあまり期待できないが、土器の特徴から見た場合にどうかを検討するために、まず細分層ごとに遺物の記述を行う。

なお、以下で定量的に土器を扱う場合、資料はセクションベルトとそれを挟んだ両側の区出土資料に限っている。これは縁辺の区では各細分層が薄く、資料の混じりがより多くなると予測されるためである。縁辺の区からの土器片は、特徴的なものを各層で個別に触れる。

土器片の集計は、口縁部・底部・胴部の破片数を集計するのを基本としたが、それぞれで明らかに同一個体と見られるものはそれらを一つと数えた。細分層をまたがる個体（接合するものなど）は、それらが属する最も下層に集計した。石器は数量が少ないため全区出土の資料を示した。

1 層

・土器の胎土には全て多量の繊維が含まれている。内面に条痕や縄文が施されたものはない。これは 2 層以下も同様である。

器種・器形が明確にできる資料はないが、器種は深鉢がほとんどで、器形は頚部で軽くくびれて外反もしくは外傾気味に立ち上がるものと、直立気味に立ち上がるものとがあると見られる。口縁部が波状をなすものもある（器種・器形に関しては、2 層以下も破片資料だけであるため、同程度の理解しかできない）。

口縁部破片が 5 点、胴部破片が 46 点と少数出土したのみである。底部破片は出土していない。

口縁部破片には、口唇に刺突を持つものが 1 点ある。地文以外の文様を持つものはない。地文では、3 点に多段末端ループ文が施されている。

胴部破片の集計では、小破片が多いために頚部破片を分離することが困難であったため両者を含めている(2 層以下も同様)。地文以外の文様を持つものはない。地文では斜行縄文が最も多く、33 点で約 70%を占めている。他に羽状縄文と多段末端ループ文がほぼ同数で約 15%ずつある。斜行縄文の原体は、単節 0 段多条が最も多く 17 点と約半数を占める。次いで単節 9 点、複節 4 点の順になっている。結節の回転の見られるものが 2 例ある。羽状縄文の原体は単節が 3 点、単節 0 段多条が 4 点である。結束されているものは 1 点のみである。多段末端ループ文の原体には無節・単節・単節 0 段多条があるが、それぞれの点数はわずかである。

・石器は、石錐・石匙・尖頭器・箆状石器・磨石が各 1 点、不定形石器が 2 点、剥片が 10 点ある。

・焼骨が 1 点あるが、小片のため同定は不可能である。

2 層

・土器は口縁部破片が 27 点、底部破片が 3 点(胴部末端の破片も含めている)、胴部破片が 176 点出土

した。

口縁部破片には口唇や口縁上端に刺突・押圧縄文が見られるものが5点ある。地文以外の文様があるものは、縁辺の区に1点あるだけである(第10図150)。150は単節0段多条ＬＲ縄文を縦回転で施文後、太く浅い沈線を1本口縁に平行に引いている。地文のみのものでは、斜行縄文が最も多く19点(原体は単節0段多条9点、単節6点、複節4点)、羽状縄文が3点、多段末端ループ文が4点、網目状撚糸文が1点ある。斜行・羽状縄文で原体が結束されたものはないが、結節回転文は1点ある。

底部破片は3点とも平底である。縄文・末端ループ文が施されたもの2点、胴部下端と底面（？）に連続刺突文が施されたものがある。

胴部破片に地文以外の文様が施されたものはない。地文では斜行縄文が最も多く120点で70%弱、次いで羽状縄文の31点、多条末端ループ文の24点となり、わずかに網目状撚糸文が1点ある。斜行縄文の原体は単節が70点と半数以上を占め、単節0段多条は22点である。複節も単節0段多条と同程度の19点ある。原体の結束が見られるものが3点、結節回転文は8点ある。短い原体を回転するのと同時に、末端ループ文を施文するものも14点ある。羽状縄文の原体は単節が14点、単節0段多条が15点とほぼ同数になっている。この他に無節と単節、単節と単節0段多条を組み合わせたものも1点ずつある。原体を結束するものは17点あり非結束の14点を上回っている。多段末端ループ文の原体では、単節0段多条が12点、単節が11点と両者ほぼ同数で、他に無節が1点ある。

・石器は石錘・箆状石器が1点、石匙が5点、不定形石器が7点、磨石が7点、敲石が2点、石皿が1点、二次加工ある剥片が5点、剥片が32点（内両極剥片が1点）ある。

3層

・3層は自然堆積層と理解したが、出土土器片は比較的多く、口縁部破片が26点、底部破片が3点、胴部破片が146点ある。

口縁部破片で口唇・口縁上端に刺突・刻みがあるものは5点である。地文以外の文様をもつものはない。地文は斜行縄文が20点と最も多く(原体は単節が13点、単節0段多条3点、複節が3点、不明1点)、羽状縄文が2点(いずれも結束がある)、多段末端ループ文が2点、網目状撚糸文が1点ある。

底部破片には平底の他に無文の丸底が1点含まれている。平底の1点には底面と胴部下端に連続刺突文が見られる。

胴部破片にも地文以外の文様は見られない。地文は斜行縄文が95点(65%)と多く、次いで羽状縄文の32点(22%)、多段末端ループ文の18点(12%)となっている。網目状撚糸文も1点ある。斜行縄文の原体は単節が42点、単節0段多条と複節が21点、無節が1点で、組紐も3点ある。結束の見られるもの・結節回転文・末端ループ文の見られるものがそれぞれ2点、2点、8点ある。羽状縄文の原体は単節が15点、単節0段多条が11点、不明が6点である。結束されたものは20点あり、非結束の6点を大きく上回っている。多段末端ループ文の原体は、単節9点、単節0段多条8点、無節1点である。

・石器は石鏃が3点、不定形石器が1点、凹石が1点、敲石が2点、剥片が14点ある。

4層

・土器は口縁部破片 41 点、底部破片 1 点、胴部破片 237 点がある。

口縁部破片で口唇・口縁上端に刺突や刻みがあるものは 7 点ある。地文以外の文様を持つものが 1 点ある(第 8 図 86)。86 は口縁が波状縁になると見られ、口縁下にＲＬ{R/L の複節斜行縄文を施し、頚部の無文部に幅広で浅い沈線を斜めに引いている。沈線は 2 本 1 単位で 4 本施文されている。同一個体の可能性がある頚部破片が表土に 2 点あり(第 10 図 152a、152b)、山形状のモチーフになると予想される。地文だけの資料では、斜行縄文が 22 点、羽状縄文が 10 点、多段末端ループ文が 5 点、不明が 3 点ある。斜行縄文の原体は単節が 15 点、単節 0 段多条が 4 点、複節が 2 点、無節が 1 点である。羽状縄文の原体は単節が 7 点、単節 0 段多条が 2 点で、この内 8 点が結束されている。多段末端ループ文の原体は単節が 4 点、単節 0 段多条が 1 点である。

底部破片の 1 点は、揚底風の平底で底面と胴部下端に連続刺突文が見られる。

胴部破片でもわずかに 1 点地文以外の文様が見られる（第 9 図 109）。単節ＲＬの斜行縄文(結節あり)施文後に、斜めにそいだ竹管の先端で刺突を加えている。地文のみの破片では、斜行縄文が 149 点で最も多く(63%)、次いで羽状縄文の 73 点(31%)、多段末端ループ文が 14 点(6%)、網目状撚糸文 1 点となっている。斜行縄文の原体は単節が 80 点、単節 0 段多条が 28 点、複節が 17 点、無節 2 点、組紐 1 点、不明 21 点となっている。原体が結束されているもの・結節回転文はともに 4 点、末端ループ文も付けられているものは 11 点ある。羽状縄文の原体は単節が 36 点、単節 0 段多条が 25 点、不明が 12 点である。この内原体が結束されているものは 38 点あり、非結束よりも多くなっている。菱形の構成をとる羽状縄文はわずかに 3 点で確認できるだけであるが、小破片が多いことを考慮すると実際はより多いと予想される。多段末端ループ文の原体は、単節 0 段多条が 9 点で単節が 5 点である。

・石器は石鏃が 2 点、石錘が 1 点、石匙が 4 点、箆状石器が 3 点、不定形石器が 3 点、二次加工ある剥片が 3 点、凹石が 2 点、磨石が 6 点、敲石が 2 点、石核が 1 点、剥片が 49 点ある。

5 層

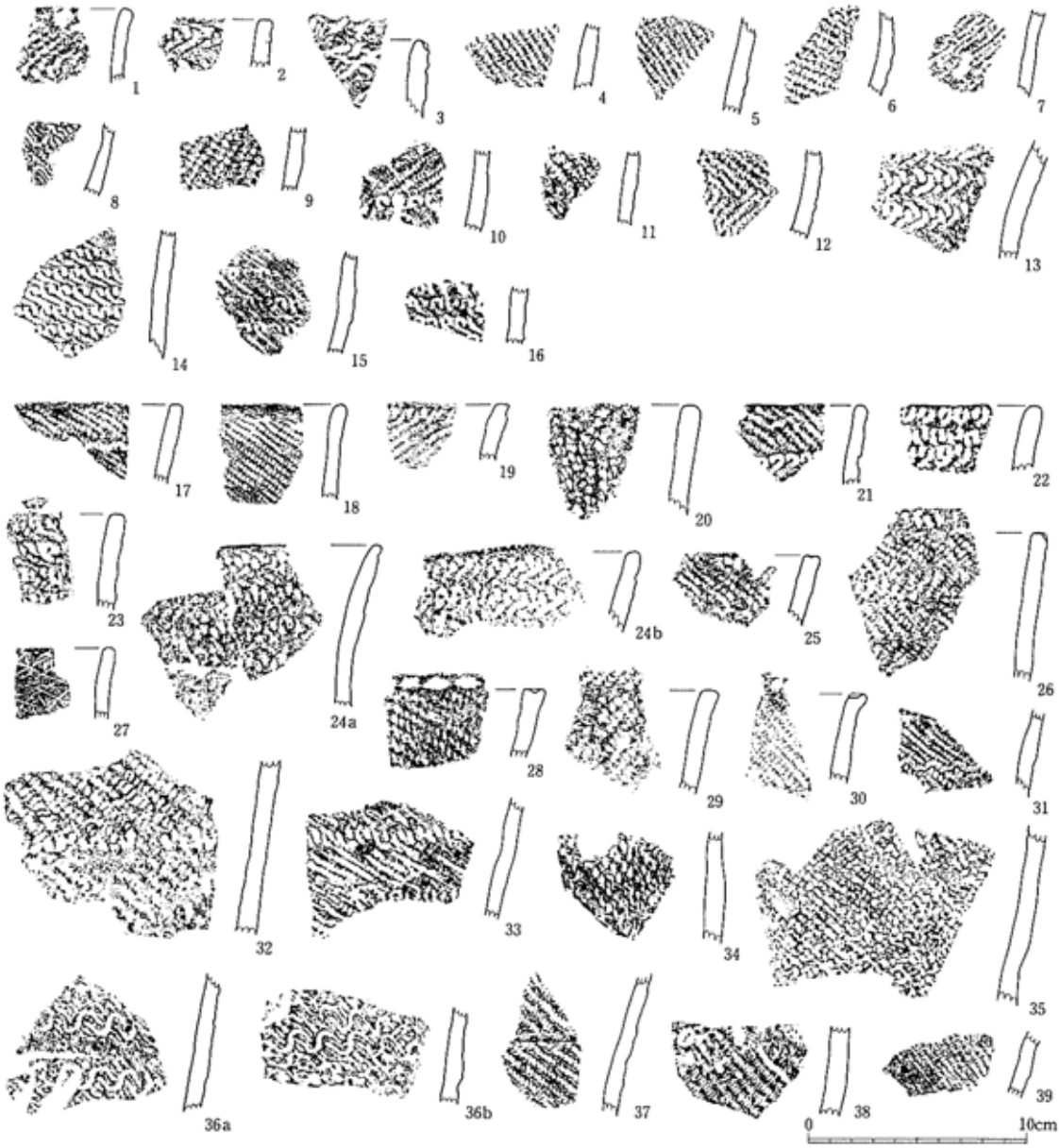
・土器は口縁部破片が 9 点、底部破片が 1 点、胴部破片が 73 点と少量である。

口縁部破片では、口唇の刺突と口縁上端の刻みを合わせ持つものが 1 点ある。地文以外の文様をもつものはない。地文は斜行縄文が 5 点（単節・複節）、多段末端ループ文が 4 点（単節）ある。

底部破片は平底で、単節 0 段多条の多段末端ループ文が見られる。

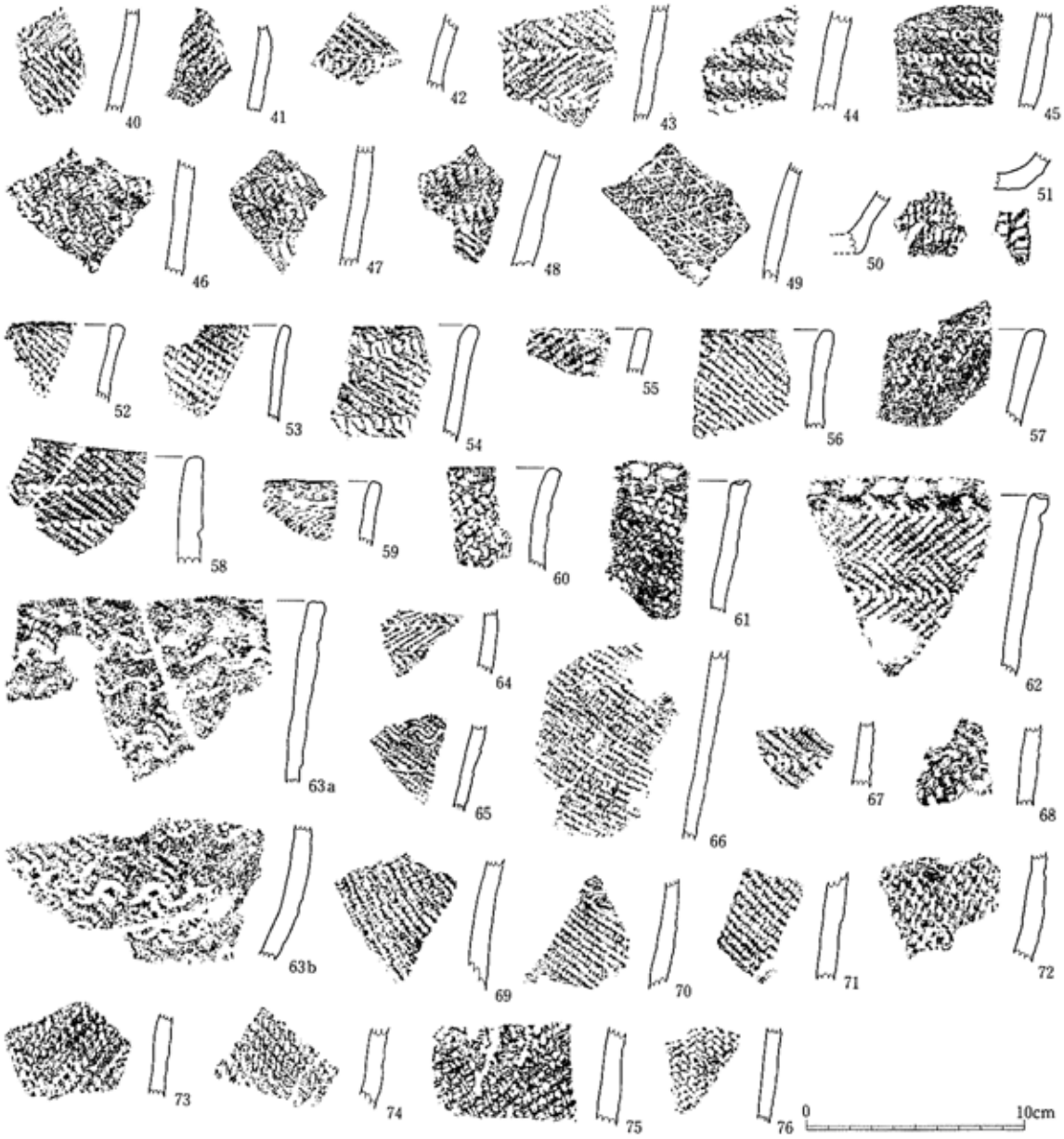
胴部破片にも地文以外の文様は見られない。地文は、斜行縄文が 44 点、羽状縄文が 20 点、多段末端ループ文が 7 点、網目状撚糸文が 2 点ある。網目状撚糸文と単節斜行縄文が部位を違えて施文されている例もある(第 10 図 148ｂ)。斜行縄文の原体は、単節 15 点、単節 0 段多条が 10 点、複節 8 点、不明が 10 点、無節が 1 点である。原体が結束されているもの・結節回転文・末端ループ文が同時に付けられているものが、それぞれ 3・2・1 点ある。羽状縄文の原体は、単節 10 点、単節 0 段多条 6 点、不明 4 点である。結束は 12 点ある。菱形の文様構成をとるものもわずかにある。多段末端ループ文の原体は、単節 0 段多条が 6 点、単節が 1 点である。

・石器は石錐・石匙が 1 点、不定形石器が 2 点、凹石 1 点、磨石が 2 点、剥片が 9 点ある。



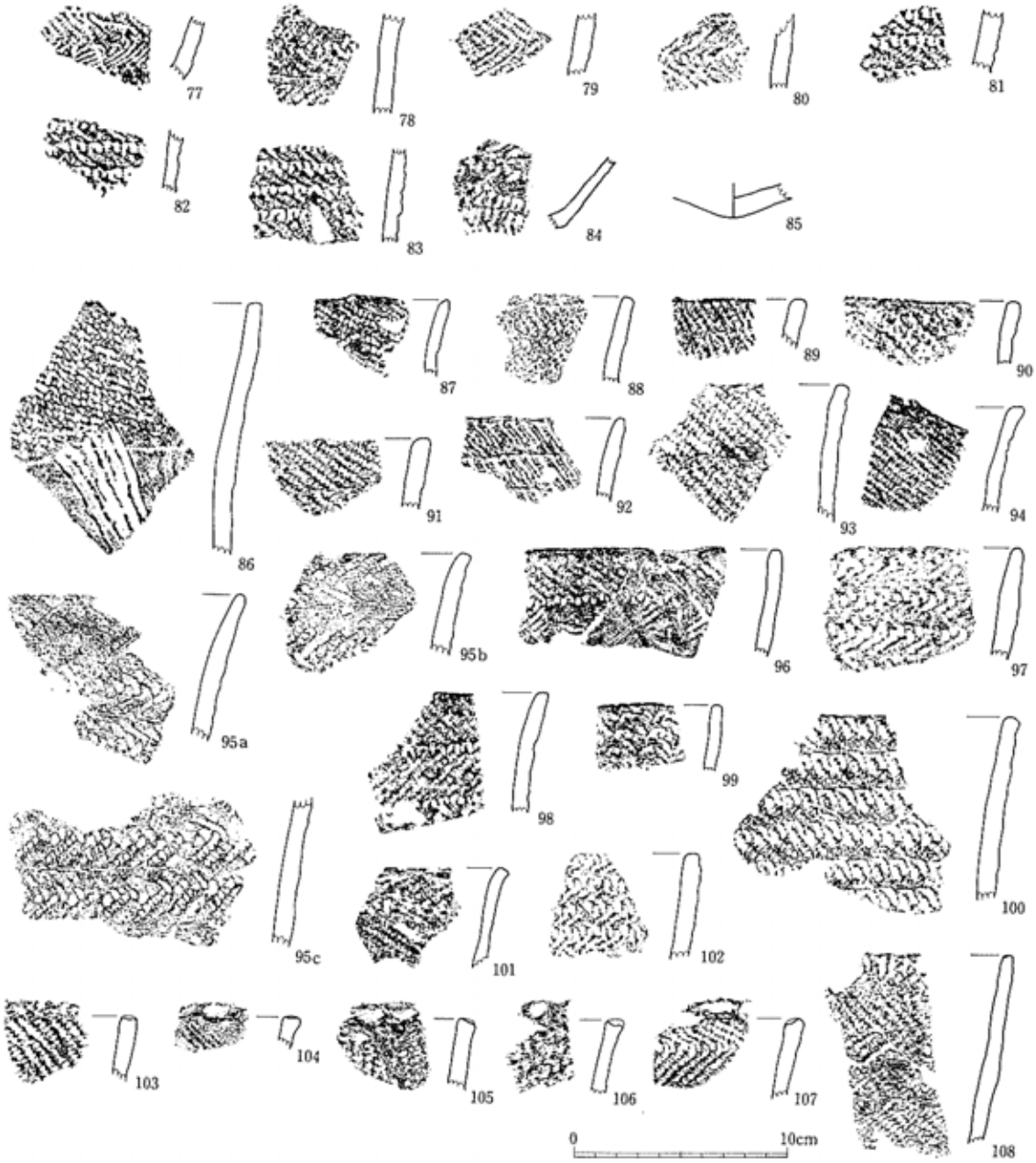
番号	層	部位	文様など	登録	写真	番号	層	部位	文様など	登録	写真
1	1	口縁	羽状、単節 RL＋LR、結束	112	2-1	21	2	口縁	羽状、0段多条 RL＋LR、末端ループ	29	2-13
2	1	口縁	多段末端ループ、無節 L	111	2-2	22	2	口縁	多段末端ループ RL＋LR	31	2-14
3	1	口縁	口唇刺突、網目状撚糸	113		23	2	口縁	多段末端ループ RL	33	
4	1	胴	斜行、0段多条 RL	123		24a	2	口縁	波状？、多段末端ループ、無節1	140	
5	1	胴	斜行、0段多条 RL	124	2-4	24b	2	口縁	波状？、多段末端ループ、無節1	141	2-15
6	1	胴	斜行、単節 RL	125		25	2	口縁	口唇刺突、斜行、単節 RL	25	
7	1	胴	斜行、単節 LR	126		26	2	口縁	小波状？、口唇刺突、羽状、単節 RL＋LR	28	2-16
8	1	胴	斜行、単節 RL、結節	127		27	2	口縁	網目状撚糸	34	
9	1	胴	斜行、複節 LRL	128	2-5	28	2	口縁	口唇刺突、斜行、複節 RLL	30	2-18
10	1	胴	羽状、0段多条 RL＋LR	116	2-6	29	2	口縁	口唇押圧縄文、斜行、複節 LRL	35	
			非結束、末端ループ、変形構成？			30	2	口縁	口唇刺突、斜行、複節 RLL	27	
11	1	胴	羽状、単節 RL＋LR、結束	117		31	2	胴	斜行、単節 RL、結節	7	
12	1	胴	羽状、0段多条 RL＋LR、非結束	118	2-7	32	2	胴	斜行、単節 RL、末端ループ	10	2-19
13	1	胴	多段末端ループ、無節1	121	2-8	33	2	胴	斜行、単節 RL、結束	9	2-20
14	1	胴	多段末端ループ、無節r	119	2-9	34	2	胴	斜行、複節 RLR	5	
15	1	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	120		35	2	胴	斜行、複節 RL/RL	4	2-21
16	1	胴	多段末端ループ、単節 RL	122		36a	2	胴	斜行、0段多条 RL、結節	136	
17	2	口縁	小波状？、斜行、単節 RL、結節	24	2-10	36b	2	胴	斜行、0段多条 RL、結節	135	2-22
18	2	口縁	斜行、0段多条 RL	36	2-11	37	2	胴	斜行、0段多条 RL、結節	6	2-23
19	2	口縁	斜行、0段多条 LR	26		38	2	胴	斜行、0段多条 RL、末端ループ	8	2-24
20	2	口縁	斜行、複節 LRL、縦回転	32	2-12	39	2	胴	斜行、0段多条 RL	11	

第6図　包含層出土の土器(1)



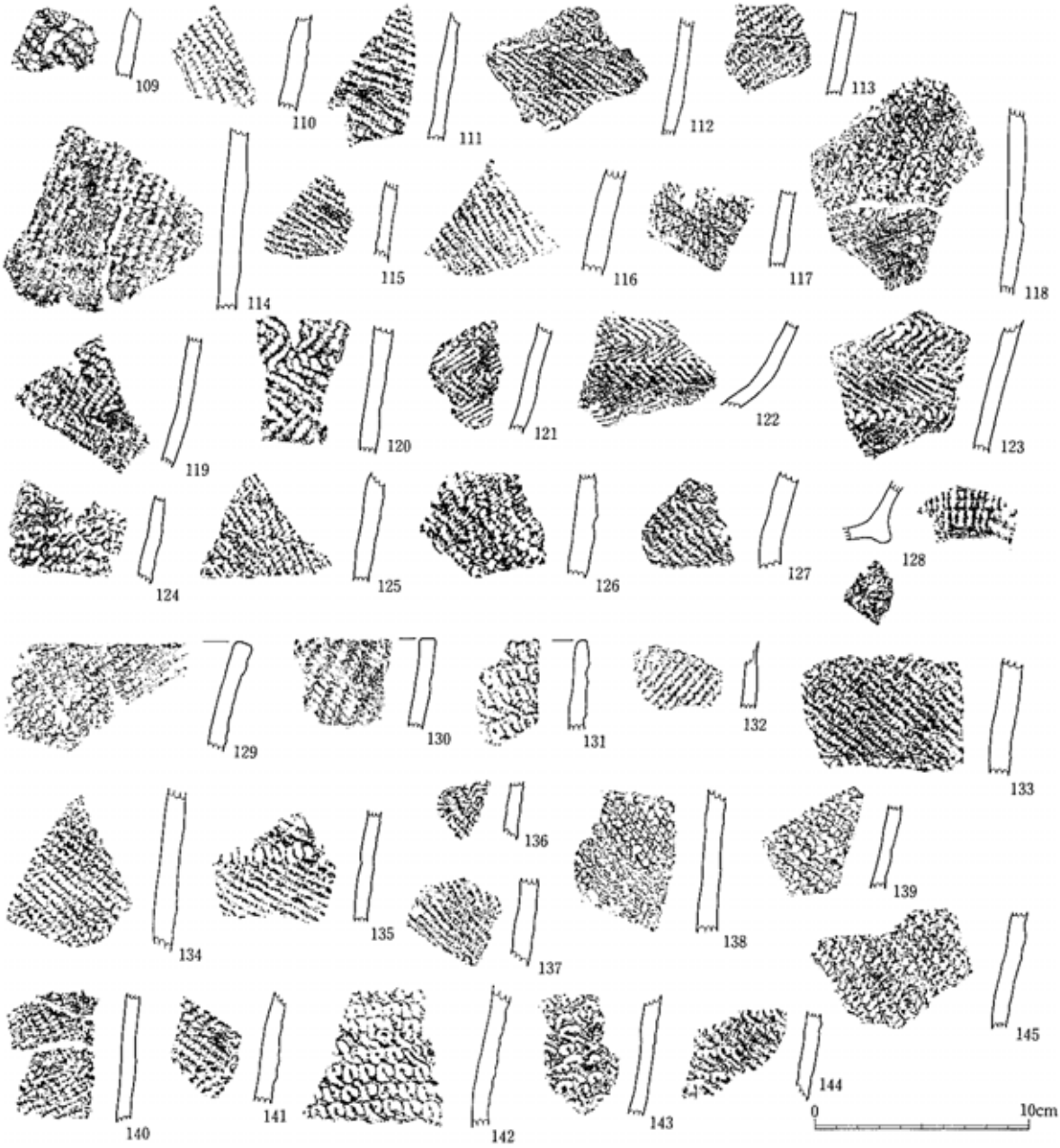
番号	層	部位	文様など	登録	写真	番号	層	部位	文様など	登録	写真
40	2	胴	羽状、0段多条 RL+LR、結束	16		59	3	口縁	撚糸 R	82	
41	2	胴	羽状、単節 RL+LR、末端ループ、非結束	15		60	3	口縁	口縁端刻み、斜行、単節 LR	91	2-35
42	2	胴	羽状、0段多条 RL+LR、末端ループ、非結束	13		61	3	口縁	口唇刺突、斜行複節 RLL	89	
43	2	胴	羽状、単節 RL+LR、末端ループ、非結束	14	2-25	62	3	口縁	口唇刺突、羽状、単節 RL+LR、結束	84	2-36
44	2	胴	多段末端ループ、単節 RL	20	2-26	63a	3	口縁	斜行、単節 RL、結節	133	
45	2	胴	多段末端ループ、単節 RL	21		63b	3	胴	斜行、単節 RL、結節	134	
46	2	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	17	2-27	64	3	胴	斜行、無節 L、結束	99	2-49
47	2	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	18		65	3	胴	斜行、単節 RL、結節	97	2-38
48	2	胴	多段末端ループ、0段多条 RL+LR	23		66	3	胴	斜行、0段多条 RL、結節	108	2-37
49	2	胴	網目状撚糸	3	2-28	67	3	胴	斜行、0段多条 RL、末端ループ	100	
50	2	底	連続刺突	2	2-29	68	3	胴	斜行、複節 LRL	102	
51	2	底	末端ループ、単節 RL	1	2-30	69	3	胴	斜行、単節 RL	104	2-39
52	3	口縁	斜行、単節 RL	88	2-31	70	3	胴	斜行、0段多条 RL、結節？	107	
53	3	口縁	斜行、単節 RL	87		71	3	胴	斜行、単節 RL	105	
54	3	口縁	斜行、単節 RL、末端ループ	86	2-32	72	3	胴	斜行、複節 RLR	101	2-40
55	3	口縁	斜行、0段多条 LR	81	73		3	胴	斜行、複節 LRL	103	
56	3	口縁	斜行、0段多条 RL	85	2-33	74	3	胴	斜行、複節 RLL、結節	106	2-42
57	3	口縁	波状、斜行、複節 LRL、結節	90		75	3	胴	斜行、複節 LR/RL	96	2-41
58	3	口縁	波状、多段末端ループ、0段多条 RL	83		76	3	胴	斜行、組紐0段	98	

第7図　包含層出土の土器(2)



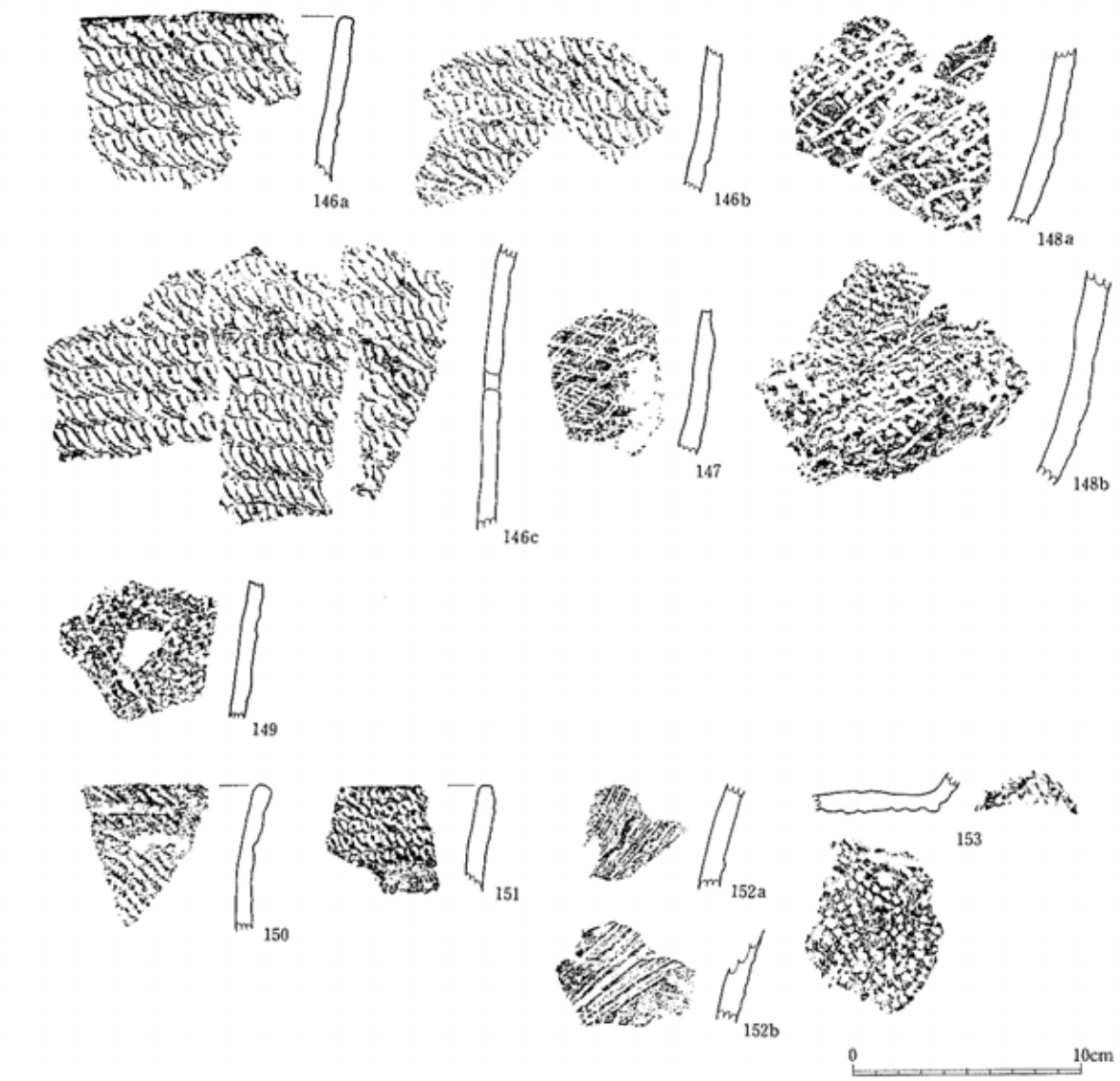
番号	層	部位	文様など	登録	写真	番号	層	部位	文様など	登録	写真
77	3	胴	羽状、単節 RL+LR、非結束	115	2-43	94	4	口縁	波状、斜行、0段多条 RL		
78	3	胴	羽状、単節 RL+LR、結束、結節	110		95a	4	口縁	羽状、単節 RL+LR、結束、結節	166	2-59
79	3	胴	羽状、0段多条 RL+LR、非結束	114		95b	4	口縁	羽状、単節 RL+LR、結束、結節	167	
80	3	胴	羽状、0段多条 RL+LR、結束	109	2-44	95c	4	胴	羽状、単節 RL+LR、結束、結節	168	
81	3	胴	多段末端ループ、単節 RL	93		96	4	口縁	小波状、羽状、単節 RL+LR、結束	60	2-55
82	3	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	95	2-45	97	4	口縁	多段末端ループ、単節 LR	77	2-58
83	3	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	94	2-46	98	4	口縁	羽状、0段多条 RL+LR、結束	73	2-57
84	3	底	平底、連続刺突、羽状、単節 RL+LR	92		99	4	口縁	多段末端ループ、0段多条 RL	68	
85	3	底	丸底、無文		2-47	100	4	口縁	多段末端ループ、単節 RL	137	
86	4	口縁	頸部に沈線（斜行）、斜行、複節 RL/RL	59		101	4	口縁	羽状、0段多条 RL+LR、結束	69	
87	4	口縁	斜行、単節 RL、結節	70	2-51	102	4	口縁	多段末端ループ、単節 LR	76	2-60
88	4	口縁	斜行、単節 RL	65		103	4	口縁	口唇刺突、斜行、単節 RL	80	
89	4	口縁	斜行、0段多条 RL	71		104	4	口縁	口唇刺突、斜行、単節 RL	75	
90	4	口縁	斜行、複節 RLR	62	2-56	105	4	口縁	口唇刺突、斜行、単節 RL、縦回転	79	
91	4	口縁	斜行、単節 RL	67		106	4	口縁	口唇刺突、斜行、複節 LRL	74	
92	4	口縁	斜行、単節 RL	66	2-52	107	4	口縁	口唇刺突、羽状、単節 RL+LR、結束	78	2-61
93	4	口縁	斜行、単節 RL	64	2-53	108	4	口縁	口縁端刻み、羽状、単節 RL+LR、非結束	58	2-62

第８図　包含層出土の土器(3)



番号	層	部位	文様など	登録	写真	番号	層	部位	文様など	登録	写真
109	4	胴	刺突、斜行、単節 RL、結節	39	3-1	128	4	底	無底、連続刺突（底面・胴下端）	37	3-14
110	4	胴	斜行、単節 RL	46		129	5	口縁	斜行、複節 LR/RL、結節	151	3-15
111	4	胴	斜行、単節 RL	47	3-2	130	5	口縁	斜行、複節 LRL	152	3-16
112	4	胴	斜行、単節 RL、結節	52	3-3	131	5	口縁	多段末端ループ、単節 RL	150	3-17
113	4	胴	斜行、単節 LR、結節	45		132	5	胴	斜行、無節 L	162	
114	4	胴	斜行、単節 RL、縦回転	48	3-4	133	5	胴	斜行、単節 RL	164	3-18
115	4	胴	斜行、0段多条 RL	50		134	5	胴	斜行、単節 RL	163	3-19
116	4	胴	斜行、0段多条 RL	51	3-5	135	5	胴	斜行、単節 RL、結束	132	3-20
117	4	胴	斜行、複節 RLL、結節	53		136	5	胴	斜行、0段多条 RL、結節	159	
118	4	胴	斜行、複節 LRL	49	3-6	137	5	胴	斜行、0段多条 RL	161	
119	4	胴	羽状、単節 RL+LR、非結束	42		138	5	胴	斜行、複節 RLR	158	3-21
120	4	胴	羽状、単節 RL+LR、結束	44	3-8	139	5	胴	斜行、複節 RL/LR	157	
121	4	胴	羽状、単節 RL+LR、結束	43		140	5	胴	羽状、単節 RL+LR、非結束	156	3-22
122	4	胴	羽状、0段多条 RL+LR、結束	40	3-10	141	5	胴	羽状、0段多条 RL+LR、結束	155	3-23
123	4	胴	羽状、0段多条 RL+LR、結束	41	3-9	142	5	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	147	3-24
124	4	胴	多段末端ループ、単節 LR	54	3-11	143	5	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	148	
125	4	胴	多段末端ループ、単節 RL	55		144	5	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	149	
126	4	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	56	3-12	145	5	胴	斜行、複節 RL/RL	160	
127	4	胴	多段末端ループ、0段多条 RL	57	3-13						

第9図　包含層出土の土器(4)



番号	層	部位	文様など	登録	写真	番号	層	部位	文様など	登録	写真
146a	5	口縁	多段末端ループ、単節 RL	130	3-25	149	6	胴	斜行、複節 RLL	165	
146b	5	胴	多段末端ループ、単節 RL	129	3-26	150	2	口縁	寒端区、横走沈線、0段多条 LR、縦回転	145	3-31
146c	5	胴	多段末端ループ、単節 RL	131	3-27	151	表	口縁	多段末端ループ、0段多条 RL、無文帯	146	3-32
147	5	胴	網目状撚糸1段 L	154	3-28	152a	表	胴	斜行沈線、地文なし、86と同一個体？	143	3-33
148a	5	胴	網目状撚糸0段 r、斜行単節 RL	138	3-29	152b	表	胴	斜行沈線、地文なし、86と同一個体？	142	3-34
148b	5	胴	網目状撚糸0段 r、斜行単節 RL	139	3-30	153	表	底	連続刺突（底面・胴下端）	144	3-35

第10図　包含層出土の土器(5)

口縁部破片集計

層位	刺突・刻目なし							小計	刺突・刻目あり							小計	計
	斜縄文		羽状縄文		多段ループ	燃糸文	不明		斜縄文		羽状縄文		多段ループ	燃糸文	不明		
	非結束	結束	非結束	結束					非結束	結束	非結束	結束					
1				1	3			4						1		1	5
2	15		2		4	1		22	4		1					5	27
3	15	1		1	2		1	20	4			1		1		6	26
4	17			8	5		3	33	5		1	1				7	40
5	5				3			8					1			1	9
6								0								0	0
計	52	1	2	10	17	1	4	87	13	0	2	2	1	2	0	20	107

底部破片集計

層位	平底		尖底	計
	縄文	刺突	無文	
1				0
2	2	1		3
3	1	1	1	3
4		1		1
5	1			1
6				0
計	4	3	1	8

胴部破片集計

層位	斜縄文		羽状縄文		多段ループ		燃糸文		計
1	33	71.7	7	15.2	6	13.0		0	46
2	120	68.2	31	17.6	24	13.6	1	0.6	176
3	95	65.1	32	21.9	18	12.3	1	0.7	146
4	149	62.9	73	30.8	14	5.9	1	0.4	237
5	44	60.3	20	27.4	7	9.6	2	2.7	73
6									
計	441		163		69		5		678

胴部破片－斜行縄文の原体①

層位	斜縄文																												
	無節			単節									0段多条								複節					組紐	不明	計
	R	L		RL					LR				RL				LR				RLR	LRL	RL	LR	RLL	0段		
	単純	単純	結束	単純	結節	結束	ループ	刺突	単純	結節	結束	ループ	単純	結節	結束	ループ	単純	結節	結束	ループ	単純		/LR	/LR				
1				6	1				3				16					1			2	1	1				2	33
2				39	6	3	11		9			2	14	2		1	5				5	8	4	1	1		9	120
3			1	32	1	1	2		5			1	14	2		5					5	10	1	2	3	3	7	95
4		2		46	4	2	5	1	16	2	2	2	21	2		4	1				3	11	1		2	1	21	149
5		1		12	1	1			1				5	1	2		1			1	2	2	2		2	3	7	44
6																												0
計	0	3	1	135	13	7	18	1	34	2	2	5	70	7	2	10	7	1	0	1	17	32	9	3	8	7	46	441

胴部破片－斜行縄文の原体②

層位	無節	単節	0段多条	複節	組紐	不明	計
1		10	17	4		2	33
2		20	22	19		9	120
3	1	42	21	21	3	7	95
4	2	80	28	17	1	21	149
5	1	15	10	8		10	44
6							0
計	4	217	98	69	4	49	441

胴部破片－斜行縄文の原体③

層位	単純	結束	結節	末端ループ	計
1	29		2		31
2	80	3	8	14	111
3	158	2	2	8	171
4	103	4	4	11	122
5	28	3	2	1	34
6					0
計	105	12	18	34	169

胴部破片－羽状縄文の原体①

層位	羽状縄文							
	無節＋単節	単節		単節＋0段	0段多条		不明	計
	RL+L	RL+LR		RL+LR	RL+LR			
	結束	非結束	結束	非結束	非結束	結束		
1		2	1		4			7
2	1	6	8	1	7	8		31
3		4	11		2	9	6	32
4		14	22		9	16	12	73
5		4	6			6	4	20
6								0
計	1	30	48	1	22	39	22	163

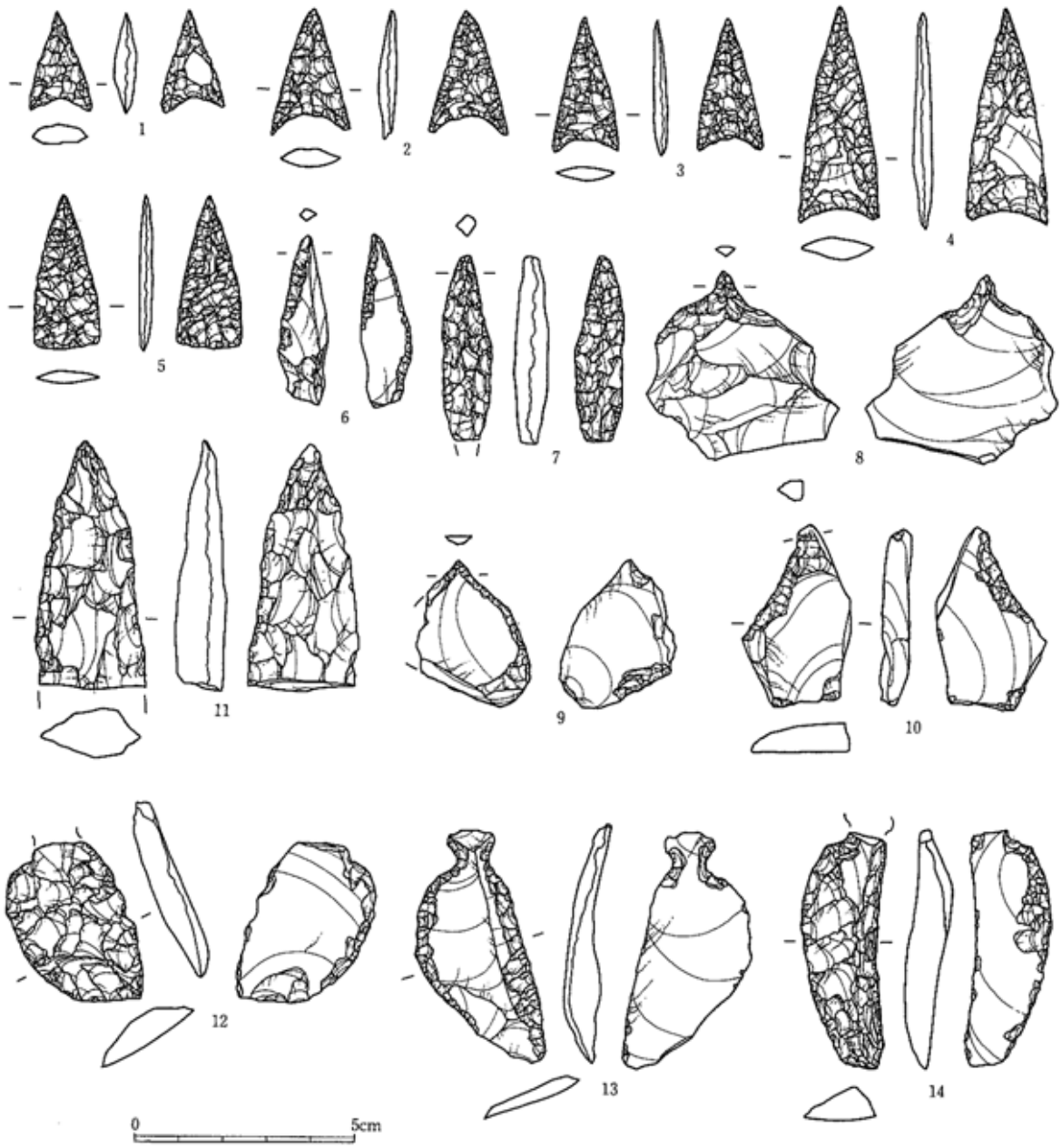
胴部破片－羽状縄文の原体②

層位	非結束	結束	不明	計
1	6	1		7
2	14	17		31
3	6	20	6	32
4	23	38	12	73
5	4	12	4	20
6				0
計	53	88	22	163

胴部破片－多段末端ループ文・燃糸文の原体

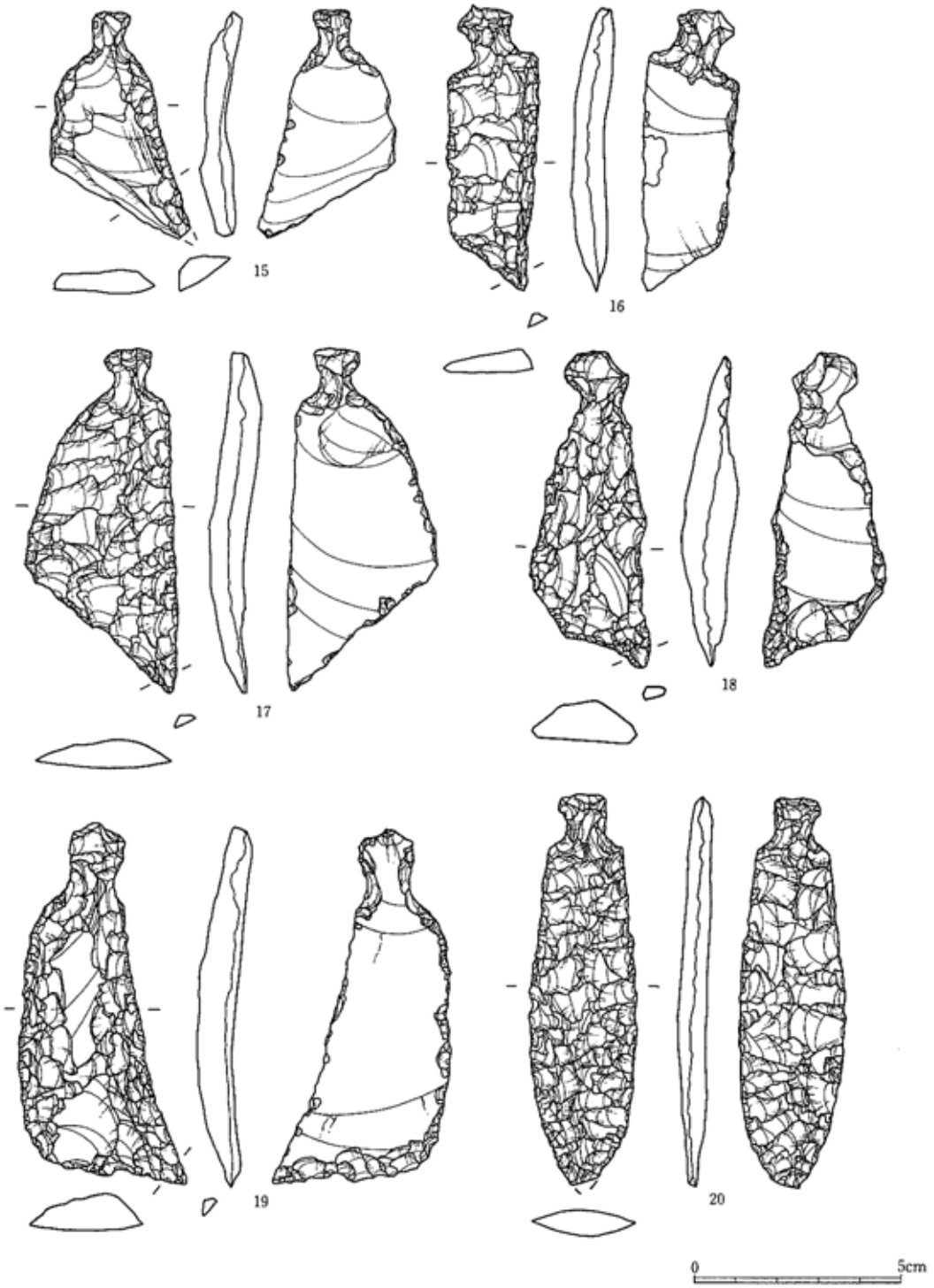
層位	多段ループ							燃糸文			燃糸文＋斜縄文	
	無節		単節		0段多条			網目状			網目状＋単節	
	R	L	RL	LR	RL	LR	RL+LR	0段r	0段l	1段L	0段r+RL	計
1	1	2	2		1							6
2		1	11		10		2	1				25
3	1		8	1	8					1		19
4			3	2	9				1			15
5			1		6					1	1	9
6												0
計	2	3	25	3	34	0	2	1	1	2	1	74

第１表　包含層出土の土器集計



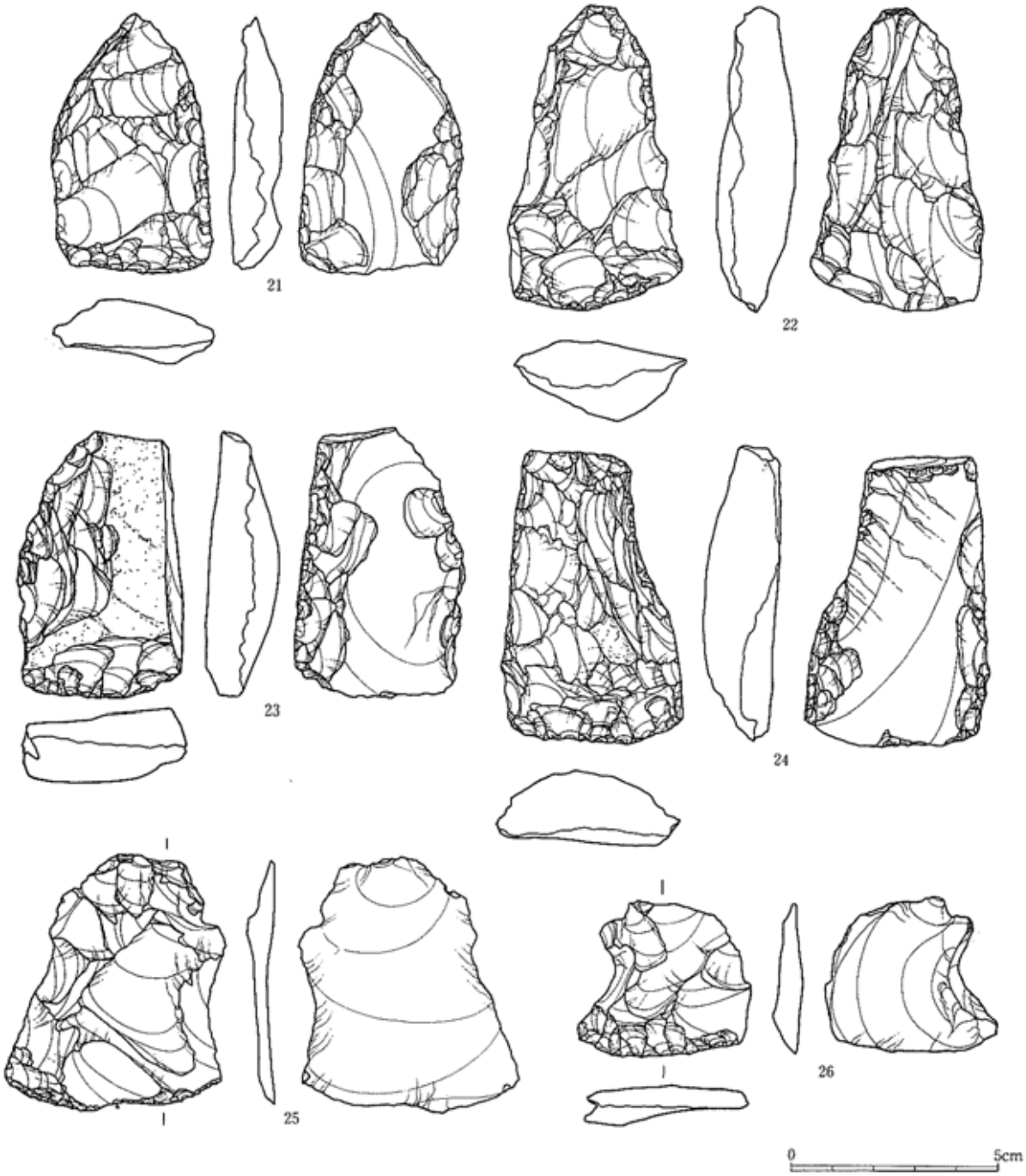
番号	層	区	器種	石材	長	幅	厚	重	備考	登録	写真
1	4	西側	石鏃	黒色頁岩	2.3	1.4	0.5	1	焼けはじけ	95	4-1
2	4	西側	石鏃	碧玉	2.9	1.8	0.4	1.3		96	4-2
3	3	西側	石鏃	珪質頁岩	3.1	1.5	0.3	1.2		106	4-3
4	3	西側	石鏃	珪質頁岩	4.9	1.9	0.4	3.3	調整規則的	107	4-5
5	3	東側	石鏃	珪質頁岩	3.5	1.5	0.3	1.6		108	4-4
6			石錐	珪質頁岩	3.9	1.3	0.6	2.1		132	4-6
7	4	東側	石錐	珪質頁岩	4.2	1.1	0.7	3.9	尖端部激しく摩耗	115	4-7
8	5	東側	石錐	珪質頁岩	4.3	4.3	0.7	10.2	ポイントフレイク素材？	100	4-9
9	2	東側	石錐	玉髄	3.6	2.6	0.8	7.1	側辺焼けはじけ	61	4-10
10	1	西側	石錐	珪質頁岩	4	2.6	0.6	5.8	尖端部摩耗	51	
11	1	東側	尖頭器	珪化凝灰岩	5.7	2.5	1.1	13.3	尖端焼けはじけ	6	4-8
12	2	東側	石匙	珪質頁岩	4.2	2.7	0.7	7.8	折れ	112	
13	2	東側	石匙	珪質頁岩	5.5	2.4	0.4	6		38	4-12
14	2	西側	石匙	珪質頁岩	5.4	1.7	0.8	7.8	折れ	30	4-11

第11図　包含層出土の石器(1)



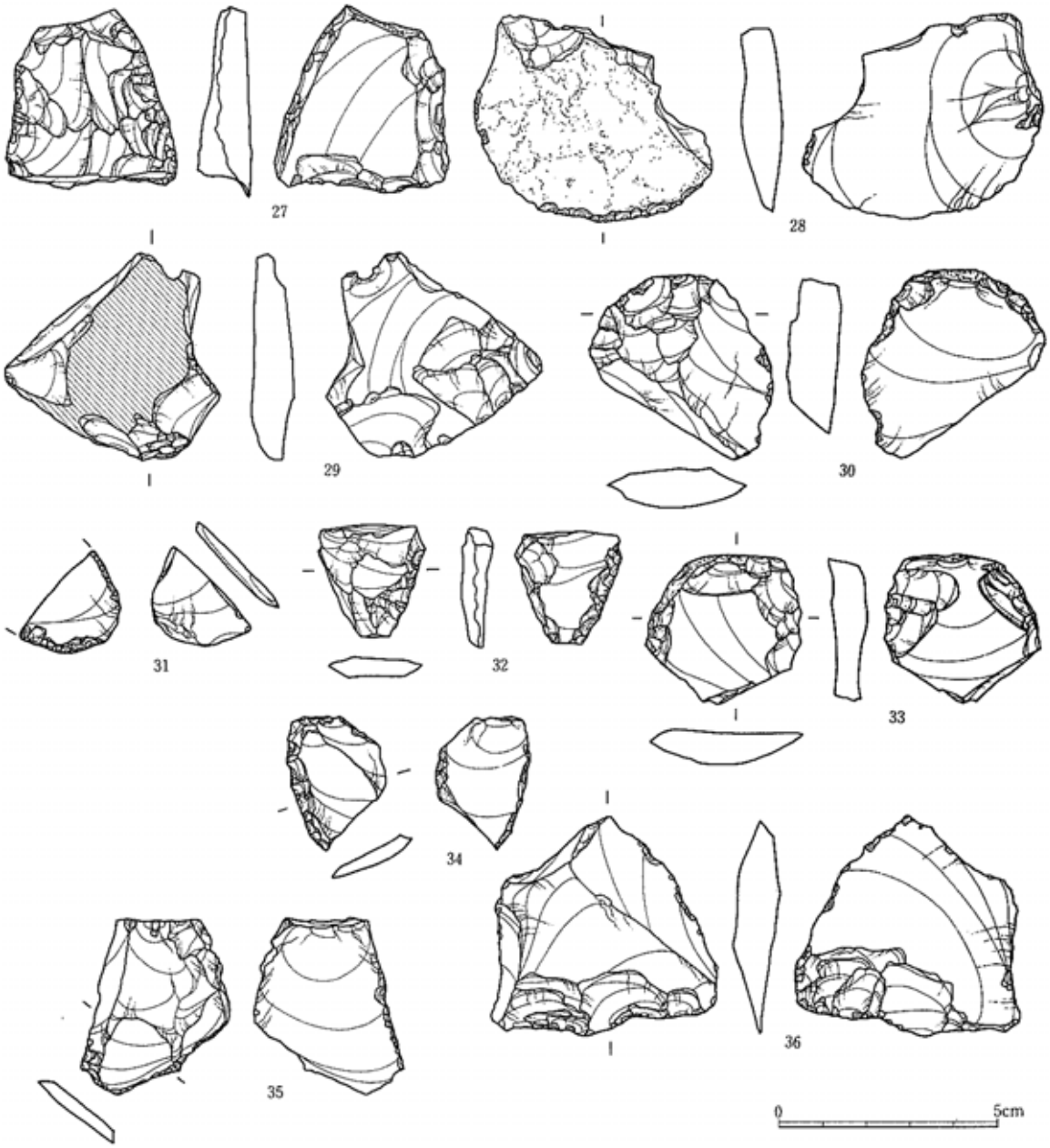
番号	層	区	器種	石材	長	幅	厚	重	備考	登録	写真
15	2	西側	石鏃	珪化凝灰岩	5.8	2.9	0.8	9.5		19	4-13
16	1	東側	石鏃	珪質頁岩	7	2.3	0.7	10.6		49	4-18
17	4	ベルト	石鏃	珪質頁岩	8.4	3.6	0.7	19.6	先端部摩耗	21	4-16
18	5	東側	石鏃	珪質頁岩	7.8	2.8	1	18.4	折れの後作り替え	56	4-17
19	4	西側	石鏃	珪質頁岩	9.1	3.2	0.9	25.7	先端部摩耗	110	4-14
20	表土		石鏃	珪質頁岩	9.5	2.6	0.7	18.2		162	4-15

第12図　包含層出土の石器(2)



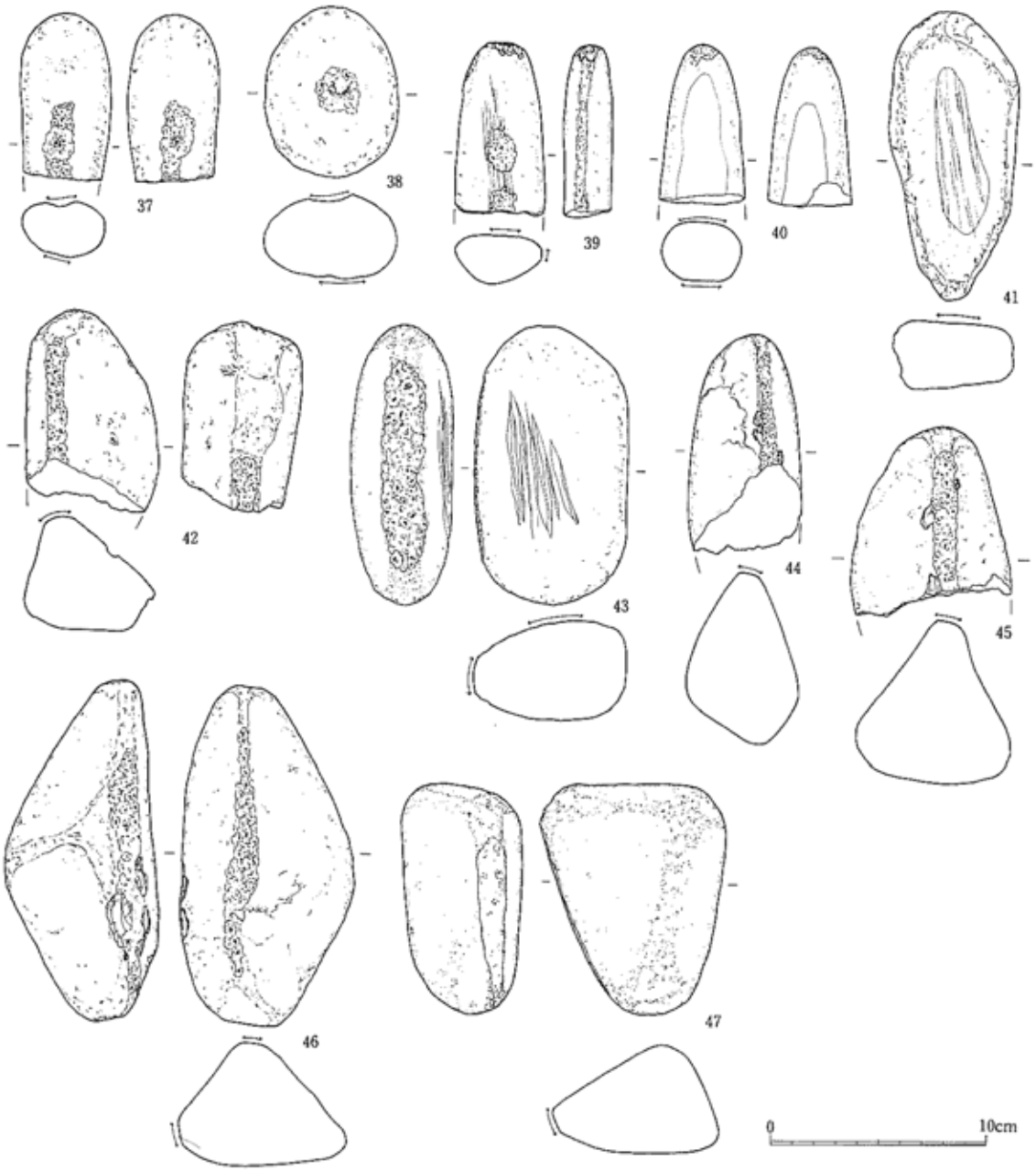
番号	層	区	器種	石材	長	幅	厚	重	備考	登録	写真
21	2	東側	楔状石器	珪質頁岩	6.3	3.7	1.3	37.3	器体悉まで摩耗痕	48	4-19
22	4	西側	楔状石器	珪質頁岩	7.3	4.2	1.8	50.9	刃部作り替え	116	4-2
23	4	東側	楔状石器	玉髄	6.5	4	1.6	48.1		62	4-21
24	1	西側	楔状石器	珪質頁岩	7	4.3	1.6	51.1	器体悉まで摩耗痕	53	4-22
25	2	東側	不定形石器	珪質頁岩	6.7	5.7	0.8	19.8		1	4-23
26	2	東端	不定形石器	珪質頁岩	4.2	4.1	0.7	10		194	

第13図　包含層出土の石器(3)



番号	層	区	器種	石材	長	幅	厚	重	備考	登録	写真
27	4	西側	不定形石器	珪質頁岩	4.3	3.9	1.1	20.6	楔状石器基部再利用？	119	
28	5	東側	不定形石器	碧玉	6	4.4	1.2	28.2		45	4-24
29	2	東側	不定形石器	珪質頁岩	5.1	4.8	1.2	27.1	背面に節理に沿う剥離	16	
30	2		不定形石器	碧玉	4.7	3.6	1.1	16.5		79	
31	4	西側	不定形石器	黒色頁岩	2.7	1.7	0.3	1.6		93	
32	4	西側	不定形石器	黒色頁岩	2.6	2.5	0.5	3.9		91	
33	1	西側	不定形石器	珪質頁岩	3.8	3.3	0.8	12	折れは両極、最終	55	4-26
34	2	東側	不定形石器	珪質頁岩	3.1	2.1	0.4	3.1		129	
35	5	東側	不定形石器	玉髄	4.5	3.4	0.7	9.9		65	
36	3	西側	不定形石器	珪質頁岩	5.3	4.9	1	23.6		117	4-25

第14図　包含層出土の石器(4)



番号	層	区	器種	石材	長	幅	厚	重	備考	登録	写真
37	5	ベルト	凹石	凝灰岩	7.6	4.2	2.4	120	折れ	228	5-1
38	4	西側	凹石	安山岩	7.9	6.1	4	210		229	5-2
39	2	東側	磨石	砂岩	8.1	4.3	2.2	160	折れ	235	5-3
40	3	西側	敲石	砂岩	7.4	3.8	2.6	12	折れ	231	5-4
41	4	西側	磨石	安山岩	13.5	5.9	3.9	390		240	5-5
42	2	ベルト	磨石	安山岩	8.5	5.9	5.1	390	折れ	211	5-6
43	1	ベルト	磨石	安山岩	12.9	7.1	4.6	560		212	
44	2	東側	磨石	砂岩	10	8.4	5.1	430	折れ	213	5-7
45	4	西側	磨石	安山岩	8.1	7.6	6.7	480	折れ	215	5-8
46	2	東側	磨石	砂岩	15.6	7	6.3	870		223	5-10
47	4	東側	磨石	安山岩	11.4	7.9	5.4	610		214	5-9

第15図　包含層出土の石器(5)

層	石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔状石器	不定形石器	二次加工剥片	凹石	敲石	磨石	石皿	石棒	剥片	計
1		1	1	1	1	2				1			10	17
2			1	5	1	7	5		2	7	1		32	61
3	3					1		1	2			14	21	
4	2		1	4	3	3	3	2	2	6		1	49	76
5			1	1		2		1		2			9	16
表土	1		2	2	2	7	1	1	1	6		26	49	
計	6	1	6	13	7	22	9	5	7	22	1	1	140	240

第2表　石器組成

(点数)

	珪・頁(%)		黒・頁(%)		玉・碧(%)		珪・凝(%)		流紋岩(%)		粘板岩(%)		計
Tool	45	68.1	7	10.6	10	15.2	2	3	2	3	0	0	66
剥片類	36	25.7	13	9.3	55	39.3	20	14.3	12	8.6	4	2.9	140
計	81	39.3	20	9.7	65	31.6	22	10.7	14	6.8	4	1.9	206

(点数)

	珪・頁(%)		黒・頁(%)		玉・碧(%)		珪・凝(%)		流紋岩(%)		粘板岩(%)		計
Tool	597.3	72.9	43	5.3	140.8	17.2	22.8	2.8	15.1	1.8	0	0	819
剥片類	184.2	16.1	175.7	15.4	516.9	45.3	107.7	9.4	105.6	9.3	50.6	4.4	1140.7
計	781.5	39.9	218.7	11.2	657.7	33.6	130.5	6.7	120.7	6.2	50.6	2.6	1959.7

第3表　剥片石器の石材組成

第3章　考察

1．土器について

a．土器群の特徴

以下では細分層出土の土器を比較することによって、層間で共通する点と相違する点を検討しながら土器群の特徴を捉えることとする。1 層・5 層出土土器は少数なので、2〜4 層を中心にみる（第 1 表）。

はじめに各層に共通する特徴をあげると、

①胎土にはすべて繊維が多量に含まれている。

②特徴を明確に捉えられる資料はないが、器種は深鉢がほとんどであると予測される。器形は、頚部に若干のくびれを持ち口縁が外反あるいは外傾気味に立ち上がるものと、直立気味に立ち上がるものとの 2 者があると見られる。口縁には波状縁と平縁がある。底部は平底がほとんどであるが、1 点のみ丸底がある。平底には胴部下端が張り出し揚底風になるものが含まれる。

③口唇、口縁上端に刺突・押圧縄文や刻みが加えられるものが 2 割程度ある。刺突は丸棒の先端を斜めに押し付けた例が多い。

④口縁部あるいは頚部に文様帯をもつものはごくわずかである。装飾文様には、口縁部に幅広で浅い沈線を横に引くもの、頚部の無文部に 4 本の沈線を斜めに引き、連続する山形のモチーフを描くかと見られるものがある。胴部破片として集計した、斜行縄文に竹管刺突文が加えられる例も、おそらく頚部にあたるものと考えられる。他に表立出土資料に、口縁直下に単節 0 段多条の多段末端ループ文を施文し、その下を無文帯としたものがある（第 10 図 151）。

⑤口縁部から胴部に施文される地文の種類では、斜行縄文が最も多く 6・7 割を占め、次いで羽状縄文の 2・3 割、多段末端ループ文の 1 割ほどの順となる。網目状撚糸文もごくわずかある。羽状縄文で菱形の構成を示すものはわずかに確認されたのみであるが、小破片が多いため実際はより多い可能

性もある。多段末端ループ文は胴部破片よりも口縁部破片で出現率が高いので、口縁部に施文されることが多かったと考えられる。ただし、末端ループの重なりは数段以上のものが各層に見られ、中には第10図146a～146cのように、口縁から胴部下半にまで連続して施文される例もあることから、口縁部に限定されていたとは言えない状況である。

⑥縄文原体は多様であるが、通常の単節が5～6割と最も多く、単節0段多条が2割強、複節もバラエティーをもちながら1～2割を占める。単節0段多条は羽状縄文と多段末端ループ文で多用される傾向がある。羽状縄文では、結束が非結束を上回っている。結節回転文は各層にわずかずつある。原体の長さは長い例が多いが、結束羽状縄文の場合に原体が短かく、結束部を強調するかのように回転したものがある。

⑦平底の底面・胴部下端には縄文・連続刺突文が施文される。

層間での相違点は少ない。

⑧地文の種類で、斜行縄文と多段末端ループ文が上層ほど増加し、羽状縄文が逆に減少している傾向が若干ある。

⑨羽状縄文の原体の種類で、単節0段多条が上層ほど増加する傾向がある。

以上より各細分層間で質的に明瞭な違いを認めることは困難である。地文と原体の種類の組成が連続的に変化しているかのようであるが、本資料は包含層の堆積状況があまり良好ではなく、しかも量的に十分な資料とは言えないため、この点については保留としておきたい。したがって本遺跡出土の土器群の特徴は、全層の資料をあわせて捉えざるを得ない。その内容は上述した共通点となる。

b．土器群の編年的位置づけ

本土器群の最大の特徴は、胎土に多量の繊維を含み、深鉢主体で、装飾的な文様帯をほとんど持たずに地文のみによって構成される点にある。このような土器群は、東北地方南部にあっては一般に大木1式とされている。県内の資料としては、仙台市三神峯遺跡Ⅱ層(白鳥1974)、同遺跡北斜面遺物包含層2b層（岩淵・佐藤1980）、名取市今熊野遺跡西側遺物包含層（小川・村田1986）、鳴瀬町里浜貝塚梨木東地点（阿部・須田 1994）などがある。ただし、これらの資料とはいくつかの点において相違がある。すなわち三神峯Ⅱ層・今熊野西側遺物包含層には、口縁部や口縁上端に刺突・刻みがあるものはない。底部は全て平底で、底面への施文は縄文だけである。地文では羽状縄文が最も多く、それらのほとんどは非結束である(相原1990)。羽状縄文は菱形の構成をとるものが目立ち、装飾的な効果をもたらしている。多段末端ループ文は口縁部に限定されている。三神峯北斜面遺物包含層 2b層・里浜貝塚梨木東地点では地文は斜行縄文が最も多いが、他は三神峯Ⅱ層と同様な傾向にある。

以上のように、本土器群はこれまで大木1式とされてきた土器群と明確な装飾文様をほとんど持たない点で共通するものの、丸底の有無、口唇部・口縁上端への刺突・刻みの有無、地文の特徴、底面への施文法において相違が認められる。一方、これらの相違点は大木1式以前の上川名式に比定されている一部の土器群との共通点にもなっている。すなわち、三神峯遺跡Ⅱ層では底部は平底主体ではあるが丸底を含む。口唇や口縁上端への刺突・刻みは見られないが、地文には結束羽状縄文が多い。底面への施文は縄文のみである(白鳥1974)。川崎町前田遺跡北側包含層(稲原・手塚ほか1987)では、

平底主体で丸底風の平底を含み、口唇部や口縁上端に刺突・押圧縄文・刻みをもつものが一定量ある。地文では結束羽状縄文・結束斜縄文が4割強を占め、非結束斜行縄文を上回っている。多段末端ループ文は口縁部に限定されない。底面から胴部下端には縄文と刺突文の2種が施文される。もちろん、三神峯Ⅲ層・前田遺跡北側包含層では、口縁部～頚部にかけて装飾文様のあるものが本土器群よりも多く見られ、明確な相違がある。特に前田遺跡では、連続刺突・平行沈線・押圧縄文・多段末端ループ文による文様モチーフが明確に描かれている。

前期初頭～前葉の土器群については、白鳥良一（1989）が概観を述べ、相原淳一（1989・1990）が細分案を提出している。相原が示した細分案に従って、時期差を表すと考えられる要素を抽出すると、①古い段階では口縁部が内湾する器形が含まれる、②中段階では頚部に段を有するものがある、③口縁部の装飾的な文様帯が次第に減少する、④口唇や口縁上端に施される刺突・刻み目が次第に減少する、⑤新しい段階では底部に施文される比率が減少する、また大木1式にかけて底部文様に刺突文がなくなる、⑥地文は羽状縄文主体のものが大木1式では斜行縄文主体へと変化する、⑦多段末端ループ文は一旦重層化が激しくなり、口縁部だけでなく胴部にまで及ぶが、次第に口縁部に限定されていく、⑧菱形の構成をとる羽状縄文が次第に増加する、⑨縄文原体が結束される比率(特に羽状縄文で)は一旦高まるが、後の大木1式では減少する。この内、③・④・⑨は白鳥が先に述べている特徴である。

本土器群には、装飾的な文様はごくわずかしか認められないが、白鳥と相原の示した上川名式後半の特徴とされる要素がいくつか見られる。したがってここでは、本土器群を上川名式後半に位置づけておきたい。ただし、現在のところ前期初頭～前葉のまとまりのある土器群は県北地域にほとんどなく、本土器群の編年的な位置は確定的ではない。今後、県北地域の資料が増加した段階で地域的な問題を併せてさらに検討すべきである。

2．石器について

ａ．器種組成について

石器は表土出土品を含めて総数240点と少量である。剥片石器には、石鏃・尖頭器・石錐・石匙・箆状石器・不定形石器・二次加工ある剥片・剥片・石核がある（第2表）。定形石器では石匙が最も多く、箆状石器・石鏃・石錐と続くが、発掘時のサンプリング・エラーを考慮すると石鏃・石錐などの小形の石器は本来はより多いと見なくてはならない。礫石器には磨石・凹石・敲石・石皿がある。磨石の点数が目立つが、中でも側縁の稜線を使用した「特殊磨石」（八木 1977）が多い。定形石器の組成は、従来確認されている東北地方南部の早期末～前期初頭の石器群とよく共通している。

石鏃には凹基のものと平基のものとがある。凹基では、大形品の抉りが浅く小形品の抉りが深い傾向がある。いずれも両側辺は直線的に作られている。

石錐には棒状のものと、両側からのノッチによって尖端部を作りだしたものとがある。

石匙は、全体形のわかるものでは縦長剥片素材がほとんどで、形状はいわゆる縦型である。12点中11点が珪質頁岩製である。形状から、Ⅰ類：身部が3辺からなるもの、Ⅱ類：身部が2辺からなり左右非対称形のもの（12･13）、Ⅲ類：身部が2辺からなり左右対称形のもの（20）、に分類した。Ⅰ類

はさらに、ａ底辺がごく短いもの(14)、ｂ底辺が長く、3 辺とも調整されているもの(16～19、他に表土に 1 点)、ｃ底辺は長いが調整されていないもの（15）に細分できる。他に 3 点破損のため分類不能のものがある。Ｉａ類の 30 は、背面右側辺が内湾し、縁辺は急角度でツブレが見られる。右側縁の調整が左側縁の調整を全て切っている。Ｉｂ類は全て身部端に分厚い尖端が作りだされ、17 と 19 には尖端部に稜線の摩耗が肉眼で観察できる。16～19 には、背面への加工のための打面作りが腹面の右側縁や底縁に見られる。これにより、背面左側縁や底縁の調整は緩傾斜で器体の奥にまで入っている。一方背面右側縁の調整は急角度で短い傾向があり、左側縁からの調整を切っている。ツブレや階段状剥離は右側縁に多い。刃部形状は、左側辺が外湾～直線状、右側辺は直線～内湾である。Ｉｃ類の 15 は周辺加工で、石材が石匙の中で唯一珪質頁岩でない。II類はＩ類よりも小形・寸詰まりである。12 には腹面に打面作りの剥離が見られるが、2 側辺とも外湾し縁辺の角度は浅い。III類は、素材面を残すことなく両面加工されたもので、他とはかなり異質である。Ｉｂ類の特徴は、既に梶原(1980･1982)、小川･村田（1986）、秦（1991）、須田（1993）、阿部･須田（1994）らによって指摘されているように、右側縁を中心に刃部再生を受けていることを示している。刃部が急角度で内湾するものはより多くの再生を受けたと考えられるし、Ｉａ類の形状は再生がさらに進行した結果と捉えることもできる。

箆状石器では、21 と 24 に背面(刃部作出の調整が加えられた面)の刃部から離れた器体中央部や基部近くにまで、肉眼で明瞭な摩耗痕が観察される。22 は刃部の作出方向が他の資料と表裏逆になっている。すなわち、箆状石器は通常腹面側が平坦で背面側が盛り上がり横断面はD字形を示すが、この例では刃部が作出された面が平坦である。裏の腹面に刃部方向から加えられた剥離が残り、打点が切られていることと考え合わせ、刃部再生が器体の逆方向に行われた可能性がある。

ｂ．石材組成について

剥片石器に使用された石材には、珪質頁岩・玉髄・碧玉(いわゆる鉄石英を含む)・黒色頁岩・珪化凝灰岩・流紋岩・粘板岩がある（第 3 表）。最も多く使われているのは珪質頁岩で、点数･重量ともに約 4 割を占める。次いで玉髄・碧玉が約 3 割、黒色頁岩が約 1 割となっている。珪質頁岩は周知のように奥羽山脈以西に産する遠隔地石材であり、黒色頁岩は北上山系に産すると言われている。玉髄・碧玉・珪化凝灰岩・流紋岩は一迫川の河床など地元周辺である程度調達可能である(須田 1992)。珪質頁岩はいずれも良質のもので、自然面の付着は少ない。玉髄・碧玉には節理面が多く見られ、良質とは言えない。磨石などの礫石器では安山岩と砂岩が多用されている。これらも地元で調達可能な石核である。

剥片石器の器種と石材との関係を見ると、二次加工されたいわゆる tool 全体では約 7 割で珪質頁岩が使用され、玉髄･碧玉･黒色頁岩は合わせても 2.5 割程度を占めるにすぎない。大形の tool に限ってみると、珪質頁岩の比率はさらに高くなる。剥片では、珪質頁岩は 2 割前後と少なくなり、逆に玉髄・碧玉が 4 割程度と目立って多くなっている。このように、珪質頁岩は玉髄・碧玉を代表とする地元石材と際だって異なるあり方をしているが、実数の上でも剥片よりも tool の方が多く、縄文時代の剥片石器に通常見られる特徴と異なっている。なお珪質頁岩の剥片には、石匙や箆状石器の素材になりうるような大形のものはなく、形態の上で特に縦長のものが多いといったような傾向は認められない。

以上の特徴から考えて、本石器群では良質な石材である珪質頁岩を製品・半製品あるいは剥片の状態で入手し、これを剥片石器の主たる石材として有効に利用したと考えられる。石匙や箆状石器といった大形の石器は、刃部再生を行いながら保持し続けたと予測される。地元石材は珪質頁岩を補填するものとして適宜利用されたと考えられる。これと同様な特徴は、県南端部に所在する下南山遺跡(天野・須田 1993)、県中央部の松島湾に所在する里浜貝塚梨木東地点(阿部・須田 1994)の石器群に見られ、いずれも時期は前期初頭である。遠く離れた遺跡間に共通するこの特徴は、広域に存在したであろう社会的関係の維持システムを復元するための材料となるだろう。

3．遺跡の広がりについて

丘陵頂部はかつて削平を受けたと見られるが、遺構は土壙１基が確認されたのみで、縄文時代前期初頭の住居跡は痕跡も発見されなかった。居住域は調査区外にあったと考えられる。縄文時代の遺物は調査区の東西で採集されるが、北から入る小さい沢で地形的な区切りが出来ていることと、包含層からの距離を考慮すると前期初頭の居住域は調査区の東側に存在すると予測される。

第４章　まとめ

1. 町田遺跡は、宮城県北西部、一迫川にほど近い丘陵地内に位置する縄文時代前期の遺跡である。
2. 検出された遺構は包含層１ケ所、土壙１基である。
3. 包含層から出土した土器群は前期初頭の上川名式後半に位置づけられる。
4. 遺跡は調査区の東西に広がるが、居住域は東側に存在すると予測される。

引用文献

相原淳一　1989　「宮城県・山形県における早期から前期初頭にかけての土器編年について」　『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』　第4回縄文文化検討会シンポジウム資料

相原淳一　1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」　『考古学雑誌』76-1

相原淳一　1994　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉土器群の様相について」　『早期終末・前期初頭の諸様相』　第7回縄文セミナー資料集

相原淳一・手塚　均ほか　1987　「前田遺跡」　『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』　宮城県文化財調査報告書第121集

阿部博志・須田良平　1994　『里浜貝塚IX－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚梨木東地点の調査』　東北歴史資料館資料集36

天野順陽・須田良平　1993　『下南山遺跡』　宮城県文化財調査報告書第155集

岩淵康治・佐藤則之　1980　『仙台市富沢三神峯遺跡発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第25集

小川　出・村田晃一　1986　『今熊野遺跡Ⅱ　縄文・弥生時代編』　宮城県文化財調査報告書第114集

梶原　洋　1980　「三神峯遺跡出土石匙の使用痕研究」　『仙台市富沢三神峯遺跡発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第25集

梶原　洋　1982　「石匙の使用痕研究　仙台市三神峯遺跡出土資料を使って」　『考古学雑誌』68-2

興野義一　1976　「縄文文化」　『一迫町史』

白鳥良一　1974　「仙台市三神峯遺跡の調査」　『東北の考古・歴史論集』

白鳥良一　1989　「前期大木式土器様式」　『縄文土器大観1　草創期　早期　前期』　小学館

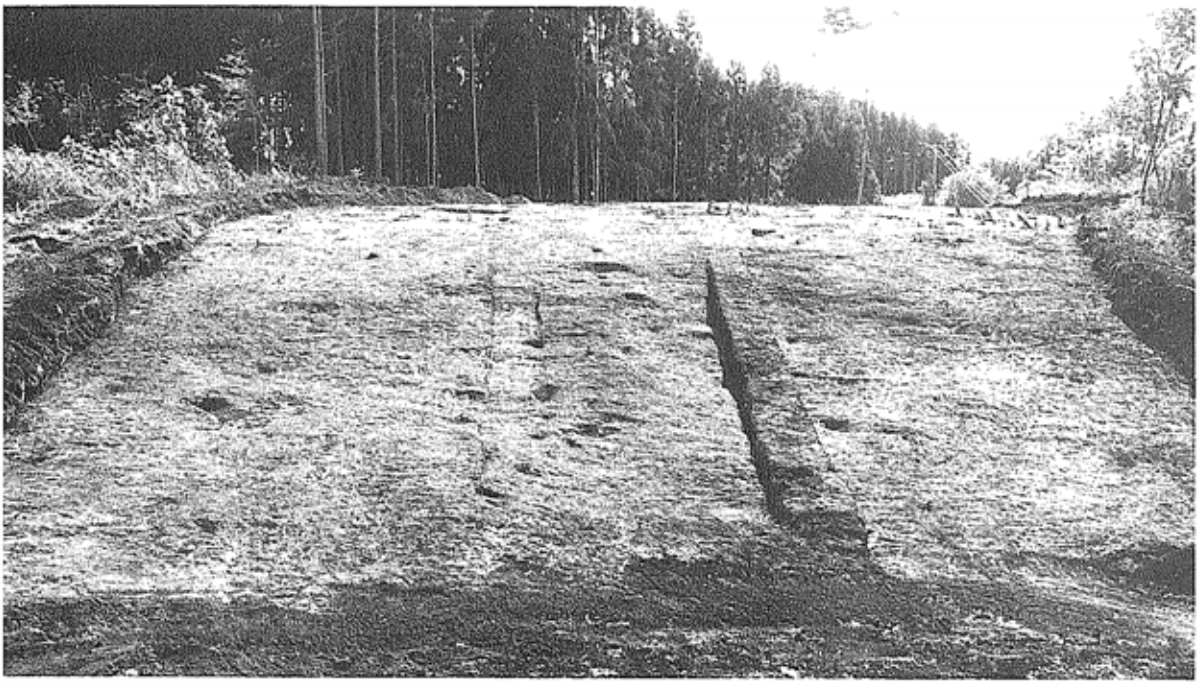
須田良平　1992　「東北・中部の旧石器石材」　『考古学ジャーナル』345

秦　昭繁　1991　「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙－松原型石匙の分布と製作時期について－」　『考古学雑誌』76-4

宮城県教育委員会　1993　『宮城県遺跡地図』　宮城県文化財調査報告書第152集

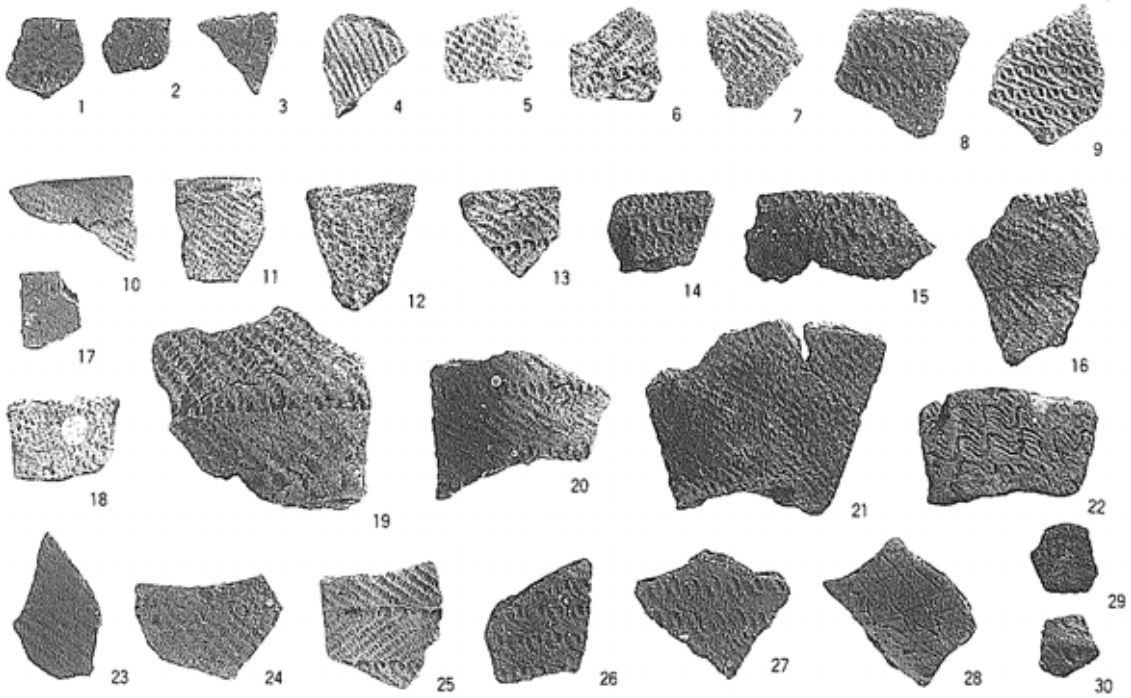
八木光則　1977　「いわゆる「特殊磨石」について」　『信濃』28-4

写　真　図　版

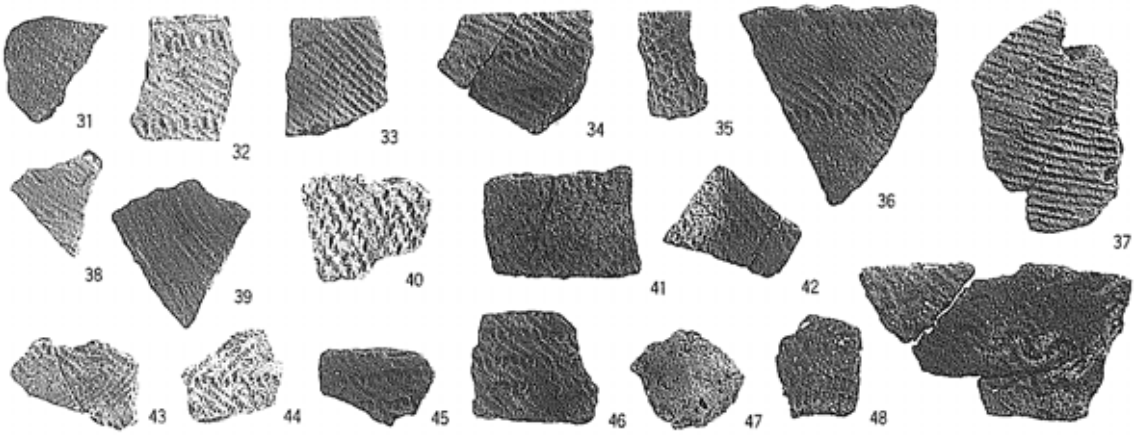


北斜面包含層

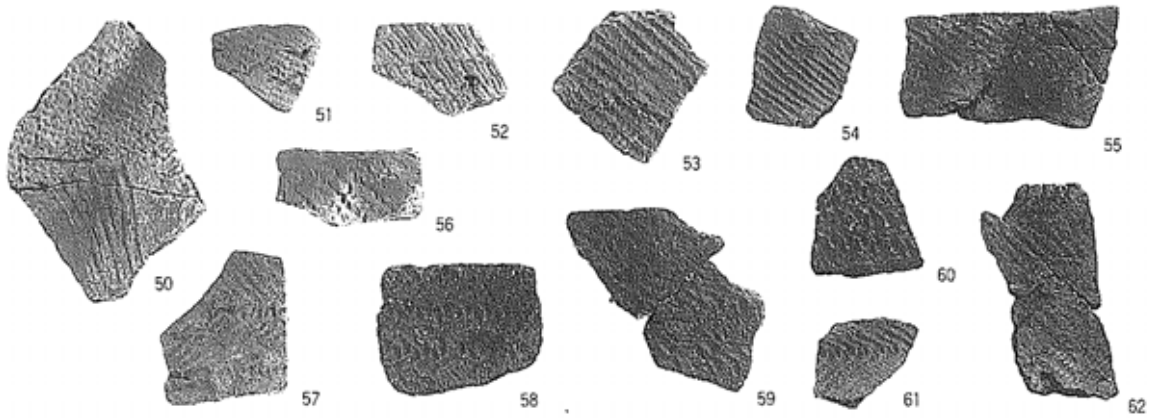
包含層・土器の出土状況



包含層１層(上１段)・２層出土土器

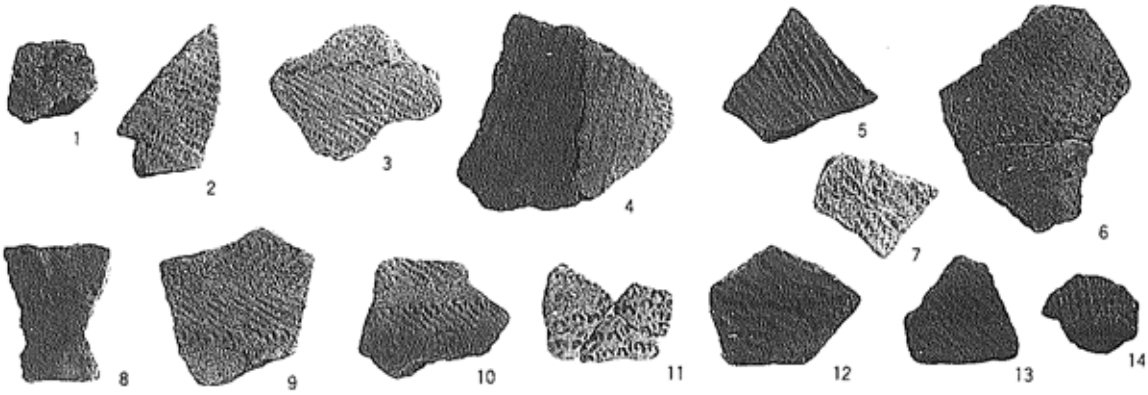


包含層３層出土土器

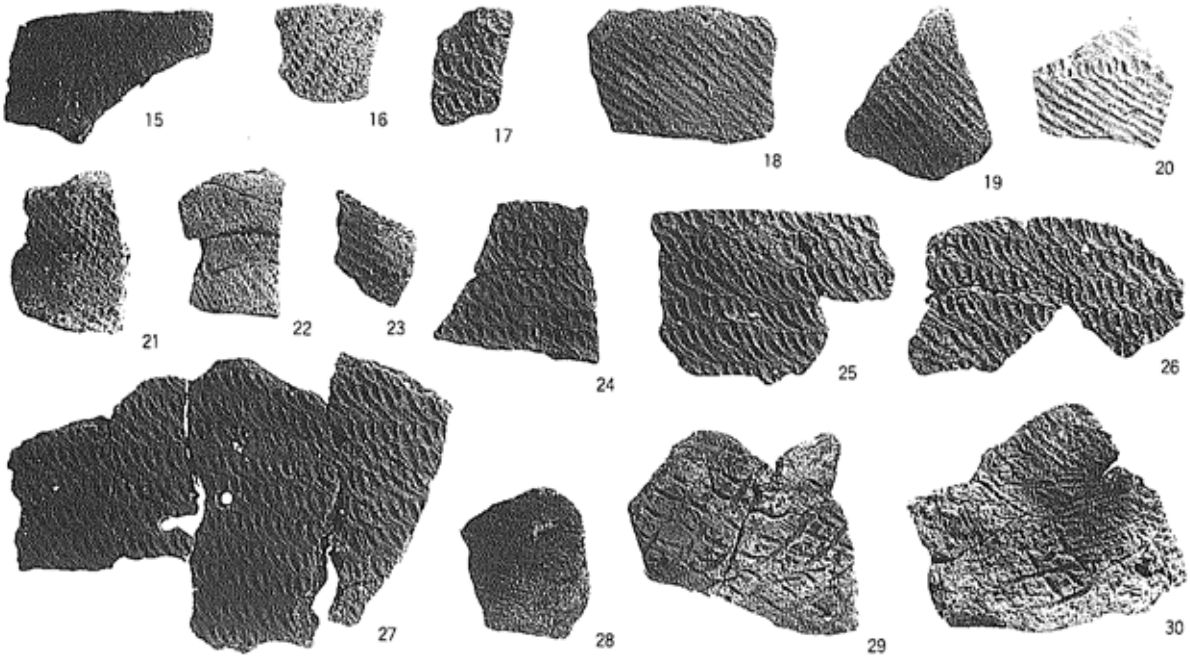


包含層４層出土土器(1)

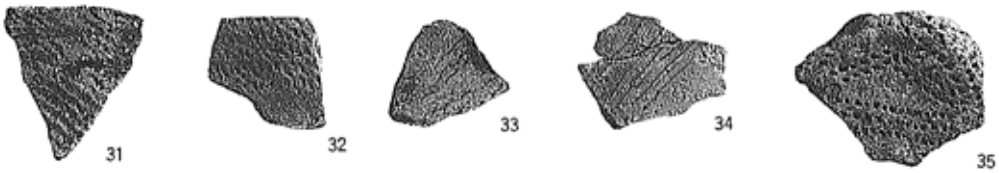
写真図版２



包含層 4 層出土土器(2)

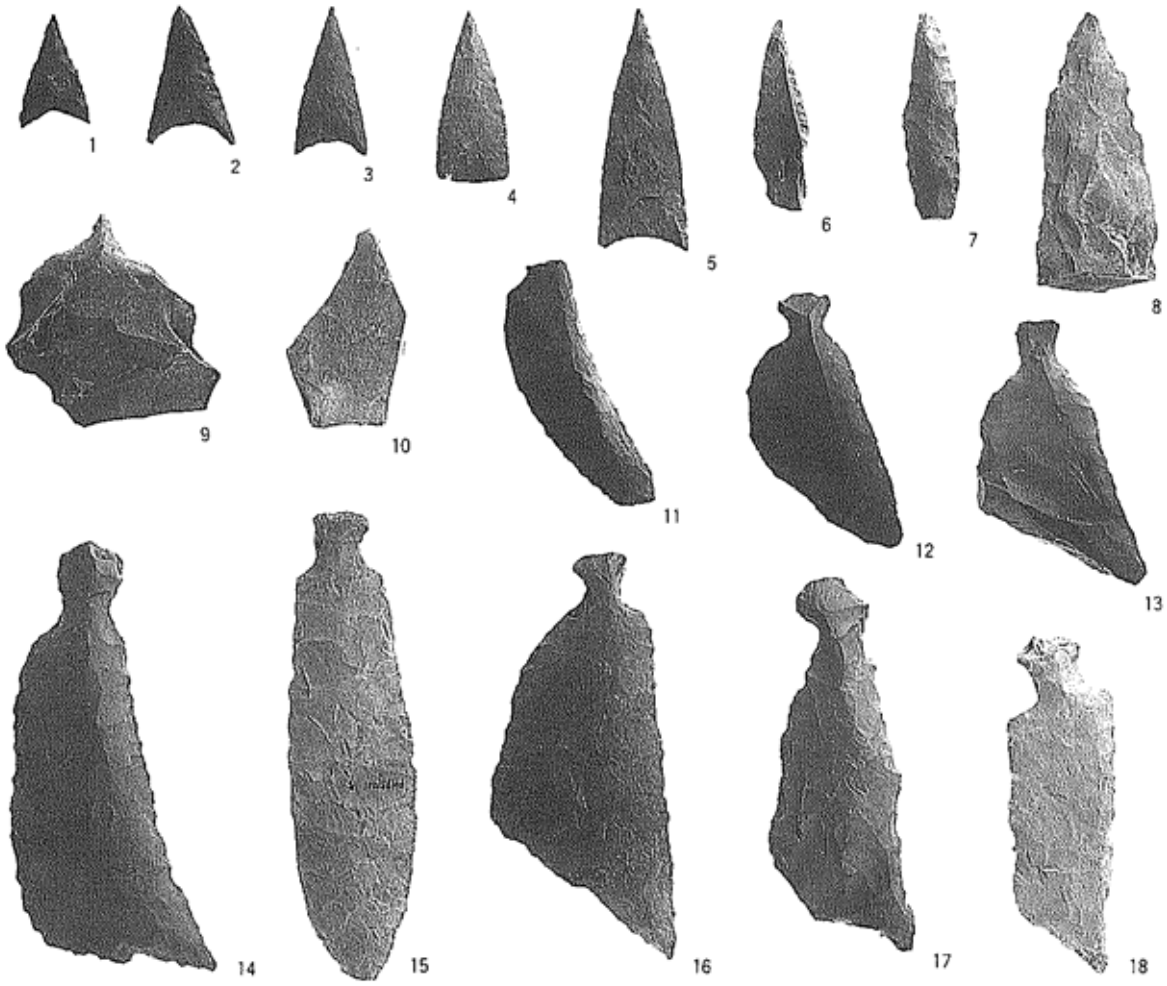


包含層 5 層出土土器

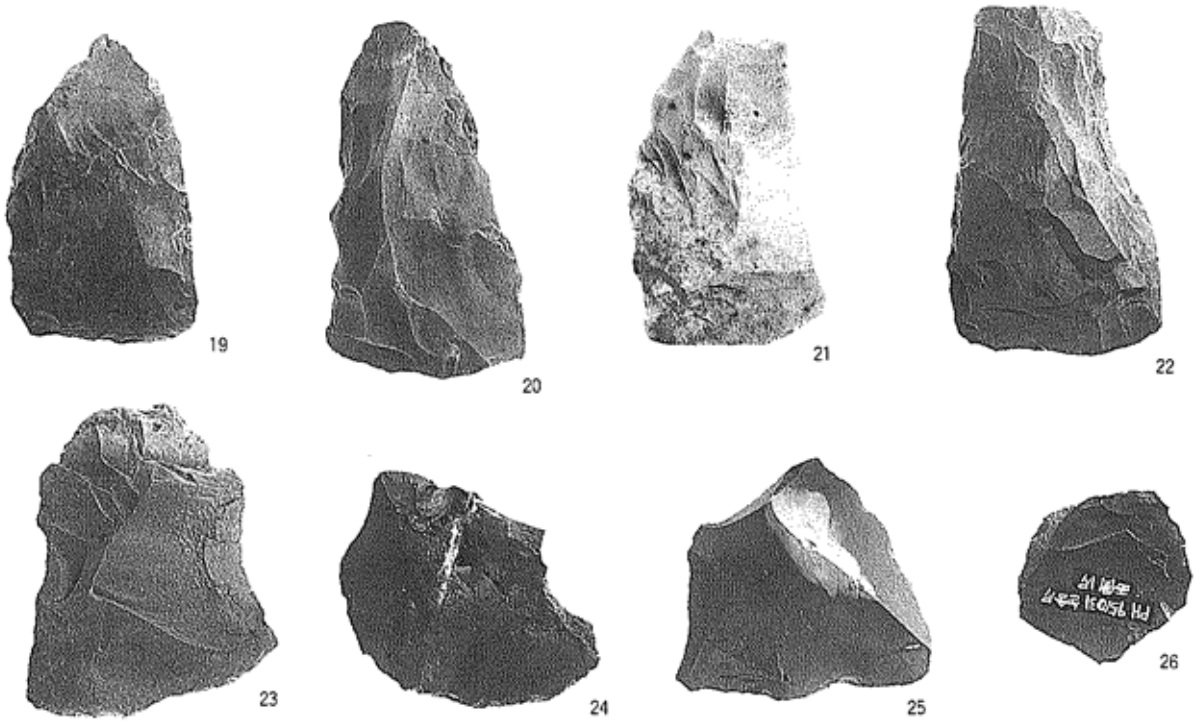


表土ほか出土土器

写真図版 3

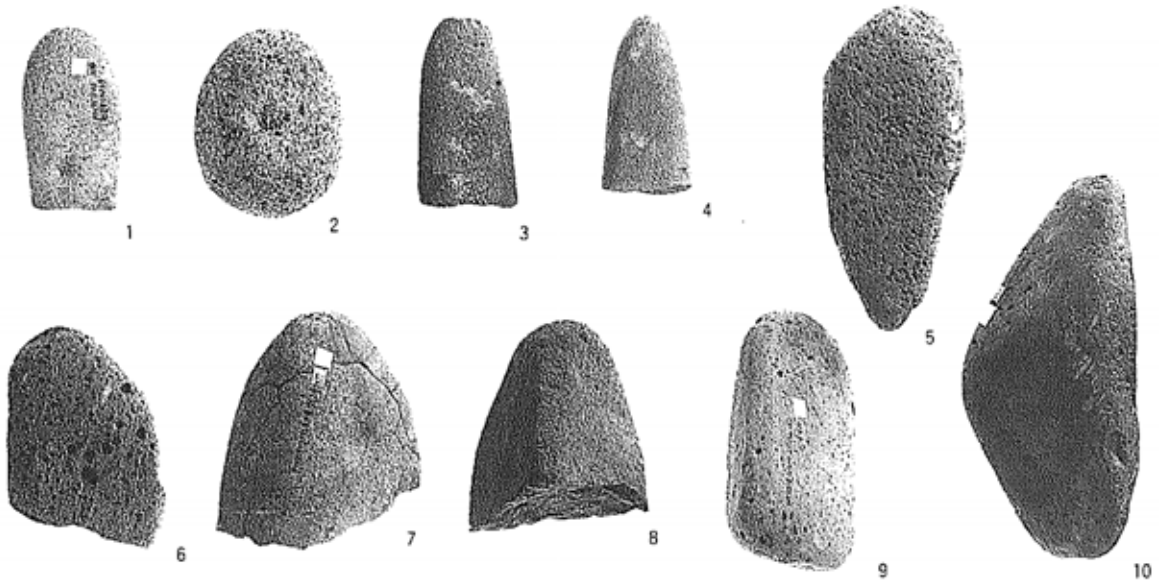


包含層出土の石器(1)



包含層出土の石器(2)

写真図版 4



包含層出土の石器(3)

栗　原　寺　跡

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……125
第Ⅱ章　遺跡の概要……127
第Ⅲ章　調査の方法と経過……129
第Ⅳ章　発見された遺構と出土遺物……129
第Ⅴ章　まとめ……137

調 査 要 項

遺　　跡　　名：栗原寺跡（りつげんじあと）
宮城県遺跡地名表登載番号：43003
遺　　跡　　記　　号：ＰＦ
遺　　跡　　所　　在　　地：栗原郡栗駒町栗原西沢
調　　査　　主　　体：栗原町教育委員会
調　　査　　担　　当：宮城県教育庁文化財保護課
調　　査　　期　　間：平成７（1995）年９月11～20日
調　査　対　象　面　積：1400㎡
発　掘　調　査　面　積：380㎡
調　　査　　員：斎藤吉弘・佐藤則之・東理浩明
調　　査　　協　　力：宮城県築館土地改良事務所
及川組
整　理　参　加　者：鎌田惠子・国松美枝子・佐藤由美子・菅原友子

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境（第１図）

栗原寺跡は、東北自動車道若柳金成インターチェンジの西方約 4.5㎞・栗原郡栗駒町栗原西沢に所在する。この場所は栗駒町の東端部にあたり、南は同郡築館町、北東は同郡金成町との町境に近い。

遺跡の所在する栗駒町は宮城県の北西端に位置しており、北を岩手県西磐井郡に接している。この周辺を中心に宮城県北西部の地形を概観すると、西部では奥羽山脈が南北に縦走し、そこから派生した数多くの丘陵が緩やかな起伏をもって東へ延びる。これらの丘陵は陸前丘陵と呼ばれている。栗原郡付近の地域では、陸前丘陵の一部である築館丘陵が、奥羽山脈に源を発する一迫川や二迫川、三迫川などによって複雑に開析されて、樹枝状を呈している。またその麓には扇状地性低地（迫川低地）が開けている。

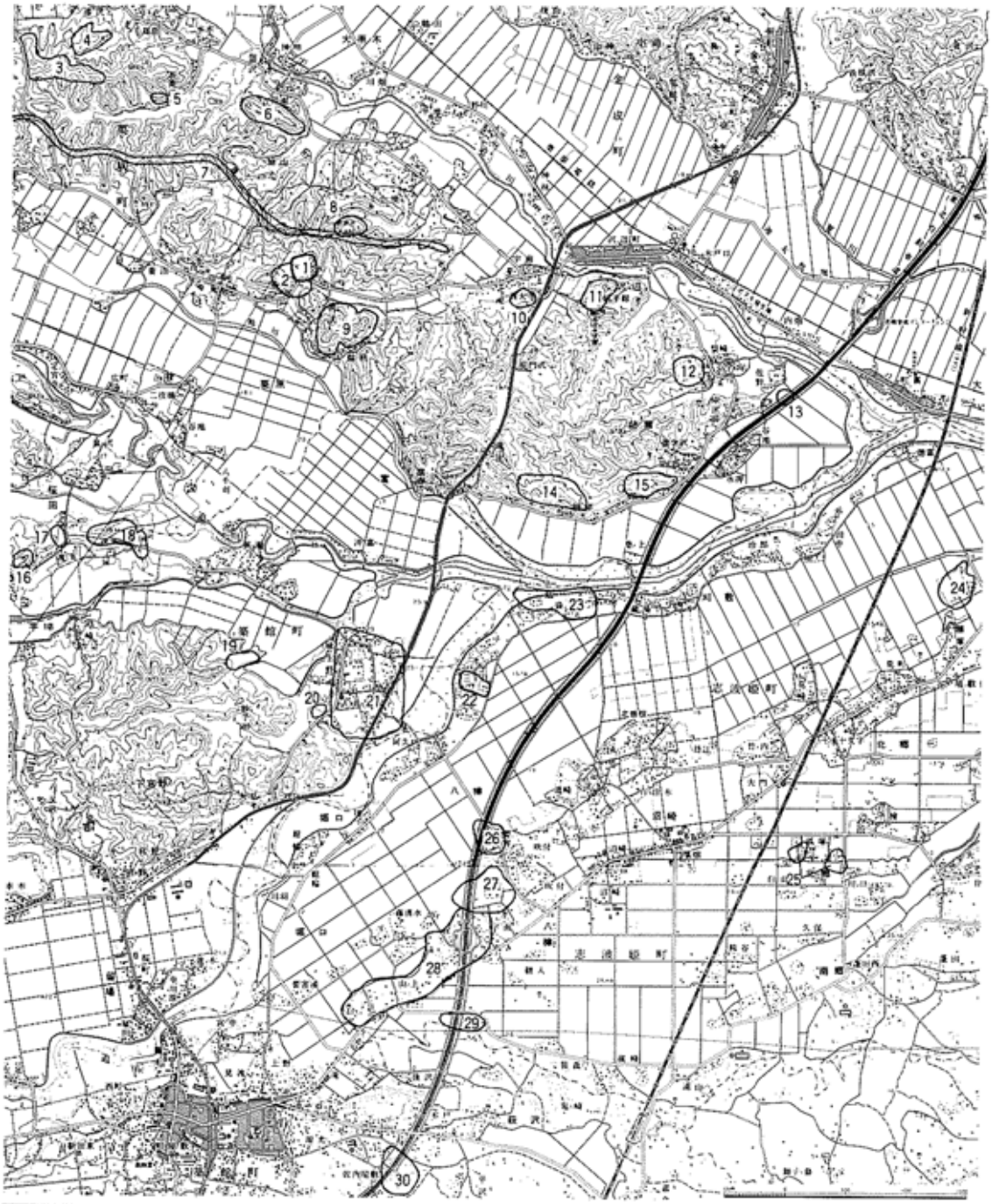
栗駒・築館・金成三町の町境付近には、築館丘陵の一部が北西の栗駒町中野付近からから南東の金成町姉歯付近まで細長く延び、標高 30～90mの断続的な丘陵地帯を形成して、二迫川と三迫川の分水嶺となっている。この丘陵地帯を構成する丘陵の一つに、標高 85.3mの蛇田山がある。栗原寺跡はこの蛇田山の麓、標高 20～30mの地点に立地している。この地点は、東の三迫川流域の沖積地から深く入り込んで丘陵地帯を半ば分断する沢の沢頭付近にあたり、南はごく緩やかな鞍部を経て二迫川流域の沖積地に面している。

本遺跡の周辺には縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が数多く分布しており、これらの多くは一迫川や二迫川などの河川流域の河岸段丘や丘陵上に認められる。

このうち古代の遺跡についてみると、栗原寺跡から二迫川流域を挟んだ南側の河岸段丘上には、奈良時代後期に造営された城柵である伊治城跡がある。その周辺の段丘や丘陵上には、古墳・奈良・平安時代の集落跡である長者原遺跡の他、遺物包含地である甚内屋敷遺跡・堀切長根遺跡・泉沢Ａ遺跡・中島遺跡などが分布している。また一迫川流域の小丘陵や河岸段丘上には、佐内屋敷遺跡・御駒堂遺跡・宇南遺跡・鶴ノ丸館遺跡・佐野遺跡・糠塚遺跡など、かつて発掘調査が行われた集落遺跡がある。

中世には、この丘陵地帯付近が交通の要衝にあたっていたこともあって、文治 5(1189)年の奥州合戦の際には栗原・三迫付近が戦場となった(『吾妻鏡』)。その後この付近には多くの城館が営まれた。栗原寺跡が所在する蛇田山の山頂の蛇田山空堀跡をはじめ、沢を挟んだ対岸の栗原館跡、その他下館館跡・梨崎館跡・沢辺館跡・西館館跡・大原木館跡・猿飛来館跡などが知られている。

また一迫川上流の同郡花山村本沢字御堂に所在する花山寺跡においては、昭和 31(1956)・53(1978)年、平成元(1989)年に発掘調査が行われ、大御堂とみられる礎石建物跡、橋脚や中島を伴う池跡などが検出され、12 世紀代のかわらけや陶器が出土し、平安時代末期の臨池伽藍様式の寺院跡と判明している。栗原寺跡からはやや距離をおくが、比較的近在する臨池伽藍の好例である。



No	遺跡名	立地	種別	時代	No	遺跡名	立地	種別	時代
1	栗原寺跡	丘陵	寺院跡・包含地	平安	16	中島遺跡	丘陵	包含地	平安
2	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	平安	17	泉沢A遺跡	丘陵	包含地	古代
3	鳥谷ヶ崎古墳群	丘陵	円墳	古墳後、古代	18	長者原遺跡	丘陵	集落跡・城館	縄文、古墳中、古代、中世
4	狼煙来館跡	丘陵端	城館	中世	19	堀切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古代
5	長楽寺跡	丘陵	寺院跡	平安？	20	舘内屋敷遺跡	丘陵端	包含地	縄文・古代
6	大原木館跡	丘陵	城館・包含地	縄文中・晩、中世	21	伊治城跡	段丘	城柵跡	古墳前・中、古代
7	八幡土塁跡	丘陵斜面	土塁		22	刈敷館跡	自然堤防	城館	中世
8	蛇田山空城跡	丘陵頂	城館・包含地	縄文、中世	23	刈敷袋遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古代
9	栗原館跡	丘陵	城館・包含地	縄文、中世	24	鞠塚遺跡	段丘	集落跡	弥生、奈良・平安
10	西館館跡	丘陵	城館	中世	25	狐塚遺跡	段丘	窯跡	古代
11	沢辺館跡	丘陵	城館	中世	26	鶴ノ丸館遺跡	段丘	城館・集落跡	縄文晩、弥生～近世
12	柴崎館跡	丘陵	城館	中世	27	宇南遺跡	段丘	集落跡・城館	縄文前・晩、弥生～近世
13	佐野遺跡	丘陵	集落跡	弥生、古代	28	御駒堂遺跡	段丘	集落跡	縄文、弥生～近世
14	上館館跡	丘陵	城館	平安	29	山ノ上遺跡	段丘	集落跡	縄文、古代
15	下館館跡	丘陵	城館	中世	30	佐内屋敷遺跡	丘陵	集落跡	縄文中、弥生、古代

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章　遺跡の概要

栗原寺は、『吾妻鏡』の文治六(健久元＝1190)年の条に、奥州藤原氏の残党大河兼任が討たれた場所として、その名が見られる。また後世の『義経記』には、源義経が二度の平泉入りの際に駐留して、平泉と使者を遣りとりし、僧兵に送られて出発した寺として描かれている。このように栗原寺は、奥州藤原氏に関係の深い大寺として人々に認識されていた。

栗原寺が所在した位置については、疑実在説も含めて諸説があったが、『奥羽観蹟門老志』や『仙台藩安永風土記書上』にいうように栗原郡尾松栗原の上品寺および和合院境内がもっとも有力な候補地であった。また上品寺およびその東隣の薬師神社には、境内「弁天池」および南方約 700mの「仁王田」から出土したと使えられる仏像八個体分が保管されていた。付近には「仁王田」の他に、「寺家跡」「和合院跡」等の名が残っている。

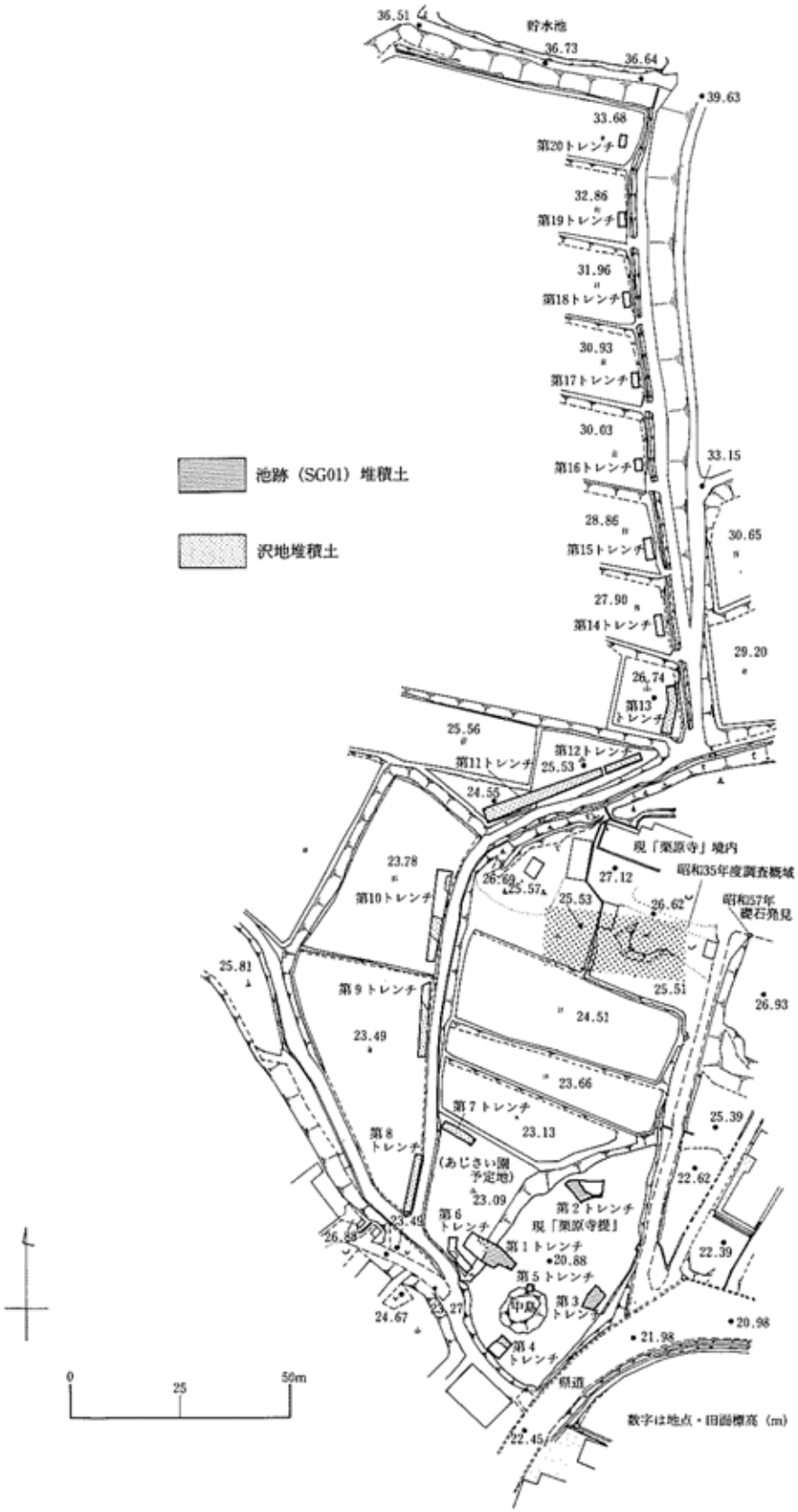
昭和 35(1960)年、上品寺境内の開田工事にあたって、柱列跡が発見され、多数の土師器片が出土した。状況を視察した高橋富雄氏・大塚徳郎氏・加藤孝氏らによって礎石地形とみなしうるのものの遺存が確認され、土師器は平安時代初期ごろのものと認められた。これを契機に昭和 37(1962)年、氏等を中心とする調査団（栗原寺調査団）によって、上品寺本堂の前庭などを対象に発掘調査が行われた。

その結果、竪穴式住居跡群および土師器焼成遺構、これよりも新しい 2 時期の礎石建物の地形や根石、掘立柱穴群等が検出された。また先に述べた仏像は、その制作技法から平安時代中期から後期にかけてのものと推定された。竪穴式住居跡および土師器焼成遺構から出土した土師器は「陸奥国分寺出土上層土師器と同形式のもの」と確認され、付近一帯の同時期の遺物包含地と併せて平安時代初期の集落跡（尾松遺跡）と認識された。

この調査によって、この上品寺境内が栗原寺跡であると確認された。礎石建物跡が金堂や本堂といった中心伽藍であると推定され、さらに「弁天池」をも含めた臨池伽藍の展開が予想された。その年代は、建物と重複する土師器焼成遺構の年代、建物の方位・間尺、残存仏像の年代などから、平安時代中期以降と考えられた。

その後昭和 57(1982)年、境内の現状変更のため、旧調査区の東側にあった小池の水を落としたところ、建物跡の一部と見られる礎石が発見された。

遺跡の現状は、寺院境内、水田、「弁天池(およびその中島)」などである。「弁天池」の現状はため池で、南東の堤防の上を県道が通じている。この池は開田の際に約二分の一の広さになったといわれている。なお「上品寺」の寺号は昭和 59 年に「栗原寺」に改称され、「弁天池」も現在は「栗原寺堤」と呼ばれている。今回の調査で確認した古代の池跡と区別するため、以下の文中では「栗原寺堤」を「現池」と呼ぶ。


池跡（SG01）堆積土
沢地堆積土
貯水池
36.51
36.73
36.64
39.63
33.68
第20トレンチ
32.86
第19トレンチ
31.96
第18トレンチ
30.93
第17トレンチ
30.03
第16トレンチ
33.15
28.86
第15トレンチ
30.65
27.90
第14トレンチ
29.20
26.74
第13トレンチ
25.56
第11トレンチ
第12トレンチ
25.53
24.55
現「薬師寺」境内
昭和35年度調査概域
23.78
第10トレンチ
26.69
25.57
27.12
25.53
26.62
昭和57年
礎石発見
25.81
第9トレンチ
25.51
26.93
24.51
23.49
23.66
第7トレンチ
23.13
25.39
第8
トレンチ
(あじさい園
予定地)
23.09
22.62
第2トレンチ
現「薬師寺提」
23.49
第6
トレンチ
26.88
第1トレンチ
20.88
22.39
第5トレンチ
中島
第3
トレンチ
24.67
23.27
20.98
21.98
第4
トレンチ
県道
0
25
50m
数字は地点・旧国標高（m）
22.45

第２図　トレンチ配置図

第III章　調査の方法と経過（第２図）

今回の調査は、宮城県築館土地改良事務所を主体とする栗原寺の史跡公園整備（「ふるさと・水と土保全モデル事業（栗原根岸地区）」）に関わる確認調査である。

計画は現地の中島北側に管理橋を設置して東西両岸に八ツ橋を渡し、東岸に管理通路を、北岸・西岸に親水護岸を設け、隣接する水田を公園化し、さらにその西側から北のため池に至る農道を拡幅して管理用道路とし、併せて小水路を設置するというものであった。

そこで八ツ橋設置地点に第１・３トレンチを設定した。現地の北岸の、昭和57年に礎石が発見された地点と中島を結んだ線上には、第２トレンチを設定した。現池の南岸の、礎石建物跡と中島を結んだ線の延長上には、第４トレンチを設定した。管理橋設置地点に第５トレンチ、現地の西に隣接する休耕田（あじさい園予定地）に第６・７トレンチ、農道が拡幅される部分の水田に第８〜20トレンチを設定した。第14〜20トレンチは、各水田について、削平が及んでいる可能性がより少ないと思われる南寄りの部分に設定した、小規模なものである。

調査は平成７年９月11日に開始した。重機によって表土・堆積土を除去し、トレンチを掘削した。

第１トレンチの掘り下げにおいて池跡を確認した。第１トレンチの北半のみは状況を確認するため地山面まで掘り下げたが、第１トレンチの南半と第３トレンチは池底整地の上面まで、第２トレンチは池底整地の底面までの掘り下げにとどめた。第４トレンチは堆積土が余りに軟弱な為、池堆積土を完掘することはできなかった。

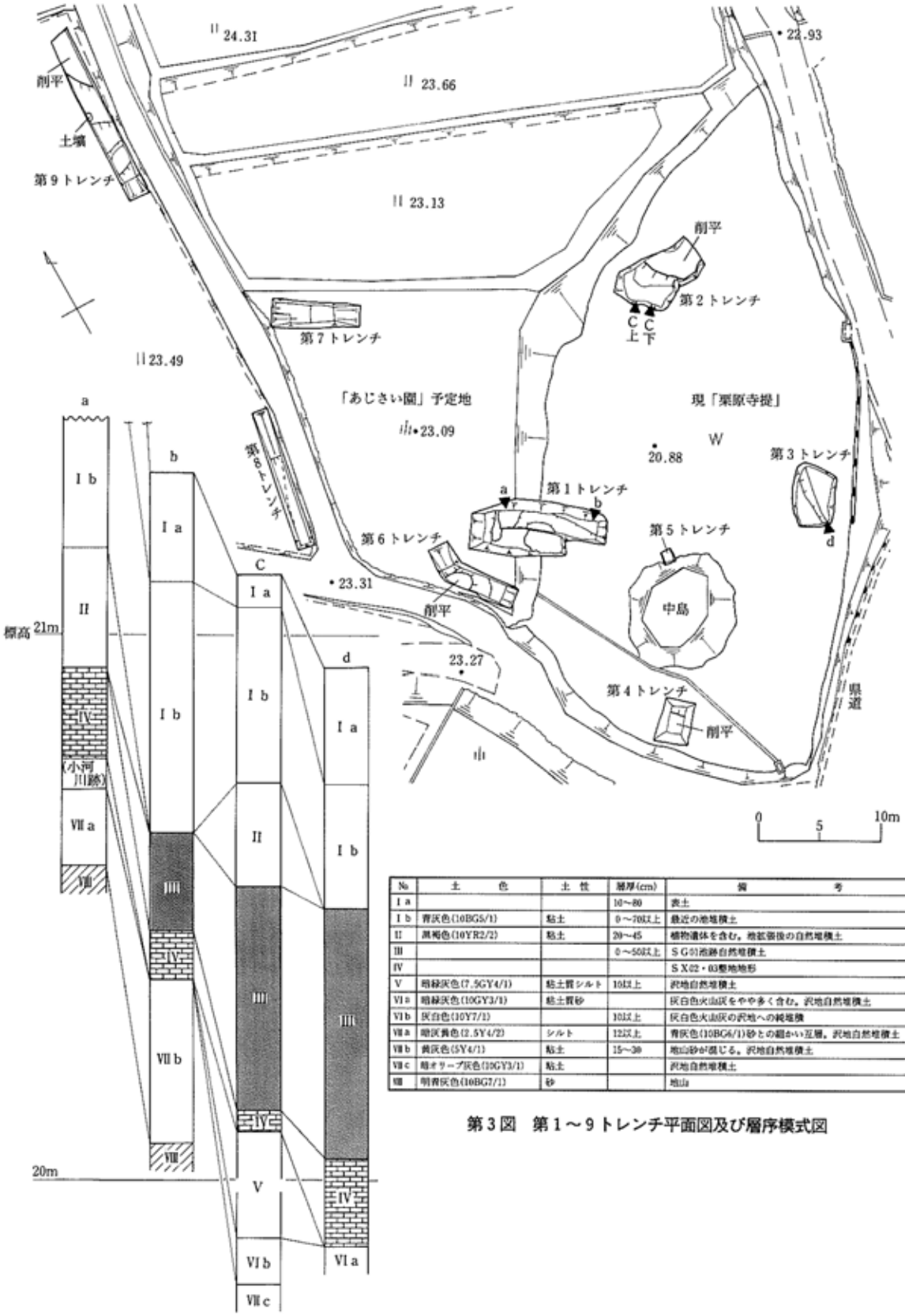
第８トレンチは、調査可能範囲が狭く、堆積土も軟弱かつ深い為、崩落の危険があり、トレンチを完掘することができなかった。

第10〜13トレンチにおいて断続的な沢地形を確認したが、これは掘り下げなかった。第14〜20トレンチはいずれも削平されており、遺構や沢はなかった。

各トレンチについて精査後、簡易遣り方測量によって20分の１および50分の１の平面図を作成し、必要に応じて断面図・柱状図を作成した。また35㎜白黒写真・カラースライドによる記録も併せて行った。遺構の保護と現場の安全確保の為トレンチは順次埋め戻し、平成７年９月20日には調査の全てを終了した。

第IV章　発見された遺構と遺物

今回の調査では、前述のように第1〜20トレンチを設定した。このうち第1〜5トレンチにおいて池堆積土と池に付属する施設、および池跡より旧い溝１条を確認した。また第1〜3，7〜9トレンチにおいて沢地と見られる自然堆積層を確認し、第９トレンチでは土壙１基を確認した。また第1〜3・6〜9トレンチにおいて遺物が出土している。それ以外には遺構・遺物は発見されなかった。



No	土　色	土　性	層厚(cm)	備　考
Ⅰa			10～80	表土
Ⅰb	青灰色(10BG5/1)	粘土	0～70以上	最近の池堆積土
Ⅱ	黒褐色(10YR2/2)	粘土	20～45	植物遺体を含む。池廃棄後の自然堆積土
Ⅲ			0～50以上	SG01池跡自然堆積土
Ⅳ				SX02・03整地地形
Ⅴ	暗緑灰色(7.5GY4/1)	粘土質シルト	10以上	沢地自然堆積土
Ⅵa	暗緑灰色(10GY3/1)	粘土質砂		灰白色火山灰をやや多く含む。沢地自然堆積土
Ⅵb	灰白色(10Y7/1)		10以上	灰白色火山灰の沢地への純堆積
Ⅶa	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	12以上	青灰色(10BG6/1)砂との細かい互層。沢地自然堆積土
Ⅶb	黄灰色(5Y4/1)	粘土	15～30	地山砂が混じる。沢地自然堆積土
Ⅶc	暗オリーブ灰色(10GY3/1)	粘土		沢地自然堆積土
Ⅶ	明青灰色(10BG7/1)	砂		地山

第3図　第1～9トレンチ平面図及び層序模式図

以下、第 1〜9 トレンチの調査結果について、その概要を述べる。これらの地区は「現池」とその周囲の沢地であり、各トレンチの堆積状況を模式的に示すと以下の通りである。（第 3 図）

第Ⅰ層：2 層に分けられる。Ⅰａ層は、現水田の盛り土と耕作土、および現池の底のヘドロなどの表土である。Ⅰｂ層は最近の池堆積土であり、第 1〜6 トレンチのいずれでも見られる。厚く均質な堆積で、堆積に先立って大規模な浚渫があり、第Ⅱ層以下の堆積土や地山の高まりを削っている。また遺物が全く出土しない。地形的に地山のレベルが高い第 2 トレンチ北東部や第 4 トレンチ南半部では、第Ⅰ層の堆積のみが見られる。

第Ⅱ層：第 1・2・6 トレンチで見られる。堆積レベルが高く、第 1 トレンチにおいて岸または岬状の張出しと見られるＳＸ03Ａ・Ｂ整地の上を覆っている事から、池が拡張された時期以降の堆積土と考えられる。地形的に地山のレベルが高い第 6 トレンチでは、第Ⅱ層以上の堆積のみが見られる。

第Ⅲ層：ＳＧ01 池跡の埋まり土である。

第Ⅳ層：ＳＧ01 池跡に伴う整地地形、すなわちＳＸ02 とＳＸ03Ａ・Ｂである。

第Ⅴ層：第 2 トレンチの南西壁際でのみ見られる、沢地の堆積土である。底面は南西に傾くが、上面はＳＸ02 整地地形に先立ち削平されている。

第Ⅵ層：第 3 トレンチでみられるⅥａ層は灰白色火山灰を含む沢地の堆積土、第 2・7・8 トレンチでみられるⅥｂ層は灰白色火山灰の純堆積層である。第 7・8 トレンチでは地形的にレベルが高い。第 2・3 トレンチでは上面がＳＸ02 整地に先立ち削平されている。

第Ⅶ層：第 1・2・7 トレンチで見られる、沢地の堆積土である。各トレンチで異なり、また第 1 トレンチでは 2 層に分かれ、それぞれの新旧関係は不明である。第 1 トレンチ東部ではシルトと砂の細かい互層（Ⅶａ）、第 1 トレンチ西部では地山砂の混じる粘土（Ⅶｂ）である。Ⅶｃ層は堆積層から地山への漸移層である可能性もある。第 2 トレンチでは粘土(Ⅶｃ)、第 7 トレンチではシルト質粘土である（Ⅶｄ）。

第Ⅷ層：第 1・2・4・6 トレンチで確認した地山層である。グライ化していない部分では黄灰色を呈する。第 1 トレンチ北半では南と西が高く標高約 20.7m、北東は標高約 19.8mである。

第 2 トレンチでは、北東から張り出すように高くなっており、南と西にむかってやや急激に傾き、西側の裾はトレンチ北隣近くでさらに北東に折れる。第Ⅷｃ層以下までそのまま落ち続けているので、沢地に対して南西に張り出す高まりが存在したと思われるが、現地形にはその形跡はない。

第 4 トレンチでは南半部の第Ⅰｂ層の直下（標高約 20.6m）で露出した。レベルが高いのは本来の南岸に近いためと思われるが、浚渫による削平によってほぼ平坦になっている。北半部では北に傾いていたが、南半部とほぼ同レベルまでしか掘り下げることができなかった。

第 6 トレンチでは、南西から張り出すように高くなっている(トレンチ南西側の現地形に、それに連なる丘陵の張り出しがある)。上面は、一部が耕作により削平されているが、おおむ

ね北東に緩く傾いている。北～南西にやや急激に傾き、北東側の裾はトレンチ外である。高東側は標高約21.2～21.4mで平坦となる。

第7～9トレンチでは、地山面はおおむね南東に傾くが(標高20.8～22.8m)、第7トレンチの南東部は平衡であり、第9トレンチの北部は耕作により削平されている。

なお第1トレンチの第Ⅶ層上面で、自然の小河川跡を検出したが、第Ⅶc・d層との新旧関係は不明である(第4図)。この小河川跡はＳD9溝跡より旧く、トレンチ西部から南東部へ、蛇行しながら流れている。堆積土は8層に細分され、最上層は灰白色火山灰の純堆積であるので、第Ⅵb層が堆積した頃には埋まっていたものと考えられる。

以下、発見された遺構について、その概要を各個に述べる。

ＳG01池跡（第4・5図）

南・北・西岸の一部を検出した。東岸は検出されておらず、全体の平面形や規模は不明である。底面はＳX02 整地地形によってほぼ平坦になっている。西岸はＳX03A・B整地地形で作り出されており、北岸は地山の高まりが張り出している。

埋まり土、すなわち第Ⅲ層は、4層に分けられる。1層は第2トレンチで見られる堆積土で、南側は浚渫により失われている。第7・9トレンチの、池跡に注ぐ沢にも、共通する堆積土が見られる。2層は第1～3トレンチで見られる堆積土である。第1トレンチでは北東部でのみ確認された。第2トレンチでは2層に細分される（b→a）。3・4層は、第2トレンチの地山落ち際でのみ見られる、池跡への流入土である。埋まり土全体の厚さは105㎝である。

堆積土の2層から遺物が出土している。第1トレンチの底面からは、底面に「太上」と墨書された須恵器の坏の底部（第4図1）が出土している（写真図版1－2右）。第2トレンチでは土師器甕および大戸産とみられる須恵器壺の破片（写真図版6－10）、第3トレンチでは土師器甕および須恵器の壺・坏類が出土している。

ＳX02整地地形（第4・5図）

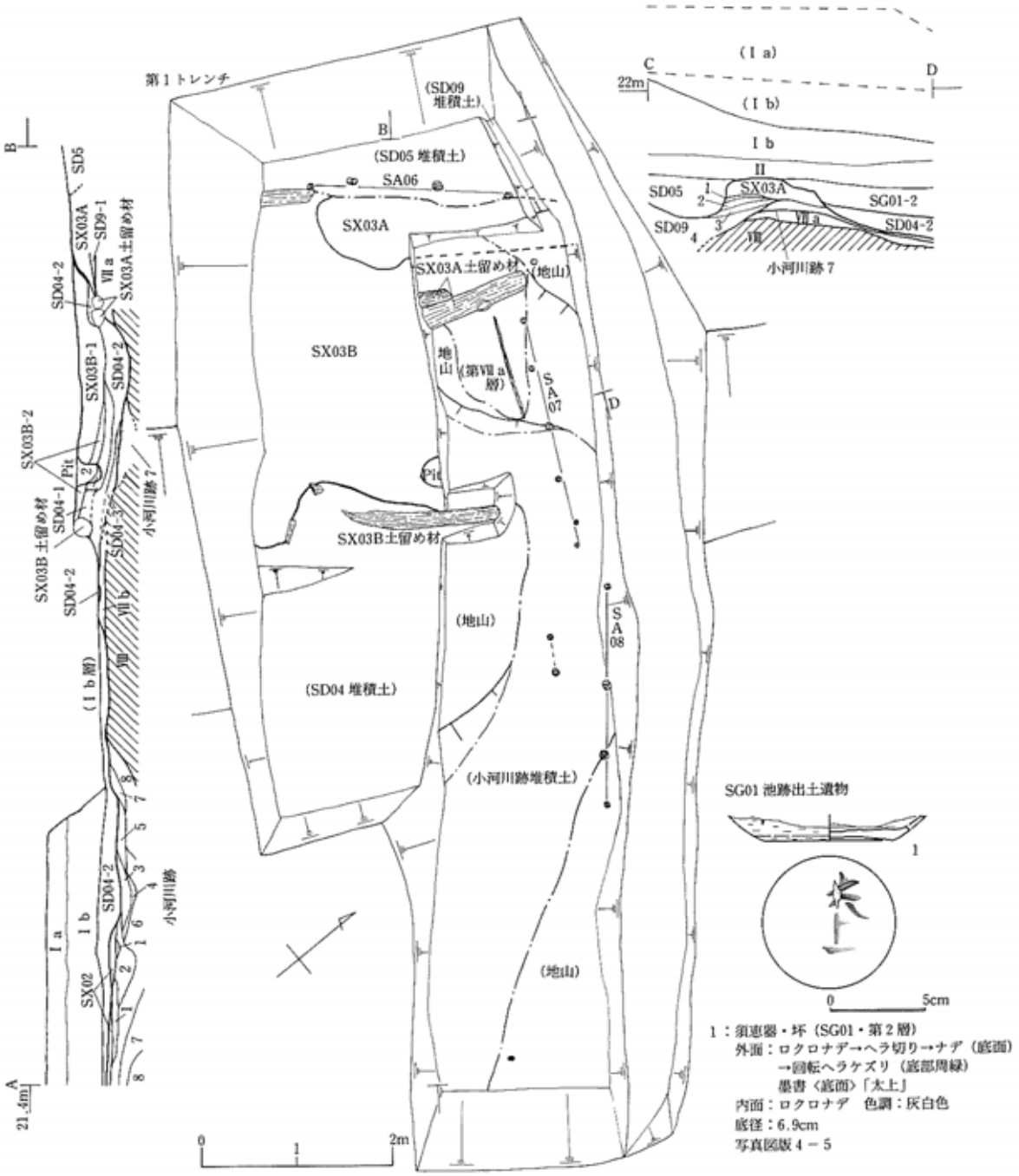
第1トレンチの東部、第2トレンチ南西壁際、第3トレンチの全体において確認した。第Ⅴ層上面に施されており、第Ⅲ層に覆われる。ＳD04溝跡はこの整地を切っている。この整地層の上面が池跡の底面である。

第1トレンチでは上面が標高20.5～20.6m、厚さ約10㎝である。第2トレンチでは上面が標高20～20.2mで極薄い。いずれも上面はほぼ平坦である。

第3トレンチでは、東に傾いて削られた第Ⅵa層上の中央付近に、東に落ちる段が作り出されている。段の西側では上面が20.1～20.2m、厚さが12～17㎝で東側ほど厚い。段の東側では上面が19.9～20m、厚さは0～16㎝で東側ほど急に厚い。段の東西の上面はほぼ平坦である。段の部分は東にやや急に（約22°）傾き、その下半は第Ⅵa層が露出している。

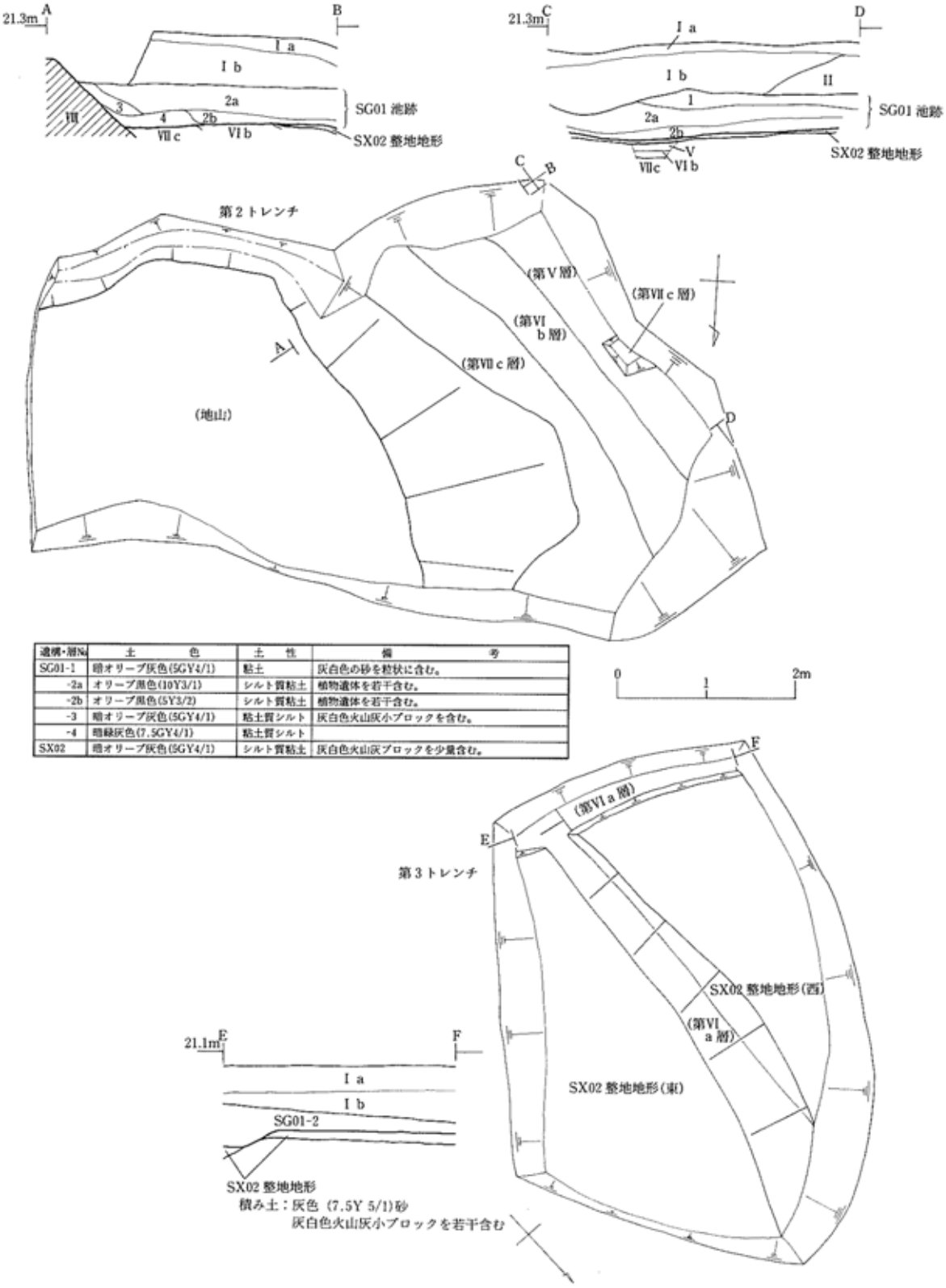
ＳX03整地A・B（第4図）

第1トレンチの西部で確認した、ＳG01池跡の西岸の一部である。B期はA期の部分的な拡張がと考



遺構・層No	土色	土性	備考	遺構・層No	土色	土性	備考
SG01-2	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト質粘土	植物遺体を含む。池跡堆積土(第III層)	SD09-2	黒褐色(10YR3/1)	粘土	
Pit-1	黒褐色(10YR2/2)	粘土		-3	黒褐色(10YR3/2)	粘土	植物遺体を若干含む。
-2	黒褐色(10YR2/2)	粘土	明青灰色(5PB7/1)粘土ブロック含む。	-4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	青灰色(10BG6/1)地山砂を含む。
SD05	黒色(10YR2/1)	粘土	植物遺体を含む。	小河川跡-1	灰白色(10Y7/1)		灰白色火山灰の小河川跡への純堆積
SX02B-1	黒褐色(10YR3/1)	粘土	明緑灰色(10G7/1)砂質粘土ブロック含む。池跡埋整地地形(第IV層)	-2	灰色(10Y4/1)	粘土	明緑灰色(10GY7/1)砂ブロックを含む。
-2	褐灰(10YR5/1)	粘土	明緑灰色(10G7/1)砂質粘土ブロック含む。池跡埋整地地形(第IV層)	-3	明緑灰色(10G7/1)	やや粗い砂	
SD04-1	黒色(10YR2/1)	粘土	植物遺体を含む。	-4	暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)砂		
-2	黒色(10YR2/1)	砂質粘土	植物遺体を少量含む。	-5	黒色(10YR3/1)	粘土	地山砂を含む。
-3	黒褐色(10YR2/2)	粘土	植物遺体を含む。	-6	オリーブ黄色(5Y6/3)	砂	グライ化している部分は緑灰色(5G5/1)
SX03A	黒褐色(10Y3/1)	砂質粘土	青灰色(5BG6/1)地山砂大ブロックを含む。池跡埋整地地形(第IV層)	-7	オリーブ黒色(10Y3/1)	粘土質砂	
SX02	灰オリーブ色(5Y6/2)	砂	池跡流整地地形(第IV層)	-8	灰オリーブ色(5Y6/2)	砂	
SD09-1	黒褐色(2.5Y3/1)	砂					

第4図　SG01池跡・SX02・03A・B整地地形他　平・断面図



遺構・層No	土　色	土　性	備　考
SG01-1	暗オリーブ灰色(5GY4/1)	粘土	灰白色の砂を粒状に含む。
-2a	オリーブ黒色(10Y3/1)	シルト質粘土	植物遺体を若干含む。
-2b	オリーブ黒色(5Y3/2)	シルト質粘土	植物遺体を若干含む。
-3	暗オリーブ灰色(5GY4/1)	粘土質シルト	灰白色火山灰小ブロックを含む。
-4	暗緑灰色(7.5GY4/1)	粘土質シルト	
SX02	暗オリーブ灰色(5GY4/1)	シルト質粘土	灰白色火山灰ブロックを少量含む。

第5図　SG01池跡・SX02整地地形　平・断面図

えられる。

A期はＳＤ09 溝跡より新しく、東側はＳＤ04 溝跡に落ち、西側はＳＤ05 溝跡に切られている。厚さは約 20㎝である。ＳＤ04 溝跡との間には、土留めと思われる木材が複数据えられている。積み土は、地山土や沢地・小河川跡堆積土のブロックを含む黒褐色粘土である。

B期は、池全体の中では局所的なものと思われ、ＳＤ04 溝跡の窪みを埋めるように積み土されている。厚さは最も厚い所で約 25㎝である。積み土はA期に似るが、ブロックの入り方はA期より少ない。

なおこの整地上面で小ピットを確認している。平面形は径約 17㎝ のやや歪んだ円形で、深さは約 25㎝、底面は平坦で壁はやや急に立ち上がり、上端近くてやや開く。性格は不明である。

ＳＤ04 溝跡（第４図）

第１トレンチで検出した。第Ⅶ層上面の小河川跡にほぼ沿って通っている。深さは約 30㎝ で、堆積土は３層に分けられる。この溝は、ＳＸ03Ａ整地の段階の池に付属するなんらかの施設と考えられ、池と同時に埋まっているが、詳細は不明である。

ＳＤ05 溝跡（第４図）

第１トレンチの西端で検出した。ほぼＳＤ09 に沿って南北に流れ、ＳＸ03Ｂ整地を切っている。西壁はトレンチ外であり、またトレンチ内も北端で断ち割ったのみで掘り上げていない。深さは約 40㎝で、断面形は船底型で壁はやや急に立上がり、上端近くてやや開く。この溝は、ＳＸ03Ｂ整地の段階の池に付属するなんらかの施設と考えられるが、詳細は不明である。

ＳＡ06・07・08 杭列（第４図）

ＳＡ06 杭列は、ＳＤ05 の東岸にみられる。トレンチ内にかかった杭は４本で、径 6～10㎝ の丸杭であり、いずれも検出面(第Ⅱ層底面)のやや上まで腐敗せず遺っていた。間隔は南から約 40㎝・90㎝・80㎝ と不規則である。南側の二本の東側には、南北方向の木材が据えられている。これらはＳＤ05 東岸の護岸施設の可能性がある。

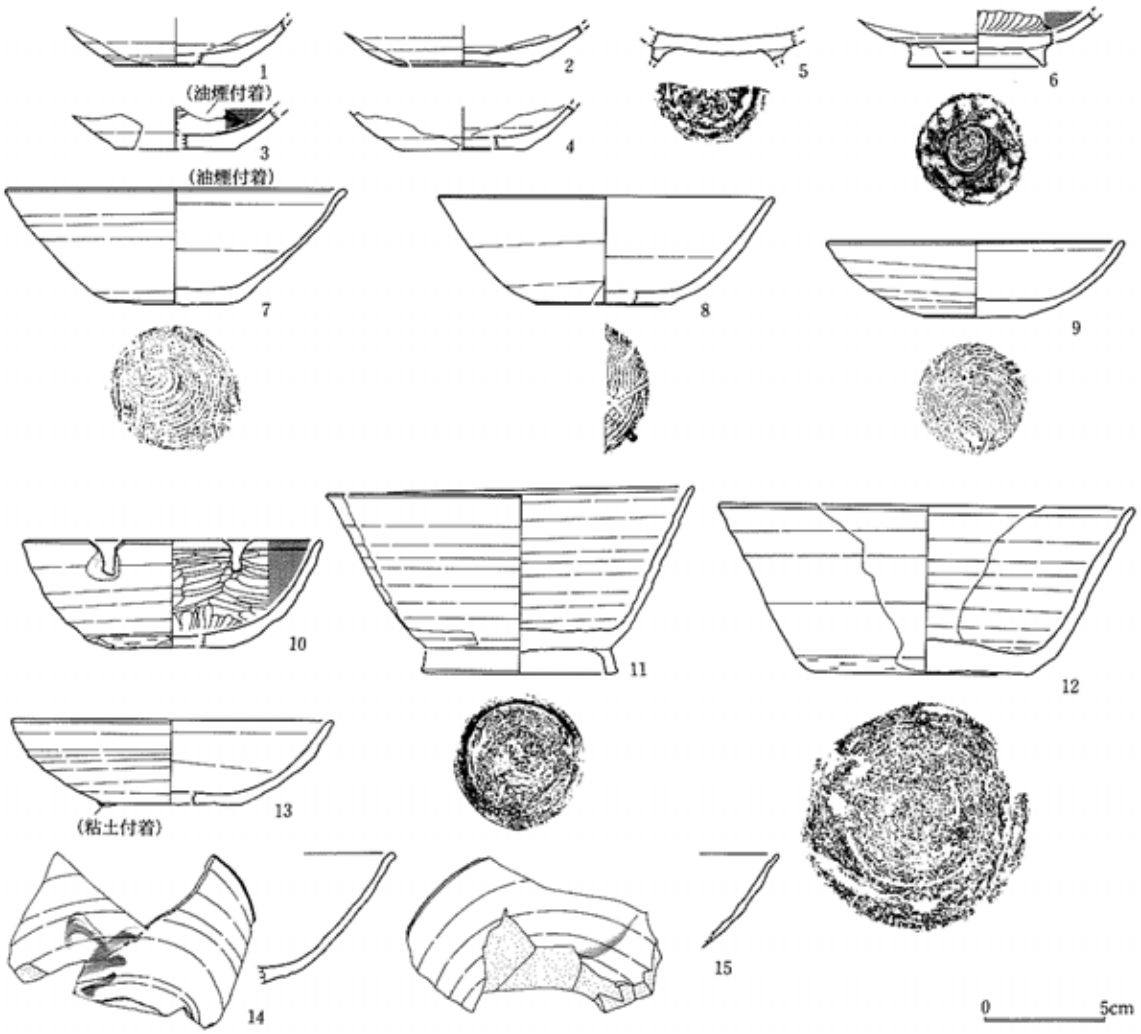
他の杭列 2 条はトレンチ北半の深堀り部分で確認した。いずれもほぼ東西方向だが平行ではない。打ち込みのため、遺構面は確認できない。西側のＳＡ07 は、径 4～7㎝ の細い丸杭（根部のみが残っている可能性もある）が６本、西から約 50㎝・65㎝・60㎝・50㎝・30㎝ という不規則な間隔で並ぶ。東側のＳＡ08 は、最も東の１本が１片 5㎝ の角杭、他の３本が径 6～10㎝ の比較的太い丸杭で、西から約 105㎝・75㎝・50㎝ という不規則な間隔で並ぶ。ＳＡ07・08 杭列の性格は不明である。

その他、列として組まない径 5～8㎝ の丸杭が３本あるが、うち東側の２本は径が近く、間隔が約 40㎝ と近いことから、関連するものと思われる。

ＳＤ09 溝跡（第４図）

第１トレンチの北西隅で検出したため、規模・深さなどは不明である。第Ⅶ層上面の小河川跡より新しく、ＳＸ02 整地地形より旧い。トレンチがごく狭いため方向は確定できないが、おおむね南北方向と見られる。

なお第５トレンチにおいて、現地の中島の北岸の土を垂直に削り落とし、その下を若干掘り下げて状況を確認した。その結果、島の北岸を構成する土は盛土がその崩落土で、第Ⅰｂ層の上に載っていた。



№	種　類	出土層位（トレンチ）	特　徴	口径cm	底径cm	器高	残存率	写真図版
1	赤焼土器・坏	第Ⅱ層　(6)	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ→コテ状工具による平滑仕上げ　底：回転糸切り	－	(5.0)	－	一部	
2	赤焼土器・坏	第Ⅱ層　(6)	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ→コテ状工具による平滑仕上げ　底：回転糸切り	－	(5.0)	－	一部	
3	土師器・坏	第Ⅱ・Ⅲ層（1）	外：ロクロナデ　内：ミガキ→黒色処理　底：回転糸切り　内面に油煙付着（灯明皿か）	－	(4.8)	－	一部	4－9
4	赤焼土器・坏	第Ⅱ・Ⅲ層（1）	外：不明瞭なロクロナデ　内：ロクロナデ→コテ状工具による平滑仕上げ　底：回転糸切り	－	(5.1)	－	一部	
5	土師器・高台坏	第Ⅱ層以下（1）	外：ロクロナデ→高台接合後菊花状のオサエ　内：ミガキ→黒色処理	－	－	－	一部	
6	土師器・高台坏	第Ⅱ層以下（1）	外：ロクロナデ→高台接合後ナデ→菊花状のオサエ　内：ミガキ→黒色処理	－	(5.6)	－	一部	
7	赤焼土器・坏	第Ⅱ層以下（1）	内外：不明瞭なロクロナデ　底：回転糸切り→一部ナデ　内面全体に油煙付着（灯明皿か）	14.2	5.3	4.85	一部欠	4－2
8	須恵器・坏	第Ⅱ層以下（1）	内外：不明瞭なロクロナデ　底：回転糸切り・ヘラ書き「メ」　色調：灰白色	(14.0)	(5.8)	4.5	1／3	4－8
9	赤焼土器・坏	第Ⅱ層以下（1）	外：不明瞭なロクロナデ　内：ロクロナデ→コテ状工具による平滑仕上げ　底：回転糸切り	(12.4)	4.5	3.2	1／3	4－1
10	土師器・坏	第Ⅱ層以下（1）	外：ロクロナデ→底・体部下端を手持ちヘラケズリ　内：ミガキ→黒色処理　口縁の一箇所を欠く	(12.2)	(5.0)	4.5	1／3	
11	須恵器・高台坏	第Ⅳ層以下（1）	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→高台接合後ロクロナデ　歪み激しい	15.4	7.7	8.2	3／5	4－4
12	須恵器・坏	第Ⅱ層以下（1）	外：不明瞭なロクロナデ→底・体部下端を回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ　色調：灰黄色	(17.5)	9.0	7.05	1／3	4－3
13	赤焼土器・坏	第Ⅱ層以下(7)	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ→コテ状工具による平滑仕上げ　底：回転糸切り	(13.3)	(5.8)	3.5	1／3	
14	須恵器・坏類	第Ⅳ層以下（1）	内外：ロクロナデ・火襷体部外面に墨書「□」（倒位）　色調：灰白色	－	－	－	3／8	4－6
15	須恵器・坏類	第Ⅱ層　(6)	内外：ロクロナデ体部外面に墨痕（正位の左払い）	－	－	－	1／4	4－7

第６図　各層出土遺物

遺構以外の各堆積層から出土した遺物には、以下のものがある。（第６図）

第７トレンチの第Ⅶb層からは、赤焼土器坏、内面黒色処理されたものを含む土師器甕が出土している。

第Ⅱ層の遺物としては、第６トレンチから、土師器の坏類・甕、赤焼土器坏（第６図1･2）、体部外面に判読不明の墨書が施されたもの(第６図15)を含む須恵器の坏類と甕、溶着滓の見られる羽口

(写真図版 4―13)が出土している。また第 9 トレンチから赤焼土器坏、土師器の坏類・甕が出土している。

第 7 トレンチの第Ⅱｂ層から、赤焼土器坏・内黒の土師器甕・須恵器坏が出土している。

また第 9 トレンチの第Ⅰ層からは、土師器や須恵器の他に、中世以降の陶器の甕類の破片（写真図版 4―15）が 1 点出土している。

なお第 1 トレンチにおいては、堆積状況の確認と並行して掘り下げたため、出土層位を充分に明らかにできないまま取り上げた遺物がある。大別して「第Ⅱ層以下」「第Ⅱ・Ⅲ層」「第Ⅳ層以下」として取り上げたが、「第Ⅱ層以下」および「第Ⅱ・Ⅲ層」とした遺物の大部分は、第Ⅲ層すなわちＳG01 池跡の堆積土から出土したものと見られる。

「第Ⅱ・Ⅲ層」出土の遺物には、土師器坏(第 6 図 3)、赤焼土器坏(第 6 図 4)、須恵器片 3 点・溶着滓（写真図版 4―14）などがある。

「第Ⅱ層以下」として取り上げた遺物には、口縁の一部が打ち欠かれた土師器坏(第 6 図 10)・底面に菊花状の調整痕がある土師器高台坏(第 6 図 5・6)・底面に「メ」とヘラ書きされた須恵器の坏（第 6 図 8）などの他、胎土中に植物繊維を含む縄文土器片 2 点（写真図版 4―11・12）、ヒョウタンの破片 1 点がある。

「第Ⅳ層以下」、すなわちＳG01 池跡よりも下層の遺構や堆積層からは、体部外面に判読不明の墨書が施された須恵器の坏（第 6 図 14）・須恵器高台坏（第 6 図 11）などが出土している。

第Ⅴ章　まとめ

今回の調査は、公園整備に先立つ確認調査であり、工事にかかる地点のみを対象とした部分的なトレンチ発掘であって、池の範囲や確実な汀線などを押さえるには至らなかった。出土した遺物も、整理用コンテナで 1 箱未満である。得られた情報は限られたものであるが、今回の調査の結果から最低限指摘しうることを整理しておく。

1．池跡について

第 1～5 トレンチにおいて池跡を確認した。第 1 トレンチでは池に付属して、土留め施設を伴う整地や溝、杭列なども見つかっている。「遣水」を思わせる溝や、「州浜」を思わせる綿状の張り出しもみられるが断定できない。橋脚跡は確認されず、玉砂利などが敷かれた形跡はない。

池は灰白色火山灰を含む自然堆積層よりも新しい。灰白色火山灰は 10 世紀前半に降下したと考えられており、したがってこの池は 10 世紀前半以降、これをあまり離れないうちに整備されたものと考えられる。また池の埋土中に含まれる土器の年代も後述するように 10 世紀前半頃であり、池の存続期間は 10 世紀前半頃の比較的短期間であったと考えられる。

栗原寺は 12 世紀に繁栄した奥州藤原氏に関係の深い寺と考えられてきており、また『吾妻鏡』に表れるのも 12 世紀末(文献成立は 13～14 世紀)であるが、今回の調査で発見された池は現段階では年代

的に隔たりがあり、両者を結び付けることはできない。なお、12 世紀代のかわらけや陶器などは出土しなかった。

2．出土遺物について

縄文土器・土師器・須恵器・赤焼土器・中世以降の陶器・羽口・溶着滓・ヒョウタンが出土した。出土量の大部分は土師器・須恵器・赤焼土器で、他の遺物は少ない。

土師器･須恵器･赤焼土器は、ＳG01 池跡の堆積土からある程度まとまって出土している。これらの土器類についてみると、土師器のうち成型技法の判るものは全てロクロにより、坏類のうち底部の切り離し技法の判るものは、1 点を除けば全て回転糸切りによる。また赤焼土器は比較的多く、坏が大部分であるが、小皿・小形坏・皿状の高台坏といった、10 世紀中葉以降の特徴を示す土器は出土していない。以上のような特徴から、これらの土器類の大部分は 10 世紀前半頃までの年代が与えられる。

一方、これらの土器の他に、ＳG01 池跡や灰白色火山灰よりも下層からも土器が出土している。これらは、回転ヘラ切りによって切り離された坏(第 4 図 1)、底部が回転ヘラ削り調整された須恵器坏（第 6 図 12）や、高台の断面が方形を呈する須恵器高台坏（第 6 図 1）など、9 世紀代の特徴を示している。今回の調査ではこの時期の遺構は検出されなかったが､昭和 37 年の調査ではこの時期の竪穴式住居跡群や土師器焼成遺構が発見されている。今回出土したこの時期の遺物も、比較的高い位置にあるこの住居跡群などの付近から流入したものと考えられる。

ただし今回の調査で出土した 9 世紀代の土器の中には須恵器が多く含まれ、その中には「太上」と墨書されたもの（第 4 図 1）など、通常の集落で使用されたとは考えづらいものもある。

引用・参考文献

伊東信雄（1979）：「花山寺跡について」『花山村文化財調査報告書』第 1 集

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

菅原祥夫・菊地逸夫（1988～1995）：「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第 1～8 集

京都市（1990）：『京都の庭園－遺跡に見る平安時代の庭園－』京都市文化財ブックス第 5 集

栗駒町教育委員会（1986 初出 1972,1975）：『栗駒町の文化財』

小井川和夫・小川淳一(1982):「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ」『宮城県文化財調査報告書』第 83 集

小井川和夫・手塚　均(1978):「糠塚遺跡－宮城県文化財調査略報(昭和 52 年度分)」『宮城県文化財調査報告書』第 53 集

佐久間洞巌（1719）：「奥羽観蹟聞老志」巻之八『仙台叢書』別巻

手塚　均（1981）：「鶴ノ丸遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第 81 集

平沢英二郎・手塚　均（1980）：「佐野遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第 63 集

真山　悟（1979）：「花山寺跡」『花山村文化財調査報告書』第 1 集

宮城県多賀城跡調査研究所（1978～1980）：「伊治城跡」～『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第 3～5 冊

三好秀樹（1995）：「長者原遺跡」『栗駒町文化財調査報告書』第 3 集

森　貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」『宮城県文化財調査報告書』第 93 集

遊佐五郎（1980）：「宇南遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集

吉田雅之（1990）：「花山寺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 137 集

栗原寺調査団（1963）：「栗原寺の諸問題－栗原寺調査中間報告－」『栗駒町史』追録第二

（1776）：「安永風土記」『宮城県史』第 25 巻

栗原寺堤現況（南西から）
（右が中島、左手奥が現寺）

（左）第１トレンチ（西から）

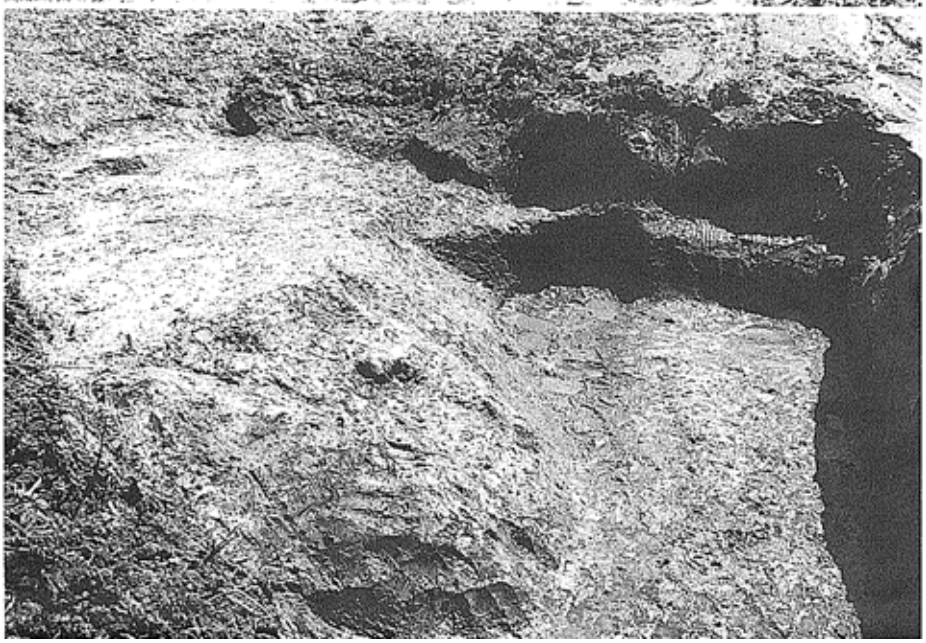
（右）第１トレンチ
SG01池跡底面
墨書須恵器坏（第４図１）
出土状況

第１トレンチ
SX03B 整地地形
（北から）

写真図版　1

第１トレンチ
SX03整地地形
（南から）

第２トレンチ（北南から）
（奥がSG01池跡底面）



第２トレンチ（北西から）
（左が地山の張り出し
右がSG01池跡底面）

写真図版　2

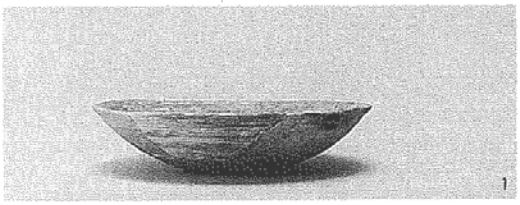
第３トレンチ（東から）
（SG01池跡底面）

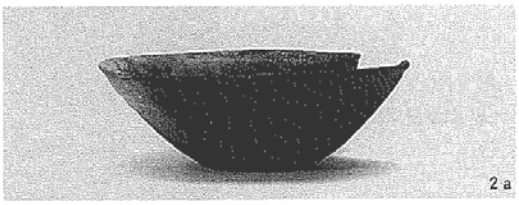
（左）第５トレンチ（北から）
（上が中島の土、手前がＩａ層）

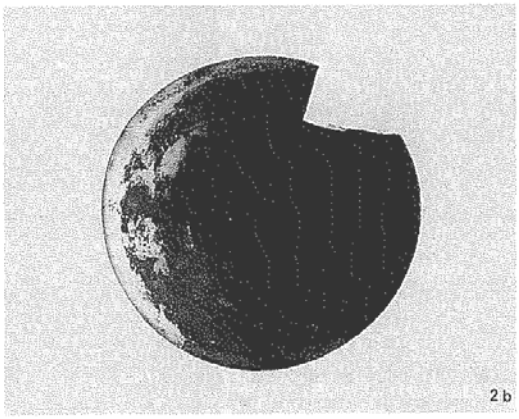
（右）第７トレンチ（東から）

第７トレンチ（北から）
（北壁下から２層目が
灰白色火山灰）

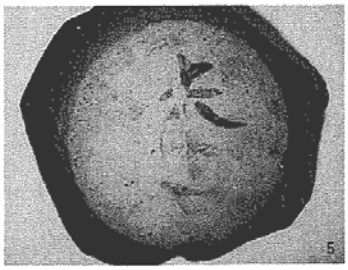
写真図版　3

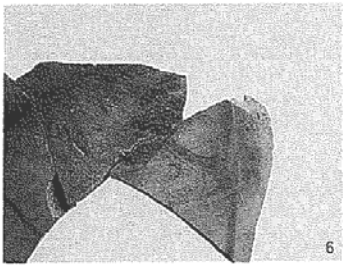


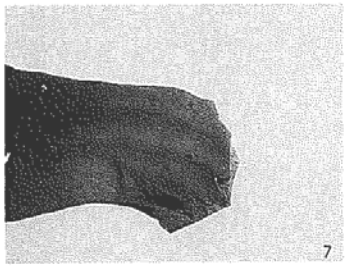


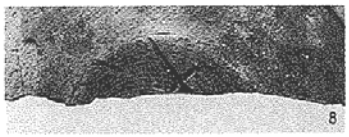


1・2：赤焼土器・坏（第II層以下）
3：須恵器・坏（第II層以下）
4：須恵器・高台坏（第III層以下）　（S＝1/3）

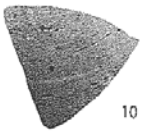








5：須恵器・坏（SG01）
6：須恵器・坏類（第III層以下）
7：須恵器・坏類（第II層）
8：須恵器・坏（第II層以下）
（S＝1/2）



9：土師器・坏（第II・III層）
10：須恵器・壺（SG01）
11・12：縄文土器（第III層以下）
13：羽口（第II層）
14：溶着滓（第II・III層）
15：中世以降の陶器（第Ⅰa層）
（S＝1/3）

（出土遺物）

写真図版　4

亀　岡　遺　跡

目　　次

第Ⅰ章　はじめに……145
第Ⅱ章　発見された遺構と遺物……147

調 査 要 項

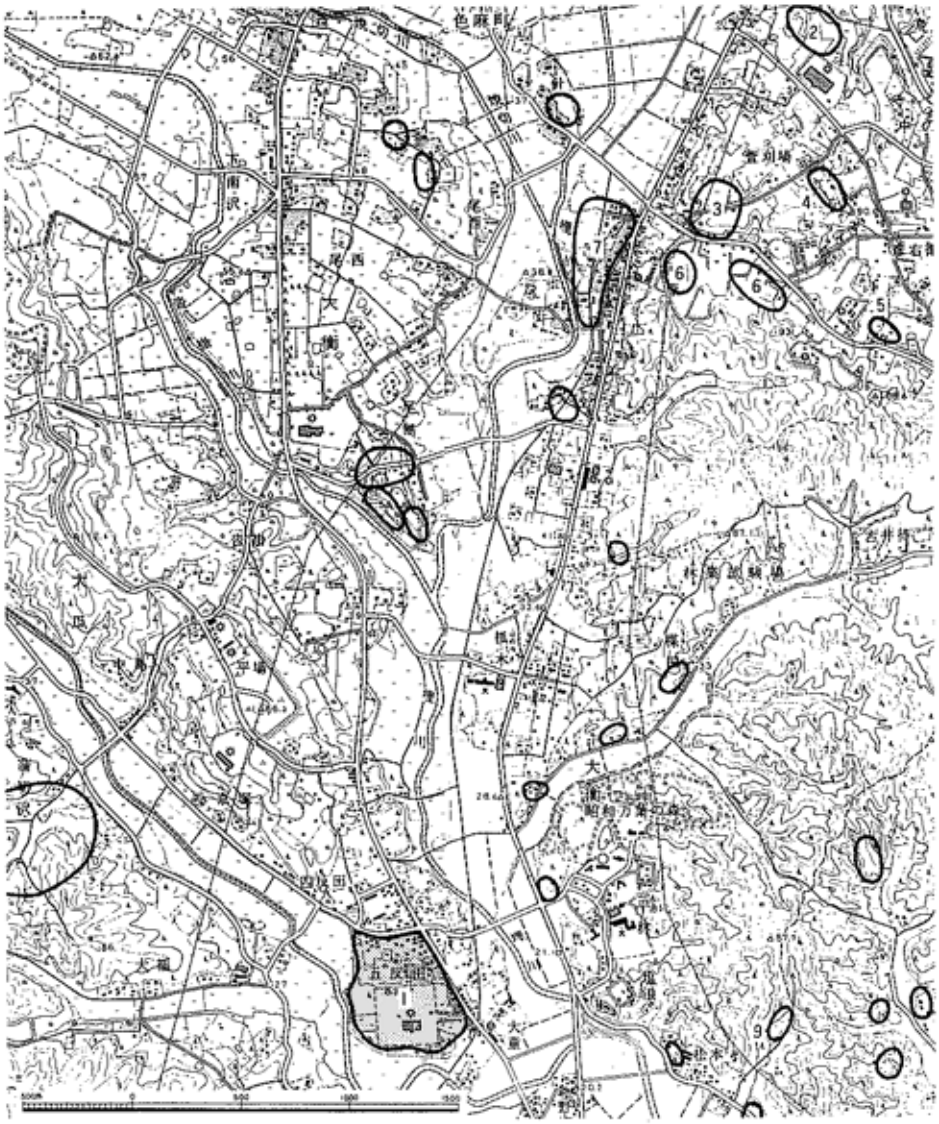
遺　　跡　　名：亀岡遺跡（かめおかいせき）
宮城県遺跡地名表搭載番号：26003
遺　　跡　　記　　号：ＪＺ
遺　　跡　　所　　在　　地：黒川郡大衡村大衡字亀岡
調　　査　　主　　体：大衡村教育委員会
調　　査　　担　　当：宮城県教育庁文化財保護課
調　　査　　期　　間：平成７（1995）年５月29日～31日
調　査　対　象　面　積：7600㎡
調　　査　　面　　積：1970㎡
調　　査　　員：斎藤吉弘・菊地逸夫・東理浩明
整　　理　　協　　力　　者：鎌田惠子・国松美恵子・佐藤由美子・菅原友子

Ⅰ. は じ め に

亀岡遺跡は宮城県のほぼ中央部、黒川郡大衡村大衡字亀岡にあり、大衡村役場から西約 1kmの地点に位置する(第１図)。遺跡は東西に延びる大松沢丘陵から派生した丘陵末端部の台地上に立地しており、標高が約 33mで、沖積地（水田面）との比高は 13mほどである。また亀岡遺跡周辺には各時代の遺跡が多数存在している。

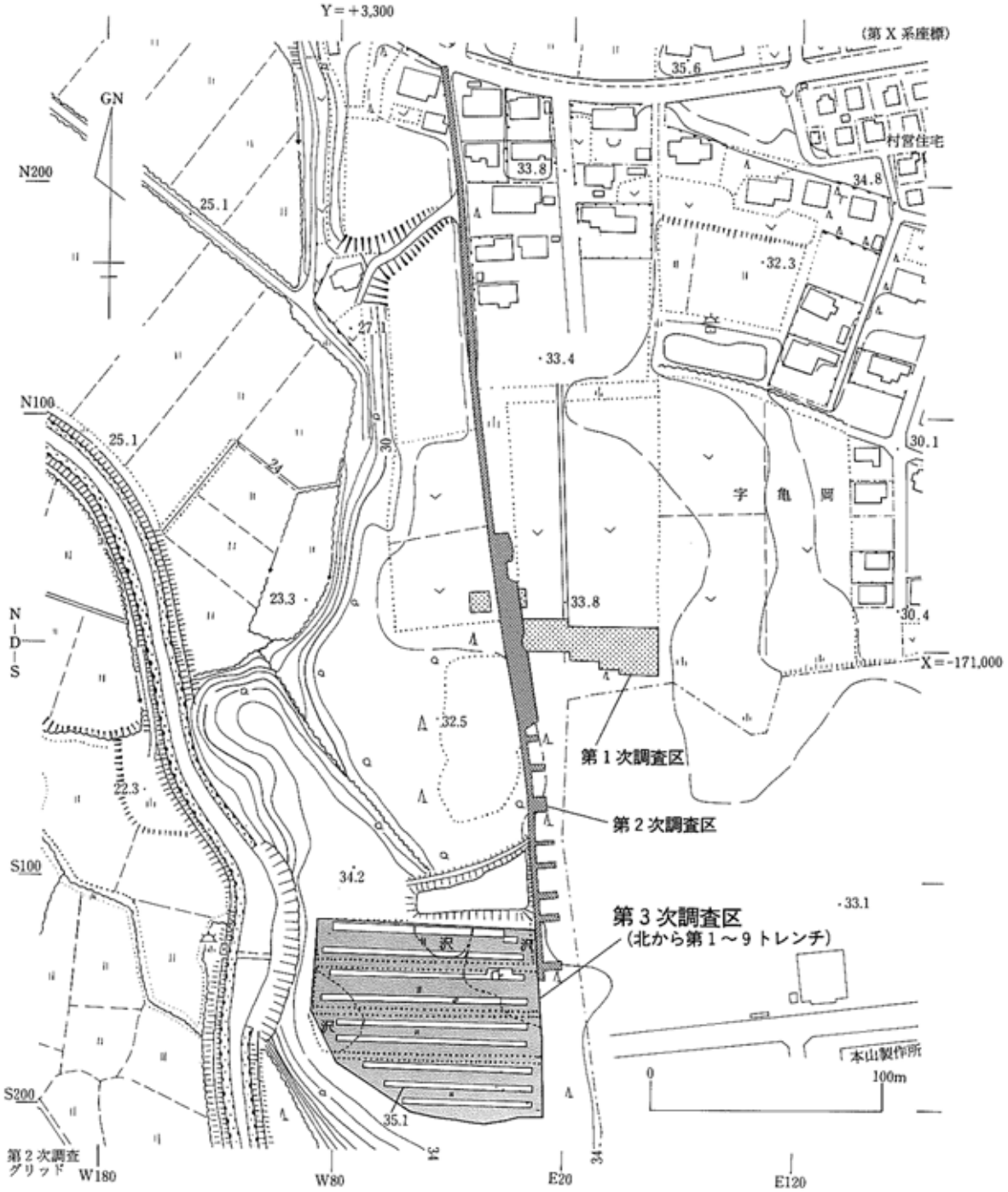
本遺跡は昭和 52 年･平成 6 年に調査されており(第１次・第２次調査)、地理的・歴史的環境はそれらの報告に詳しいので、参照されたい（学院考古研：1979･村田:1995）。なお平成 7 年には、村内の前沢遺跡および彦右衛門橋窯跡の発掘調査が行われ、彦右衛門橋窯跡において 8 世紀後半から 9 世紀初頭の須恵器が出土している（本書内）。

本遺跡の第１次調査では平安時代初期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などか検出され、土師器や須恵



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

器が多量に出土した。また第２次調査では、外延溝が取付く竪穴住居跡・掘立柱建物跡などが検出され、土師器や須恵器が多量に出土した。それらの検討から、遺跡は９世紀初頭の集落跡で、「官衙に関わる施設もしくは須恵器製作集団と密接な関わりをもった集落の二つの可能性が考えられる。」との考察がなされた（村田：1995）。



第２図　調査区の位置とトレンチ配図

Ⅱ．発見された遺構と遺物

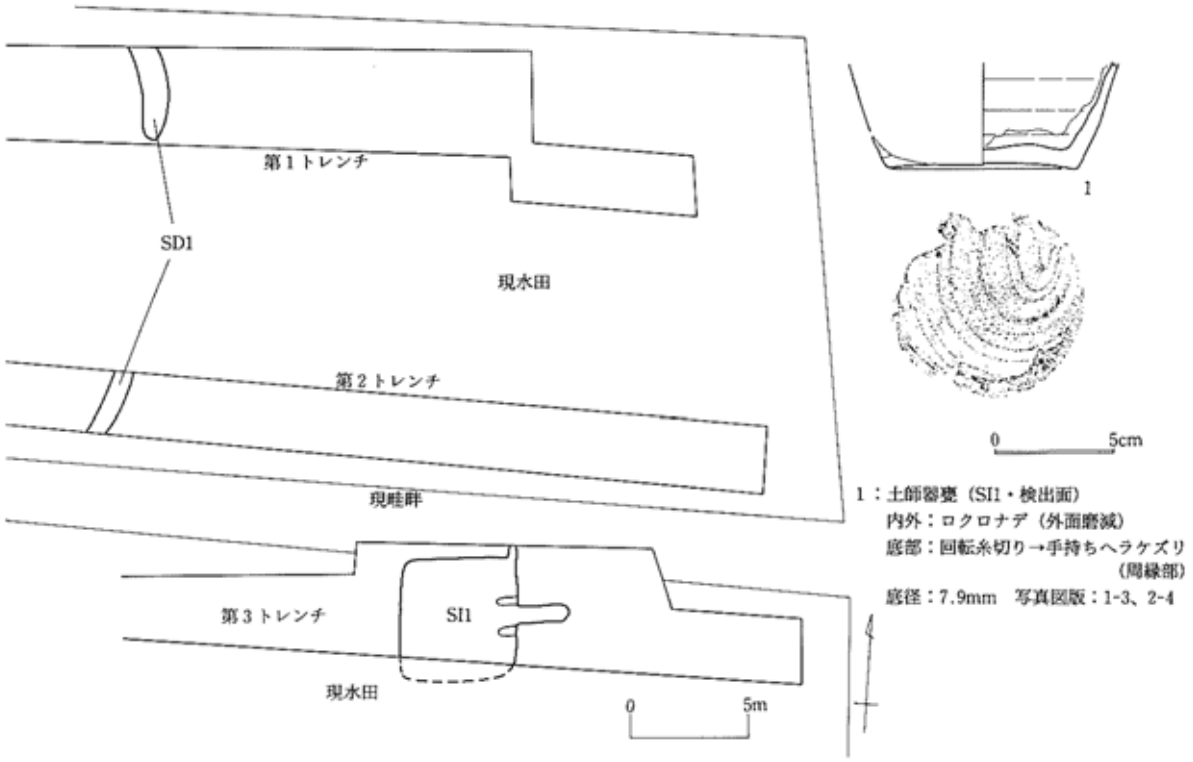
今回の調査（第 3 次調査）は、株式会社本山製作所の駐車場造成工事にともなう確認調査である。調査は、造成が予定されている休耕田に東西方向のトレンチ 9 本を設定し、5 月 29 日から開始した(第 2 図)。その結果、調査対象区は全体として北東に傾斜しており、北東・北・西から浅い沢が入っていて、その他の部分はおおむね開田により削平されていた。北東の沢の落ち際でＳＩ1 竪穴住居跡、ＳD1 溝跡を検出した。それ以外の部分には性格不明の土壙 1 基・小ピット 6 基が点在していたのみである。いずれの遺構も掘り下げは行っていない。

ＳＩ1 竪穴住居跡

第 3 トレンチの東部、北東に開く沢の落ち際近くの、地山上面で検出した。

北辺が約 4m、南北はトレンチ外のため不明だが、ほぼ正方形を呈するものと思われる。北東隅に外延溝が取付いて北に延び、トレンチ外に続く。東辺の中央付近にカマドの側壁が露出しており、煙道が東へ約 1.7m延びている。住居内堆積土はおおむね黒色シルトで、外延溝も同様である。堆積土には、10 世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が流入していた（写真図版 1―1）。

出土した遺物は、土師器の甕の底部(第 3 図 1)、須恵器の甕類の破片 1 点・器種不明の土師器の小破片 2 点がある（写真図版 2―5～9）。カマド付近で出土した土師器の甕は、ロクロによって成形され、回転糸切りによって切り離されている。体部外面の調整は磨滅により不明であるが、底面周縁に



第 3 図　SI1・SD1 付近平面図及び SI1 出土遺物

は若干の手持ちヘラケズリが及んでいる。

堆積土中の灰白色火山灰と出土遺物から、この住居跡は9〜10世紀前半のものと考えられる。

ＳＤ1溝跡

第1・第2トレンチの東部、北東に開く沢の落ち際の地山上面で検出した。第1トレンチの南壁近くで削平により一旦とぎれるが、同一の溝とみられる。東にやや湾曲するがほぼ南北方向に延び、トレンチ外へ続く。第3トレンチでは確認されなかった。上端幅は0.7〜1mで、検出面で見られる堆積土はおおむね黒色シルトである。性格は不明である。遺物は出土しなかった。

以上の結果、今回の調査対象区は、第1次・第2次調査対象区と違い、遺構の分布が稀薄なようである。

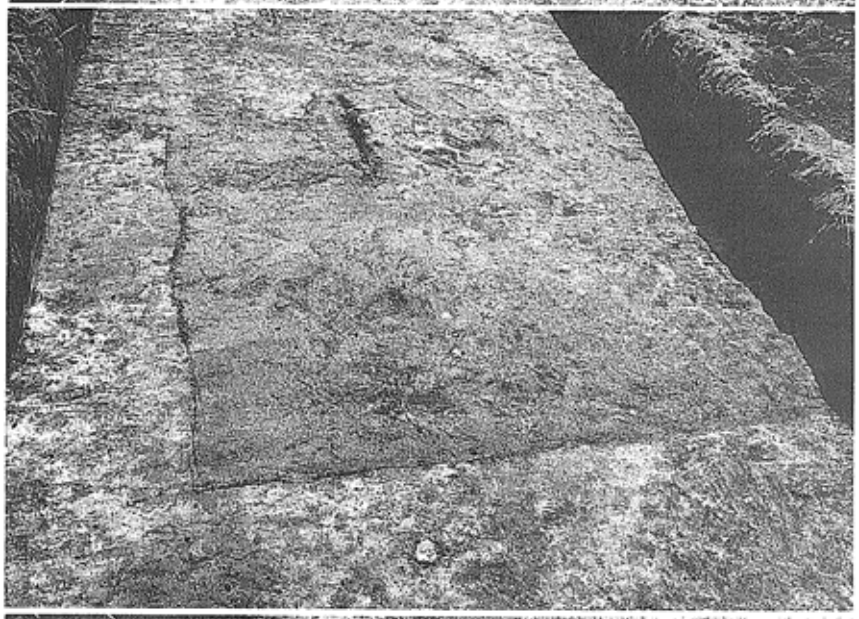
引用・参考文献

東北学院大学考古学研究部（1979）：「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号

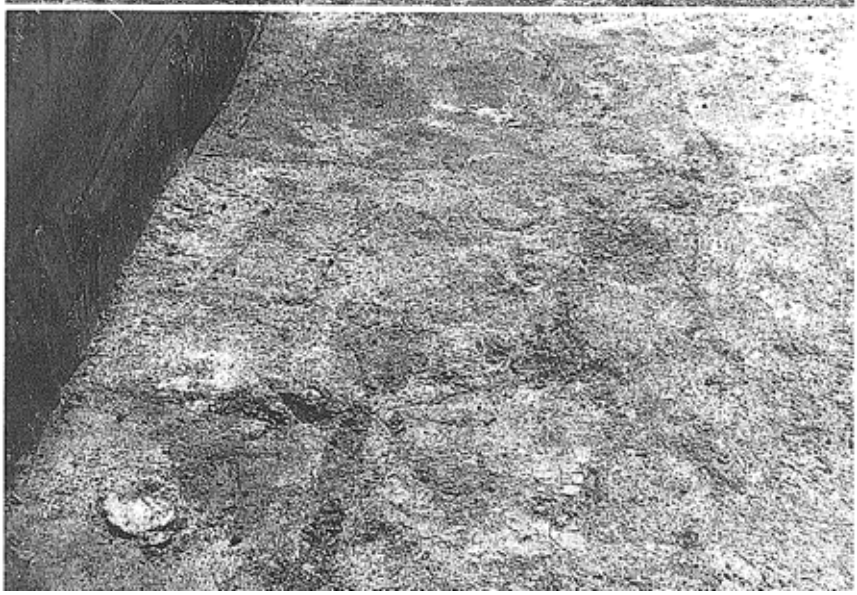
村田晃一（1995）：「亀岡遺跡」『大衡村文化財調査報告書』第1集

SI1 竪穴住居跡（南西から）
（トレンチ拡張前
検出面直上の堆積土に
灰白色火山灰）

SI1 竪穴住居跡（西から）



SI1 竪穴住居跡カマド付近
（西から）
（手前左が土師器甕）



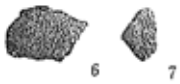
写真図版　1

第1トレンチ（東から）
（手前の黒色土がSD1溝跡）

2（左）第2トレンチ（東から）
（中央の黒色土がSD1溝跡）
3（右）第9トレンチ（東から）

土師器：甕
（SI1カマド付近検出面）

4　5
須恵器甕類
（SI1カマド付近検出面）



6　7
土師器（SI1検出面）

8
縄文土器
（第5トレンチ西沢）

写真図版　2

彦右ヱ門橋窯跡

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……153
第Ⅱ章　発掘調査の成果……155
1　調査の方法と経過……155
2　発見された遺構と遺物……155
第Ⅲ章　考　　察……161

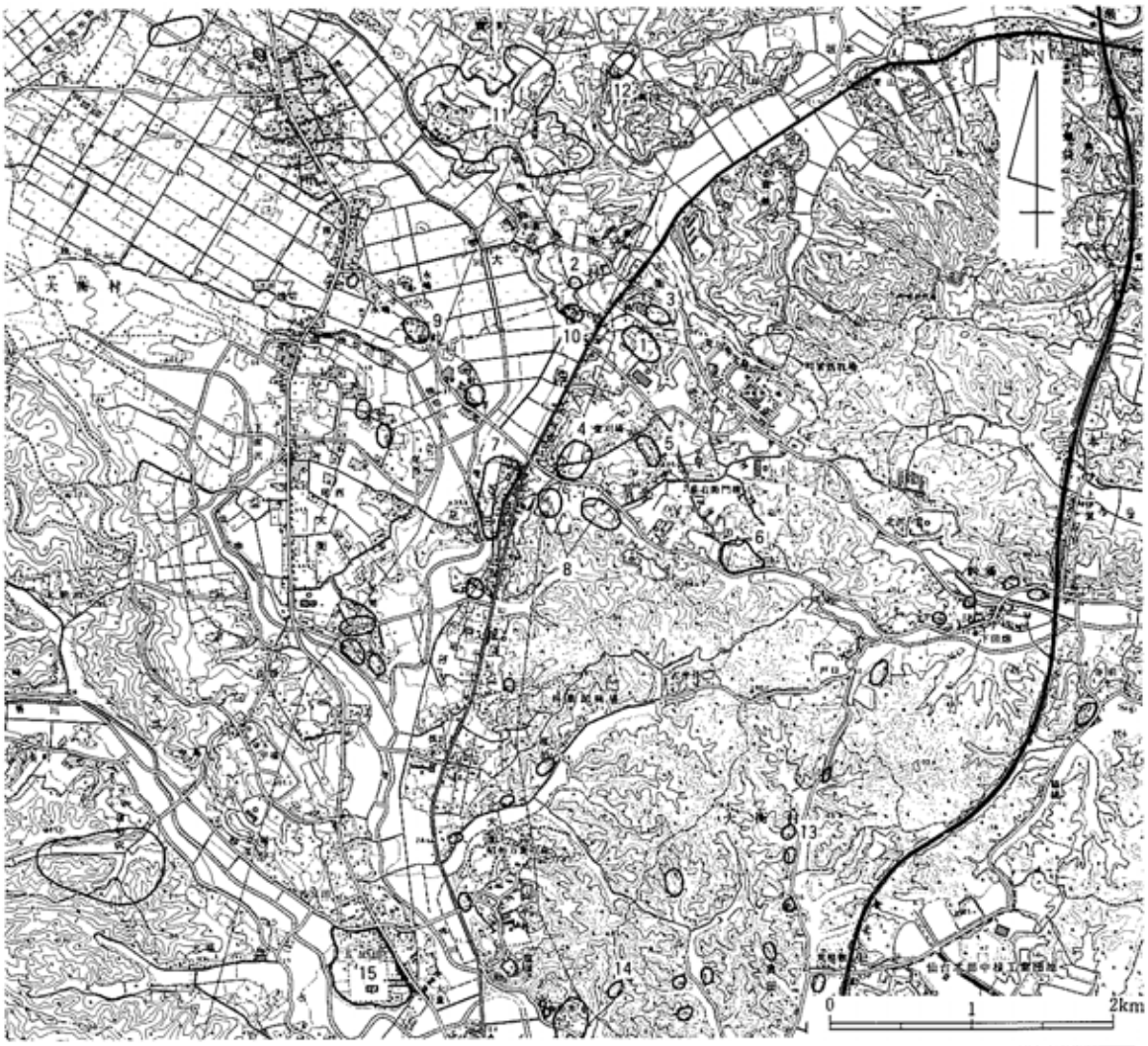
調 査 要 項

遺跡名：彦右エ門橋窯跡（ひこうえもんばしかまあと）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：26010
遺跡記号：ＫＯ
遺跡所在地：黒川郡大衡村駒場字彦右エ門橋
調査主体：大衡村教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査期間：1995 年（平成 7 年）8 月 30 日、9 月 11・12 日
調査対象面積：約 1100 ㎡
発掘調査面積：約 200 ㎡
調査員：真山悟・佐藤則之・古川一明・高橋栄一
調査協力：宮城県仙台農林事務所

第一章　遺跡の位置と環境

彦右エ門橋窯跡は黒川郡大衡村駒場字彦右エ門橋に所在し、大衡村役場から北約 5kmに位置している(第１図)。遺跡周辺は、西の船形山麓から東の鹿島台に延びる大松沢丘陵と埋川の堆積作用によって形成された谷底平野からなる。大松沢丘陵は埋川によって東西に二分される形となっており、本窯跡は東丘陵部の西縁部に立地している。

彦右エ門橋窯跡周辺には各時代の遺跡が多数存在している。ここではそれらのなかでも本窯跡と関連する古代の遺跡についてみていく。古代の遺跡としては集落跡、窯跡などがあり、窯跡を中心に述べていく。

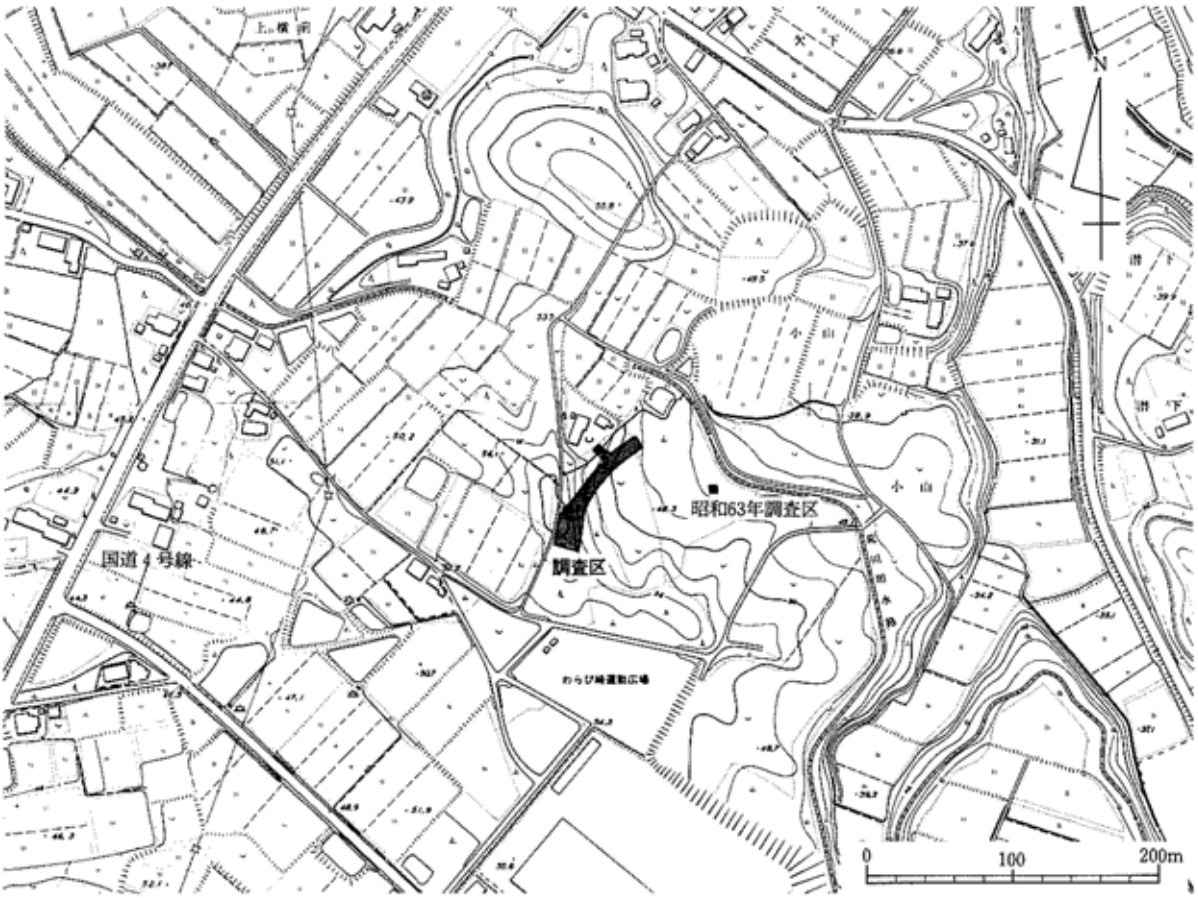


№	遺跡名	種別	出土遺物	時期
1	彦右エ門橋窯跡	窯跡	須恵器・土師器	8世紀後半～9世紀初頭
2	横前窯跡	窯跡	須恵器・土師器	8世紀後半～9世紀初頭
3	吹付窯跡	窯跡	須恵器・瓦	8世紀後半～9世紀初頭
4	宮河場窯跡A地点	窯跡	須恵器・土師器	8世紀中頃～9世紀後半
5	宮河場窯跡B地点	窯跡	須恵器	9世紀後半
6	宮河場窯跡C地点	窯跡	須恵器	
7	河原窯跡	窯跡・集落跡	須恵器・土師器	9世紀後半
8	砂井沢窯跡	窯跡	須恵器	9世紀後半
9	長嶋遺跡	窯跡・集落跡	須恵器・土師器・瓦	8世紀後半～9世紀後半
10	吹付B遺跡	集落跡	須恵器・土師器	8世紀後半～9世紀初頭
11	日の出山窯跡群	窯跡群	須恵器・土師器・瓦	8世紀前半
12	森田野山窯跡	窯跡	須恵器・土師器	奈良・平安時代
13	梅木遺跡	集落跡	須恵器・土師器	平安時代
14	寺沢遺跡	集落跡	須恵器・土師器	奈良・平安時代
15	亀岡遺跡	集落跡	須恵器・土師器・金属製品	9世紀初頭

第１図　遺跡の位置と周辺の古代の遺跡

須恵器や瓦の窯跡は本窯跡周辺に数多く認められる。北西約 2kmの色麻町日の出山窯跡群は陸奥国府多賀城の創建期の瓦を生産した遺跡として広く知られており、範囲が東西1km以上、南北500mに及ぶ8世紀前半を中心とする窯跡群で、これまでにA～Fの6地点が確認されている。また本窯跡を含む大衡村大衡から駒場にかけて古代の窯跡が分布しており、「大衡窯跡群」と総称されている。現在までに横前・吹付・彦右エ門橋・萱刈場A・B・C地点・待井沢・河原と色麻町長嶋の9地点で窯が確認されており(村田：1988)、8世紀中頃から9世紀後半にかけて須恵器（一部瓦）を継続的に生産した窯跡群である。これまでに発掘調査されたのは萱刈場窯跡A地点で、8 世紀中頃の地下式窖窯が3基発見されている(村田：1995A)。彦右エ門橋窯跡は多量の須恵器やその焼成不良品が表採されており、また昭和63年の発掘調査では窯本体は発見されていないが、8世紀後半を中心とする須恵器が出土している（真山：1989）。

その他の遺跡としては、南約 5kmの大衡村亀岡遺跡では掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器焼成遺構が発見されており、また遺物は須恵器を主体とし、円面硯や銅製巡方なども出土している。年代は9世紀初頭頃に位置付けられている（村田：1995B）。北西約6kmの色麻町上新田遺跡では竪穴住居跡や土器焼成遺構が発見されており、年代は9世紀初頭頃に位置付けられている（小井川：1981）。



第2図　調査区位置図

第二章　発掘調査の成果

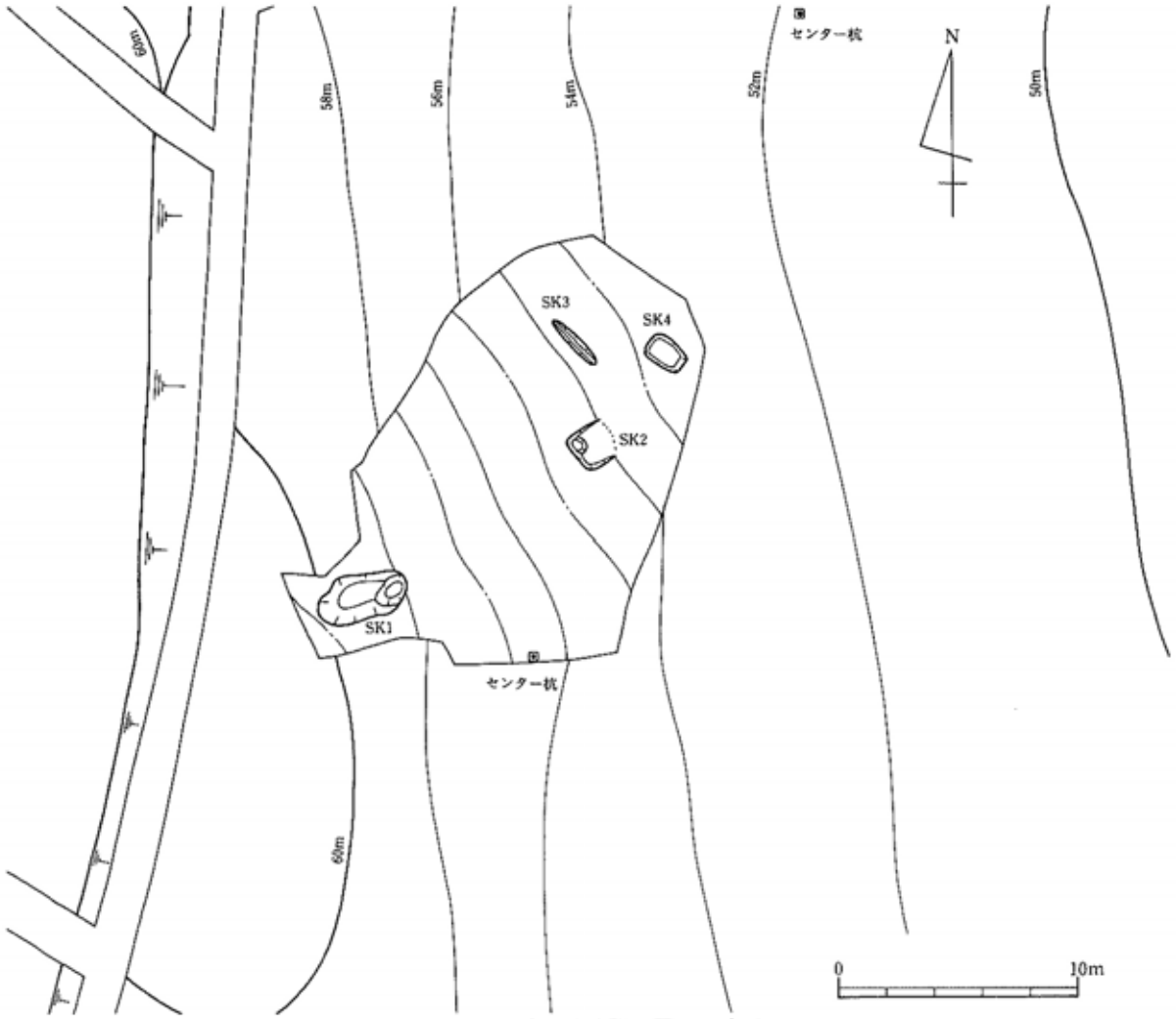
1　調査の方法と経過

今回の調査は、開拓地整備事業の開拓道路改良工事に係るものである(第２図)。遺跡を南北に横切る道路部分約1100㎡を対象とし、試掘調査を行った。その結果、調査対象区南側の東斜面で遺物が出土し、窯跡の存在が予想されたため、この部分の事前調査を行うことにした。調査面積は約200㎡である。

発掘調査は表土・黒ボク土を除去し、地山面（にぶい黄橙色土）で精査を行った。その結果、窯跡と考えられる遺構は認められず、土壙３基、溝状土壙１基を検出した。調査の状況に応じて、遺構の平面図・断面図の作成、カラースライド・白黒の写真撮影を行った。

2　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、土壙３基、溝状土壙１基である(第３図)。またこれらの遺構から須恵器・土師器が出土しており、遺物量は須恵器を主体として整理用コンテナで２箱程である。



第３図　調査区全体図と周辺の地形

(1)土 壙

【ＳＫ1】（第４図）

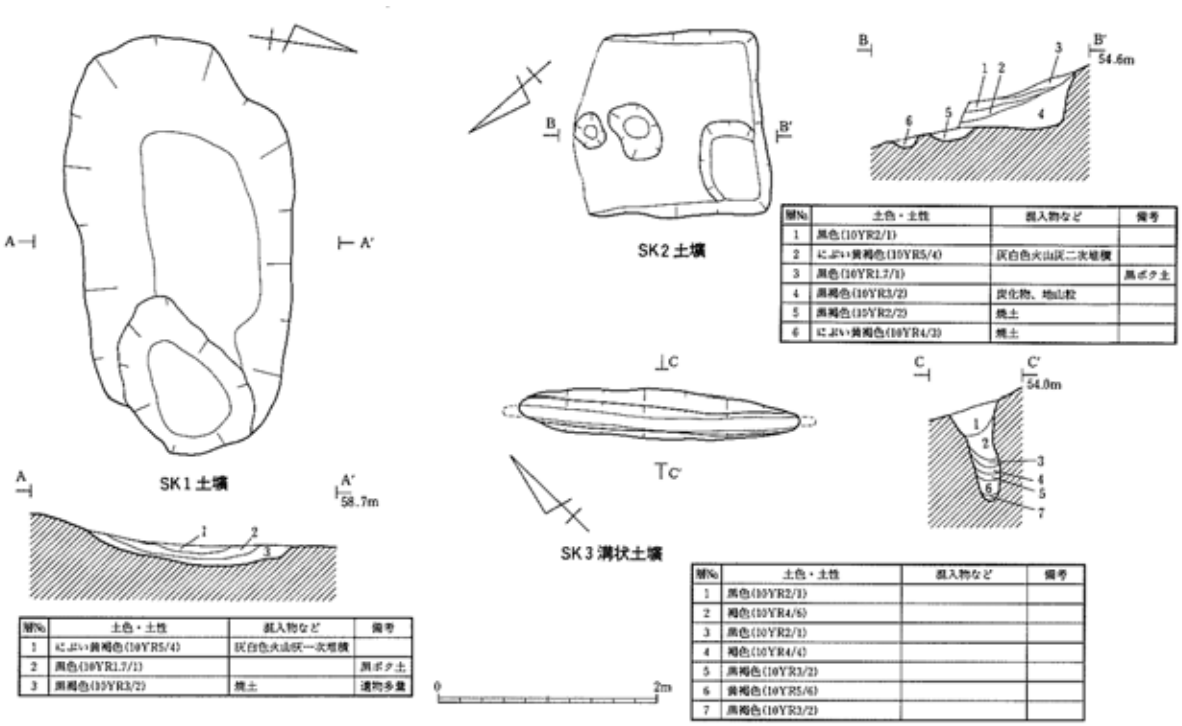
調査区西端の斜面上方で検出した土壙である。平面形は傾斜に平行する東西に長い不整楕円形を呈し、規模は長径約3.9m、短径約2.0mである。深さは約38㎝で、断面形は皿状を呈する。土壙底面は東に向かって低くなり、東端で規模が長径約1.5m、短径約1.0mの不整形状の落込みがみられる。堆積土は3層に分けられ、1層は灰白色火山灰の一次堆積層、2層は黒ボク土である。

遺物は3層中から須恵器だけが多量に出土している。器種には坏・埦・双耳坏・高台坏・蓋・甕がある（第5〜7図）。表面が剥落したものや焼き歪んだものが多くみられる。

【ＳＫ2】（第４図）

調査区東寄りで検出した土壙である。平面形は北東側が削平を受けているが、長方形と考えられ、規模は長軸1.9m以上、短軸1.7mである。深さは西側で約52㎝で、断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形を呈する。土壙底面はほぼ平坦であるが、北西隅と東側の3ヶ所で10㎝程度の落込みがみられる。堆積土は6層に分けられ、いずれも自然流入土である。2層は灰白色火山灰の二次堆積層、3層は黒ボク土である。4層には炭化物、5・6層には焼土の混入がみられる。

遺物は2〜4層中から須恵器坏（第8図1）・高台坏・蓋・壺（第8図3）・甕、土師器坏（第8図2）・甕（第8図4）が出土している。須恵器坏は逆台形を呈し、底部の切り離しはヘラ切りである。須恵器甕は底部破片で、底部外面に自然釉がかかっていること、および形状から焼き台に転用されていた可能性がある。須恵器坏や蓋などには表面が剥落しているものも認められる。土師器は坏・甕と

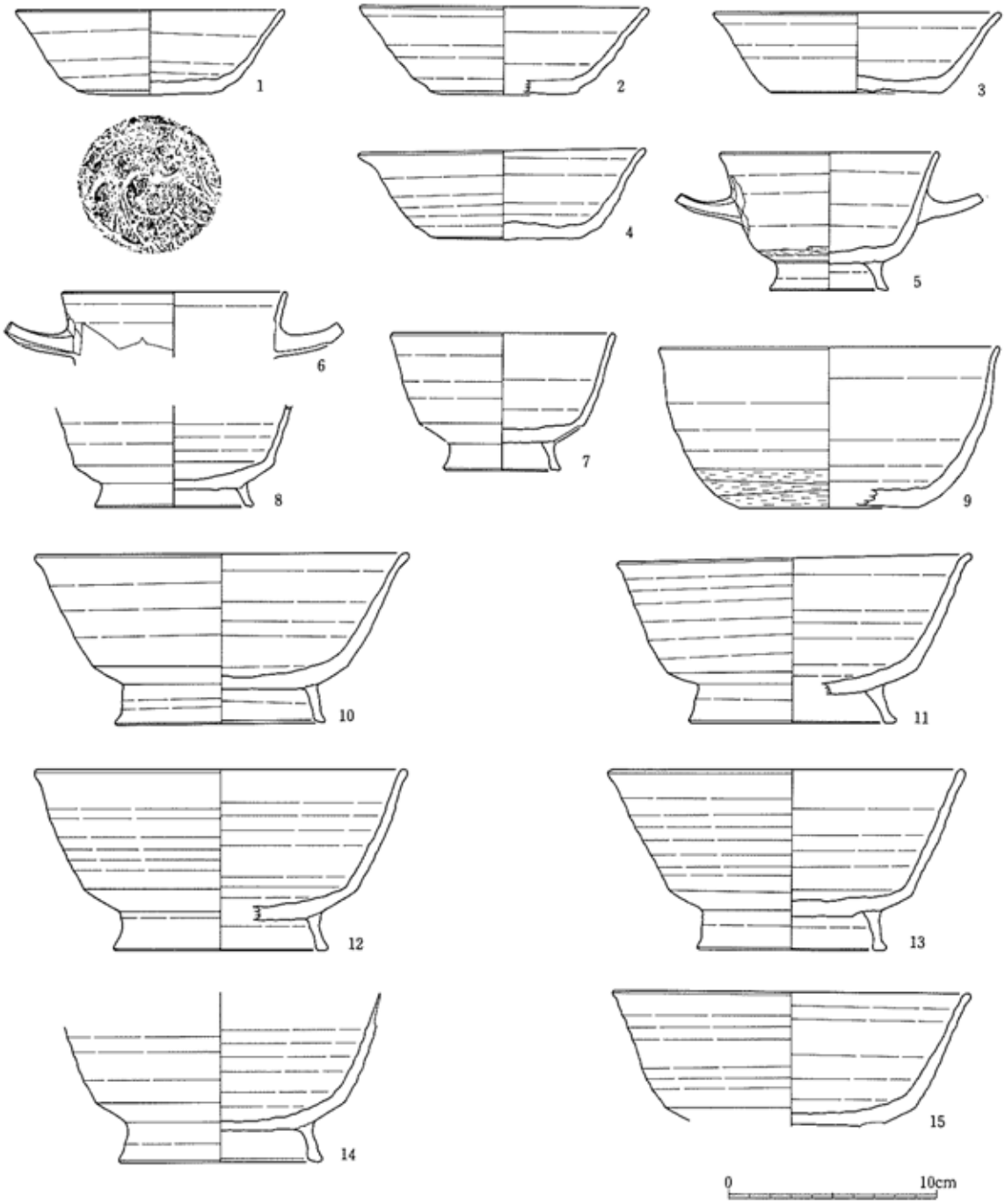


層No	土色・土性	混入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	灰白色火山灰一次堆積	
2	黒色(10YR1.7/1)		黒ボク土
3	黒褐色(10YR3/2)	焼土	遺物多量

層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)		
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	灰白色火山灰二次堆積	
3	黒色(10YR1.7/1)		黒ボク土
4	黒褐色(10YR3/2)	炭化物、地山粒	
5	黒褐色(10YR2/2)	焼土	
6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	焼土	

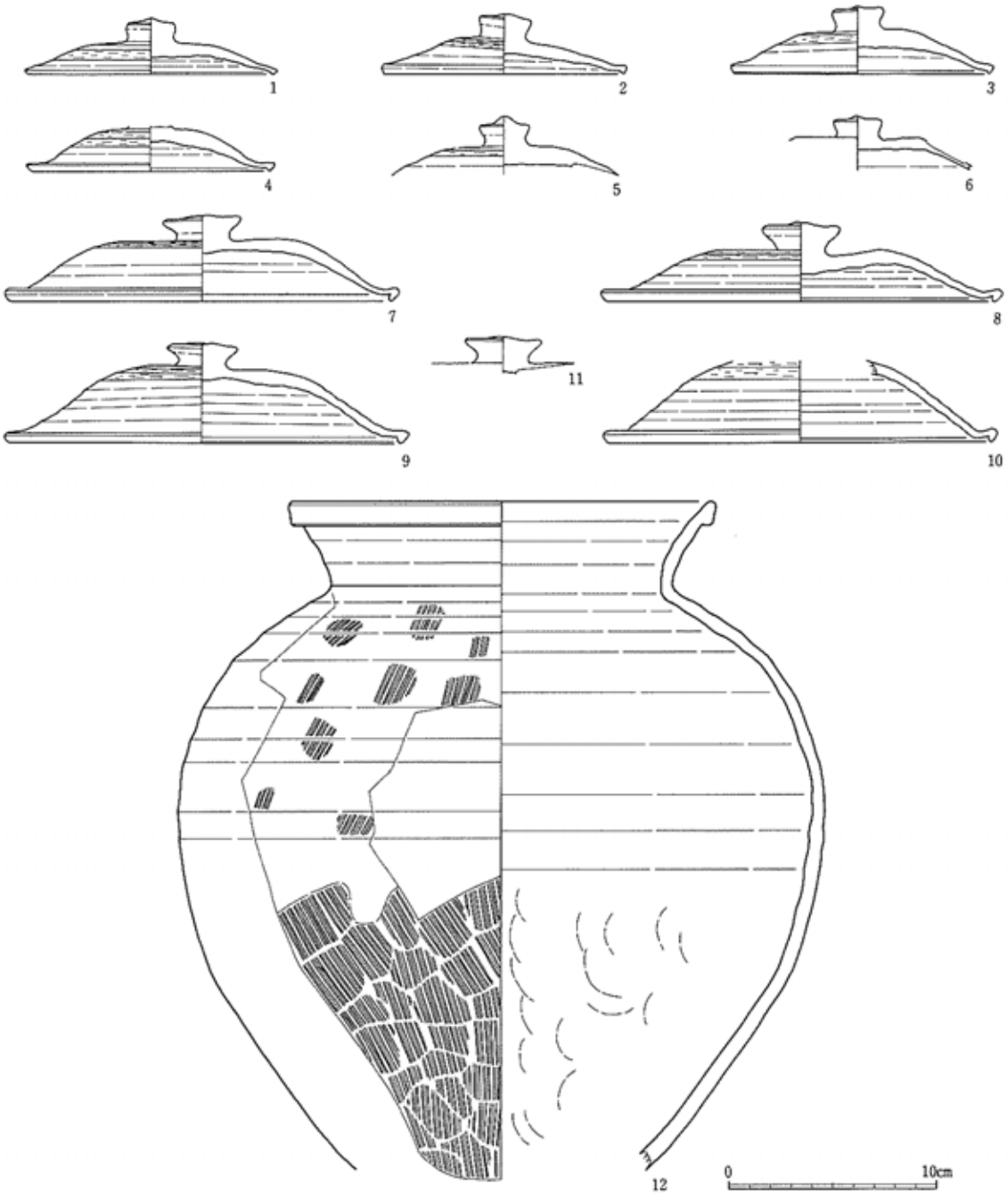
層No	土色・土性	混入物など	備考
1	黒色(10YR2/1)		
2	褐色(10YR4/6)		
3	黒色(10YR2/1)		
4	褐色(10YR4/4)		
5	黒褐色(10YR3/2)		
6	黄褐色(10YR5/6)		
7	黒褐色(10YR3/2)		

第４図　ＳＫ１・２土壙、ＳＫ３溝状土壙平面図・断面図



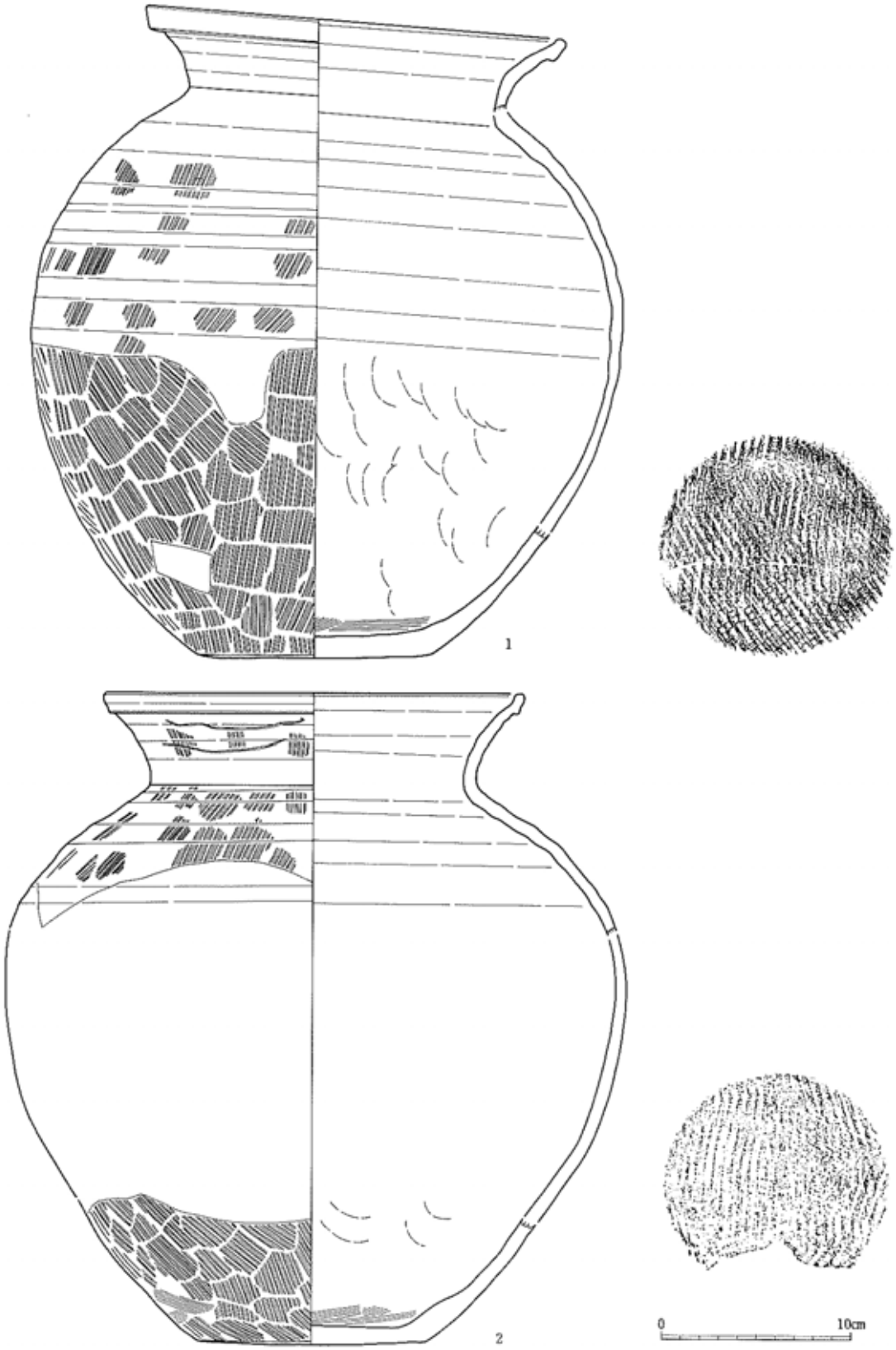
No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ（底部周縁）　内面：ロクロナデ	(13.0)	7.0	4.2	1/3	2－1
2	須恵器・坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ（底部周縁）　内面：ロクロナデ	(14.0)	(8.2)	4.3	1/4	
3	須恵器・坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ（底部周縁）　内面：ロクロナデ	(13.8)	(8.0)	3.9	2/5	
4	須恵器・坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ（底部周縁）　内面：ロクロナデ	13.9	7.5	4.3	2/3	2－2
5	須恵器・双耳坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ、耳部貼付け後ケズリ状のナデ　内面：ロクロナデ	(10.6)	(5.6)	6.7	1/2	2－4
6	須恵器・双耳坏	3層	外面：ロクロナデ、耳部貼付け後ケズリ状のナデ　内面：ロクロナデ	(10.8)	－	－	口1/3	
7	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(10.8)	5.4	6.7	1/6	
8	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	－	7.6	－	底2/3	
9	須恵器・甕	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(16.4)	8.6	(7.8)	1/3	2－6
10	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	18.1	10.1	8.3	4/5	2－7
11	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	17.1	10.0	8.0	1/2	
12	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	(18.0)	(10.4)	8.8	1/2	
13	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	17.2	9.2	8.8	1/2	2－8
14	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	－	9.8	－		
15	須恵器・高台坏	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→高台接合後ロクロナデ　内面：ロクロナデ	17.3	－	－		

第５図　SK １土壙出土遺物(1)



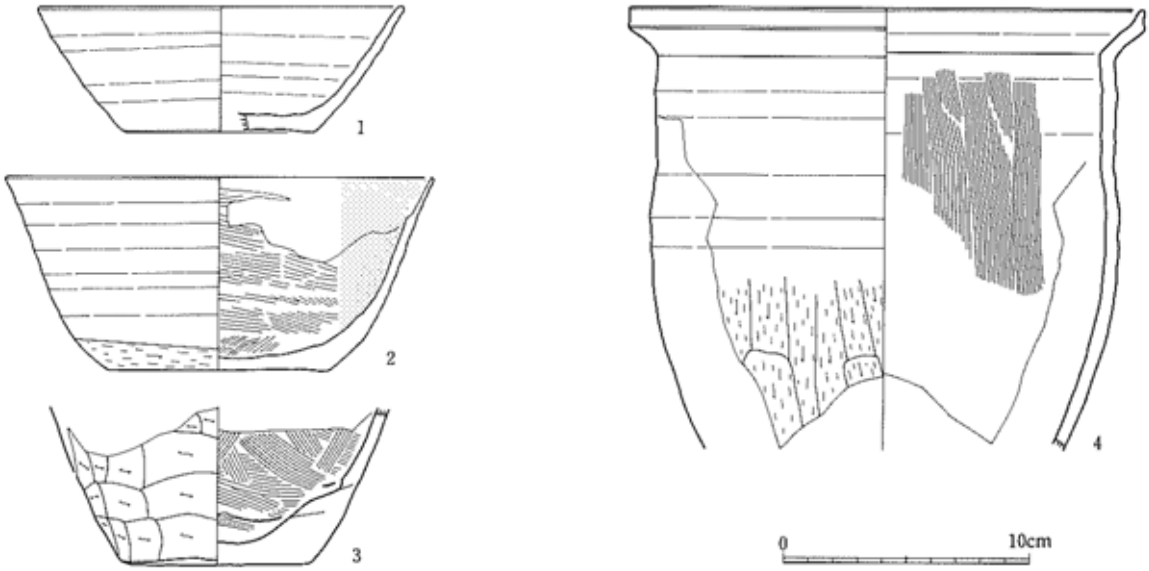
No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：2.4cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	11.8	－	2.7	3/4	2－9
2	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：2.5cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	11.6	－	2.9	5/6	2－10
3	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：2.4cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	12.2	－	3.3	2/3	2－11
4	須恵器・蓋	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	11.4	－	－	－	
5	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：2.4cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	－	－	－	－	
6	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：2.4cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	－	－	－	－	
7	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：3.8cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	18.3	－	4.2	4/5	2－13
8	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：3.8cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	19.4	－	3.9	4/5	2－14
9	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：3.4cm） 外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	19.5	－	4.9	完形	2－12
10	須恵器・蓋	3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	(19.0)	－	－	－	
11	須恵器・蓋	3層	擬宝珠形つまみ（径：3.7cm） 外面：回転ヘラケズリ→つまみ接合後ロクロナデ 内面：ロクロナデ	－	－	－	－	
12	須恵器・壺	3層	平底 外面：平行タタキ（木目直交）→ロクロナデ（脚部上半） 内面：無文アテ具→ロクロナデ、ナデ	(20.2)	－	－	－	

第6図　SK1土壙出土遺物(2)



No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・甕	3層	平底　外面：平行タタキ（木目直交）→ロクロナデ（胴部上半）　内面：無文アテ具→ロクロナデ、ナデ	22.1	12.4	(34.5)	1/2	2－15
2	須恵器・甕	3層	平底　外面：平行タタキ（木目直交）→ロクロナデ（胴部上半）→ヘラ記号「＝」（口縁部下）　内面：無文アテ具→ロクロナデ、ナデ	22.2	12.0	－	－	

第７図　SK1 土壙出土遺物(3)



No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	写真図版
1	須恵器・坏	2～4層	外面：ロクロナデ→ヘラ切り→ナデ（底部周縁）→ヘラ記号「一」（底部）　内面：ロクロナデ	(13.8)	(7.5)	5.1	2/5	2－3
2	土師器：坏	2～4層	外面：ロクロナデ→回転糸切り→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ヘラミガキ（雑）→黒色処理	17.4	9.0	7.9	2/3	
3	須恵器・壺	2～4層	外面：手持ちヘラケズリ　内面：ナデ　焼き台に転用？	－	7.6	－	－	
4	土師器・甕	2～4層	外面：ロクロナデ→縦位ヘラケズリ（体部下半）　内面：ロクロナデ→ナデ	(21.0)	－	－	－	

第 8 図　SK2 土壙出土遺物

もロクロ調整によるもので、土師器坏は口径に比して器高が高く、底部からやや内湾して立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りで、体部下端に回転ヘラケズリが施される。

【ＳＫ4】

調査区東端で検出した土壙である。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約 1.8m、短軸約 1.0m である。深さは 65～97㎝ で、断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形を呈する。土壙底面は北から南に向かって低くなる。堆積土は地山土を含む黒ボク土で、自然流入土である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

(2)溝状土壙

【ＳＫ3】（第４図）

調査区東側で検出した溝状土壙である。規模は幅 40㎝、長さ 2.6m、深さは 90㎝ である。底面はほぼ平坦で、側壁はほぼ垂直に立ち上がり、両端でオーバーハングしている。軸方向は斜面にほぼ直交している。堆積土は７層に分けられ、自然流入土である。遺物が出土していないため時期は不明であるが、縄文時代の落し穴と考えられる。

第三章　考　　察

(1) ＳK1 土壙について

調査区の斜面上方で検出したＳK1 土壙からは、須恵器だけがまとまって出土している。出土した須恵器を観察すると、内面・外面とも器壁が剥落しているもの、または焼け歪んだものなど、不良品と考えられる須恵器製品が多数を占める。またＳK1 の西側斜面上方は道路となっており、削平を受けていると考えられる。こうしたことから、本来調査区西側の東斜面に窯本体が存在したと予想され、ＳK1 は窯の灰原もしくは窯周辺の廃棄穴である可能性が高い。

(2) ＳK1 土壙出土土器

[ＳK1 出土土器の特徴]

ＳK1 からは須恵器坏・埦・双耳坏・高台坏・甕が出土しており、図示できたものは 29 点である。これらは堆積土 3 層中からまとまって出土している。以下、器種ごとに特徴をみていく。

坏：口径 13～14㎝、底径 7～8㎝、器高 4㎝ 前後で、底部から直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は直線的なもの（第 5 図 1・2）とやや外反するもの（第 5 図 3・4）がある。底部の切り離しは、底部破片（7 点）を含めて、すべてヘラ切りで、底部周縁にかるいナデが施されるものが多い。

埦：1 点のみ（第 5 図 9）である。口径に比して器高が高く、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反するものである。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。

高台坏：体部に稜をもち、台は「ハ」の字状にひらく。底径など法量からⅠ：小形のもの、Ⅱ：中形のもの、Ⅲ：大形のものがある。

Ⅰ：口径 11㎝ 前後、底径 5.4㎝ 前後、器高 6.7㎝ 前後で、体部の稜から直線的に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたるものである(第 5 図 7)。高台は端部の中央がややくぼむ。底部の切り離しはヘラ切りで、体部下端に回転ヘラケズリが施され、高台接合後ロクロナデが施される。高台接合の際、1～2 条の接合沈線（佐藤：1993B）が施される。

Ⅱ：1 点のみで、口縁部が欠落しているが、底径 7.6㎝ 前後である(第 5 図 8)。体部の稜から直線的に外傾する。高台はⅠ・Ⅲよりもやや低く、端部の中央がややくぼむ。底部の切り離しはヘラ切りで、高台接合後ロクロナデが施される。高台接合の際、接合沈線は施されず、また外面調整に回転ヘラケズリが施されないなどⅠ、Ⅲとは製作技法が違うものである。

Ⅲ：口径 17～18㎝、底径 9～10㎝、器高 8～9㎝ で、体部の稜から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部にそのままいたるもの(第 5 図 12・13・15)と、口縁端部でやや外反するもの(第 5 図 10・11)がある。高台は端部が丸みをもつ。底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施され、高台接合後ロクロナデが施される。高台接合の際、2～3 条の接合沈線が施される。

双耳坏：口径 11㎝ 前後、底径 5.6㎝ 前後、器高 6.7㎝ 前後で、体部下半に稜をもち、体部は直線的に外傾して立ち上がり、そのまま口縁部にいたるものである。底部の切り離しはヘラ切りで、体部下

端に回転ヘラケズリが施される。耳部はケズリで成形され、鳥羽状を呈し、貼り付け後ケズリ状のナデが施される。耳部及び底部の破片数から5個体分あったと考えられる。窯跡出土の双耳坏としては河南町関ノ入窯跡群11号窯（佐藤：1993B）に類例がある。

蓋：大きさからⅠ：小形のもの（第6図1～6）と、Ⅱ：大形のもの（第6図7～11）に分けられる。

Ⅰ：口径12㎝前後、つまみ径2.5㎝前後で、歪んでいるものが多いが器高は概ね3㎝前後である。口縁部はやや外反して、端部で短く下方に折れる。天井部は偏平で、つまみは偏平な擬宝珠形である。天井部に回転ヘラケズリが施され、つまみ接合後かるいロクロナデが施される。法量から双耳坏または高台坏Ⅰに組み合うものとみられる。

Ⅱ：口径19㎝前後、つまみ径3.5㎝前後で、歪んでいるものが多いが器高は概ね4.5㎝前後である。口縁部は外反して、端部は鋭く下方内側に振れ曲がる。天井部は偏平で、つまみは偏平な擬宝珠形である。天井部に回転ヘラケズリが施され、つまみ接合後かるいロクロナデが施される。法量から高台坏Ⅲに組み合うものとみられる。

甕：口径20～23㎝、底径12～13㎝、器高34㎝前後である（第6図2、第7図112）。平底で、胴部上半に最大径をもち、頸部は「く」の字状になり、ほぼ直線的に外傾する。口縁端部は上下に引き出され口縁帯が作り出されている。外面調整は平行タタキ（木目直交）が施され、その後胴部上半にロクロナデが施される。内面には無文のアテ具が認められ、その後胴部上半にロクロナデ、胴部下半にかるいナデが施される。

以上からＳK1出土土器の特徴をまとめると、次のようになる。

①須恵器のみである。

②須恵器坏の器形は逆台形を呈し、底部の切り離しはすべてヘラ切り無調整である。

③台が付くもの（双耳坏・高台坏）はいずれも体部下半に明瞭な稜をもつ。

④須恵器蓋は偏平な擬宝珠形のつまみをもち、口縁端部は小形蓋は下に短く折れ、大形蓋は下方内側に折れ曲がる。口径から、セットとなるのはそれぞれ双耳坏・小形高台坏、大形高台坏とみられる。

⑤須恵器甕は口径20～23㎝、底径12～13㎝、器高34㎝前後の平底である。外面には平行タタキ（木目直交）が施される。

⑥ＳK1出土土器は、各器種とも法量・器形・製作技法・胎土・焼成がほとんど同じである。このことから同一窯で焼成された製品と考えられる。

[ＳK1土壙出土土器の年代]

ＳK1 出土須恵器の特徴は前述したとおりで、こうした特徴は宮城県内の窯跡では涌谷町長根窯跡群Ｂ地点1号窯（岡田・佐々木・桑原：1992）、塩釜市杉の入裏窯跡3号窯（進藤・真山・高橋：1990）、仙台市安養寺下窯跡（結城：1981）などに類例が求められる。これらの特徴を須恵器坏でみると、杉の入裏窯跡3号窯、安養寺下窯跡は、底部から直線的に立ち上がる逆台形を呈し、長根窯跡群Ｂ地点

1号窯は、底部からほぼ直線的に立ち上がるやや器高の低い皿形を呈する。底部はいずれもヘラ切り無調整である。ＳK1 出土の須恵器坏と比較すると、底部からほぼ直線的に立ち上がること、底部がヘラ切り無調整であることなど共通している。長根窯跡群B地点1号窯は8世紀後半から9世紀前半、杉の入裏窯跡3号窯は8世紀後半を下限、仙台市安養寺下窯跡は8世紀後半に位置付けられている。また村田氏は「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」のなかで、これらをIII群土器とし、8世紀第3四半期後半から9世紀初頭に位置付けている(村田：1992)。ＳK1出土須恵器もこれらとほぼ同年代と考えられ、概ね8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。

また窯跡以外でＳK1と共通した特徴をもつ須恵器は、築館町伊治城跡ＳⅠ173住居跡から出土している。ＳⅠ173の須恵器は、坏は器形が逆台形を呈し、底部がヘラ切り無調整のものが主体をなし、また高台坏及び双耳坏は体部に稜をもつ。蓋は擬宝珠形のつまみをもち、口縁端部が下方に折れ曲がるといった特徴があげられる。ＳK1と比較すると、ほぼ共通した特徴をもつ須恵器がＳⅠ173では主体をしめている。伊治城跡ＳⅠ173は8世紀末から9世紀初頭に位置付けられており(菊地：1991)、前述の年代と矛盾しない。

以上のことから、ＳK1出土須恵器の年代は8世紀後半から9世紀初頭頃と考えられる。

引用・参考文献

真山悟（1989）：「彦右エ門橋窯跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第131集

岡田茂弘他（1970）：『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集

岡田・佐々木・桑原（1972）：『長根窯跡群Ⅱ』涌谷町教育委員会

加藤道男（1993）：「宮城県の土器様相」『北日本における律令期の土器様相』古代城柵官衙遺跡検討会

菊地逸夫（1991）：『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第4集

小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集

佐藤敏幸（1993Ａ）：『須江窯跡群　代官山遺跡』河南町文化財調査報告書第6集

（1993Ｂ）：『須江窯跡群　関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書第7集

進藤・真山・高橋（1990）：『杉の入裏窯跡』塩釜市文化財調査報告書第3集

古川・太田（1993）：『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集

真山悟他（1987）：『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集

村田晃一（1988）：「宮城県黒川郡大衡窯跡群」『研究紀要』第14巻　東北歴史資料館

（1992）：「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』

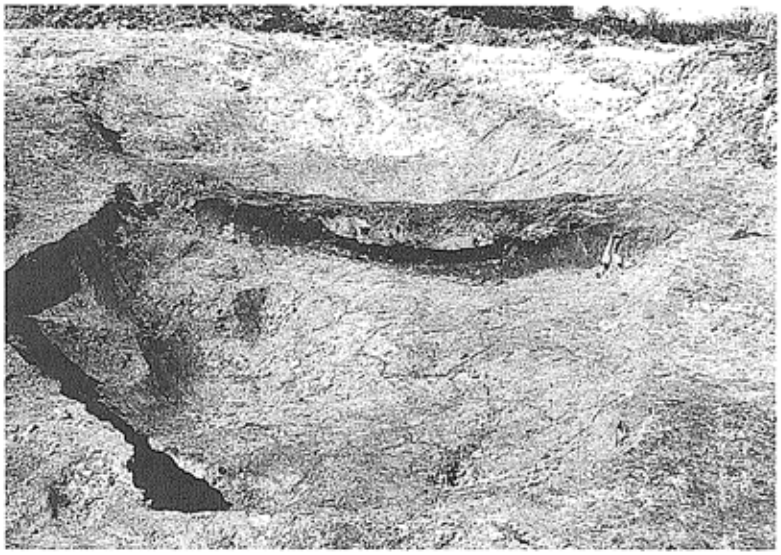
（1994）：「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』

（1995Ａ）：「萱刈場窯跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第166集

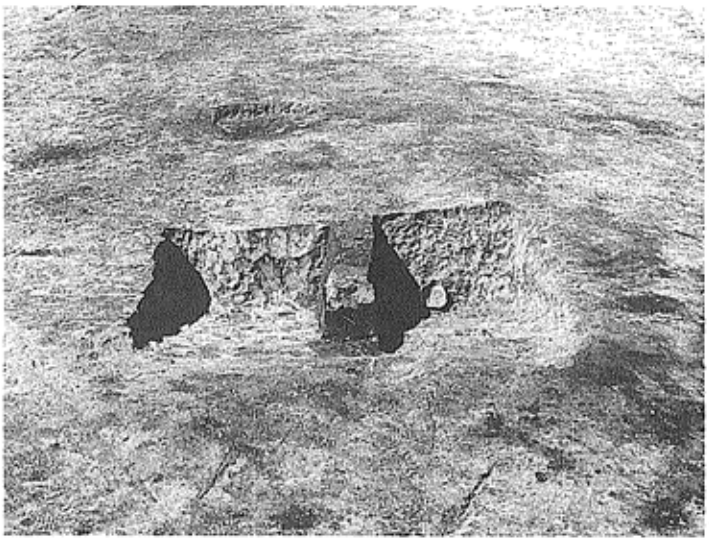
（1995Ｂ）：『亀岡遺跡』大衡村文化財調査報告書第1集

結城慎一（1981）：「仙台市安養寺下窯跡の検討」『陸奥国官窯跡群Ⅳ』古窯跡研究会　研究報告書第6冊

調査区全景（東より）



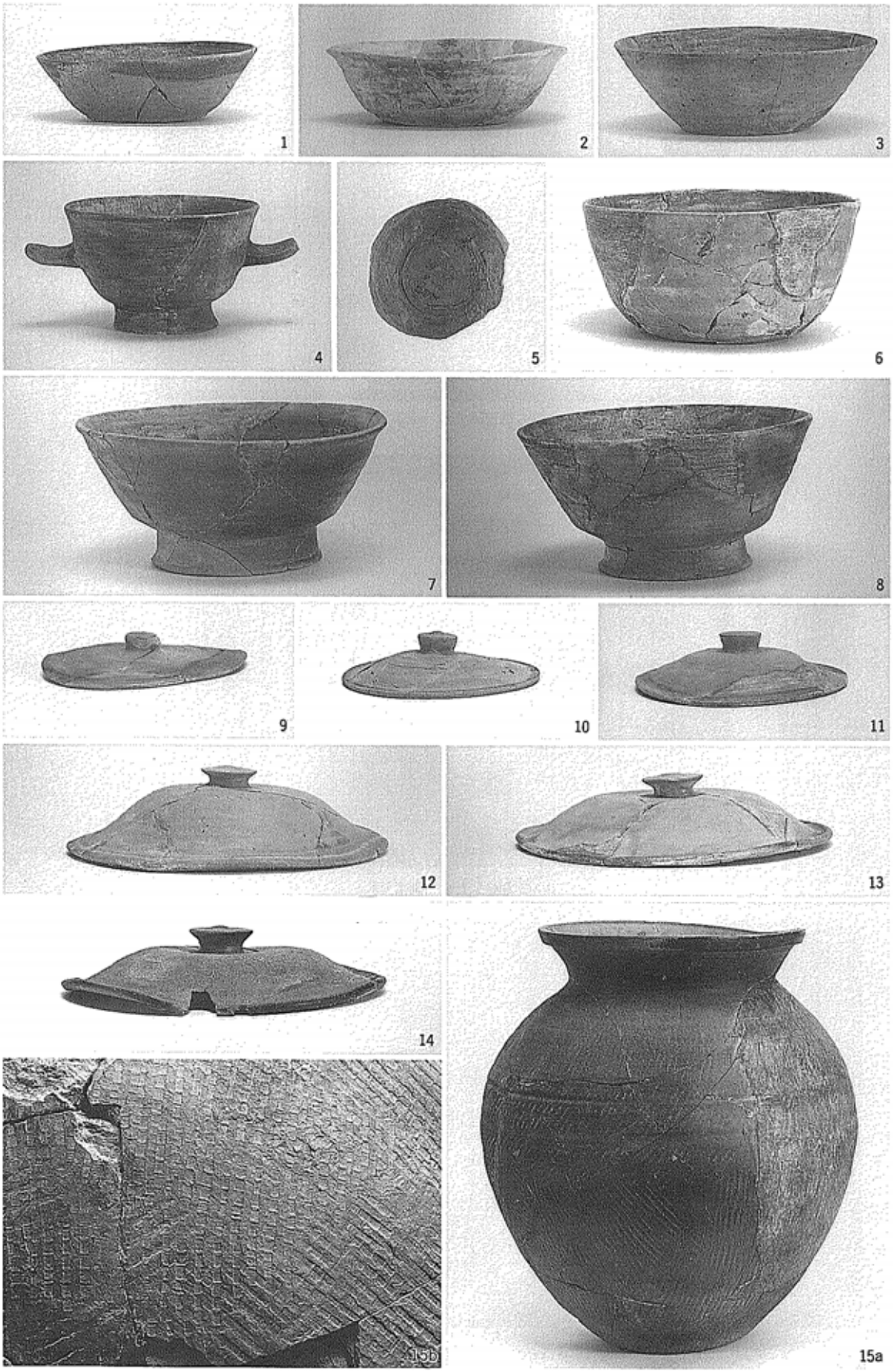
SK 1土壙（東より）



SK 2土壙（東より）

SK 3溝状土壙（南より）

図版　1



図版 2　　出土遺物

大　針　遺　跡

目　　次

Ⅰはじめに……169
Ⅱ発見された遺構……169
引用・参考文献……174
写真図版……175

調 査 要 項

遺 跡 名：大針遺跡（おおはりいせき）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：09009
遺跡記号：00
所 在 地：宮城県柴田郡川崎町支倉字上針
調査原因：開発工事ボートピア川崎に伴う大針遺跡の事前調査
調査面積：約 2500 ㎡（発掘面積約 2000 ㎡）
調査期間：平成 7（1995）年 4 月 10 日～25 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：三好秀樹、笠原俊哉

大　針　遺　跡

Ⅰ．はじめに

大針遺跡は柴田郡川崎町支倉字上針地内に所在する。

川崎町は東側を仙台市、西側を山形県山形市と接している。町の西側は標高1000mを越える蔵王連峰が占め、北側には青葉山丘陵、南側には高館丘陵があり、それぞれ東側にのびて釜房山付近で接し狭隘になる。南北両丘陵の間には太郎川・北川・前川が東流し、これらによって形成された河岸段丘の地域が川崎盆地である。

遺跡は、川崎盆地の南東部で高館丘陵上の北斜面に立地している。みちのく杜の湖畔公園からは南へ約2㎞の所にあり、現状は松林となっている。

川崎町内では、様々な年代の遺跡が約 80 箇所確認されており、そのほとんどが太郎川･北川･前川によって形成された段丘や台地上に立地している。特に縄文時代の遺跡は、遺跡全体の中でも占める割合が高く、竪穴住居跡などが検出された中ノ内A遺跡(古川ほか：1987)、縄文土器数点が出土している二本松・河原田遺跡(小山田：1985)、陥し穴が検出された支倉遺跡(手塚・小川：1986)、大平山Ｂ・Ｄ遺跡（手塚：1986）などがある。

今回、大針遺跡が開発工事であるボートピア川崎の防災調整地にかかることになった。まず、遺跡の状況を把握するために、任意に設定した6箇所のトレンチ調査を行ったところ、多数の土壙が検出された。そのため調査区を設定し事前調査を実施した。

本遺跡の基本層序は3層に大別される。第1層は黒褐色土で厚さ1mほどあり、調査区を覆う現表土である。第2層は黒色土で厚さ5～10㎝ほどであり、旧表土とみられる。第3層は地山である。最上部は黄褐色のシルトであるが、その下では黄褐色粘土、にぶい黄色土となる。

Ⅱ．発見された遺構

今回の調査で検出された遺構は、土壙51基で遺物は出土していない。

確認面は地山面で分布状況は遺構配置図に示したとおりである。以下、精査した土壙について形態的な分類を行い、その後分類ごとに個別に説明を加えていく。尚、各々の土壙の平面形・規模・分類・重複関係などについては第1表にまとめた。

検出した土壙について、平面形から大別を行い、それに個々の特徴を加えて以下の3類に分類した。

Ⅰ類：長楕円形を呈するもの

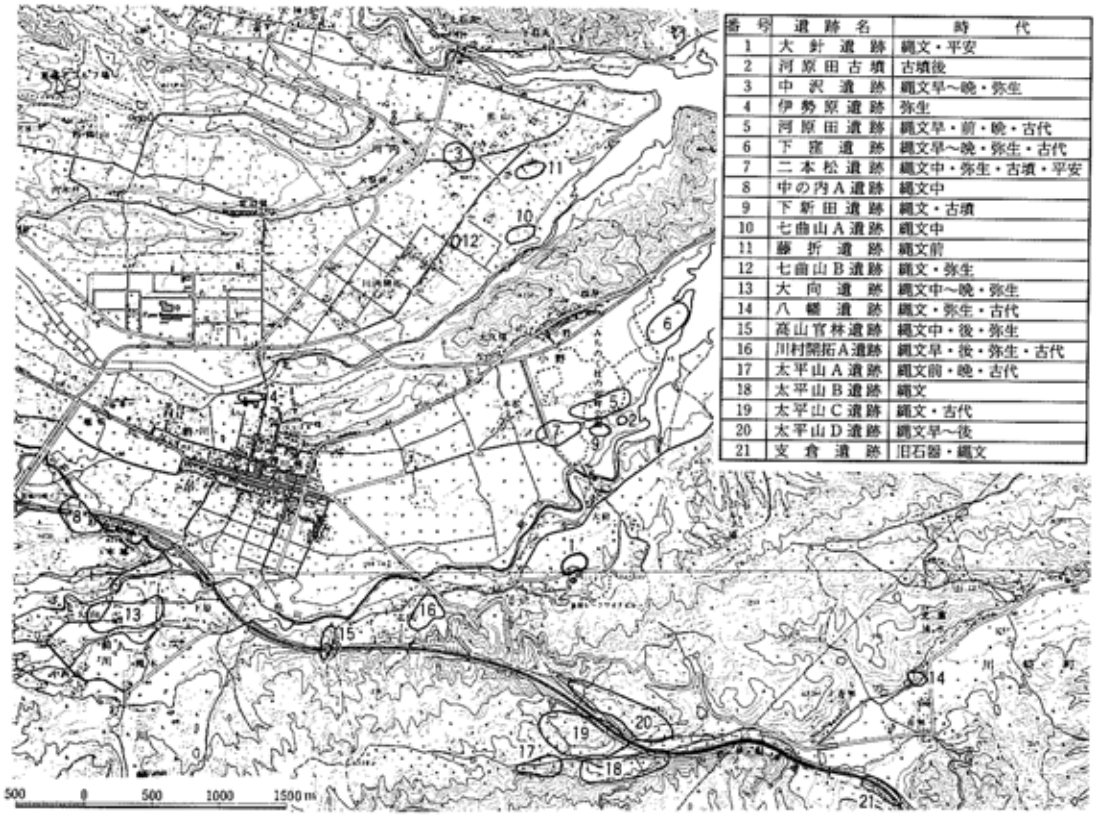
Ⅱ類：隅丸長方形・正方形を呈するもの

Ⅲ類：隅丸長方形・正方形を呈し、底面にピットのあるもの

以下、各種の土壙について説明を加える。

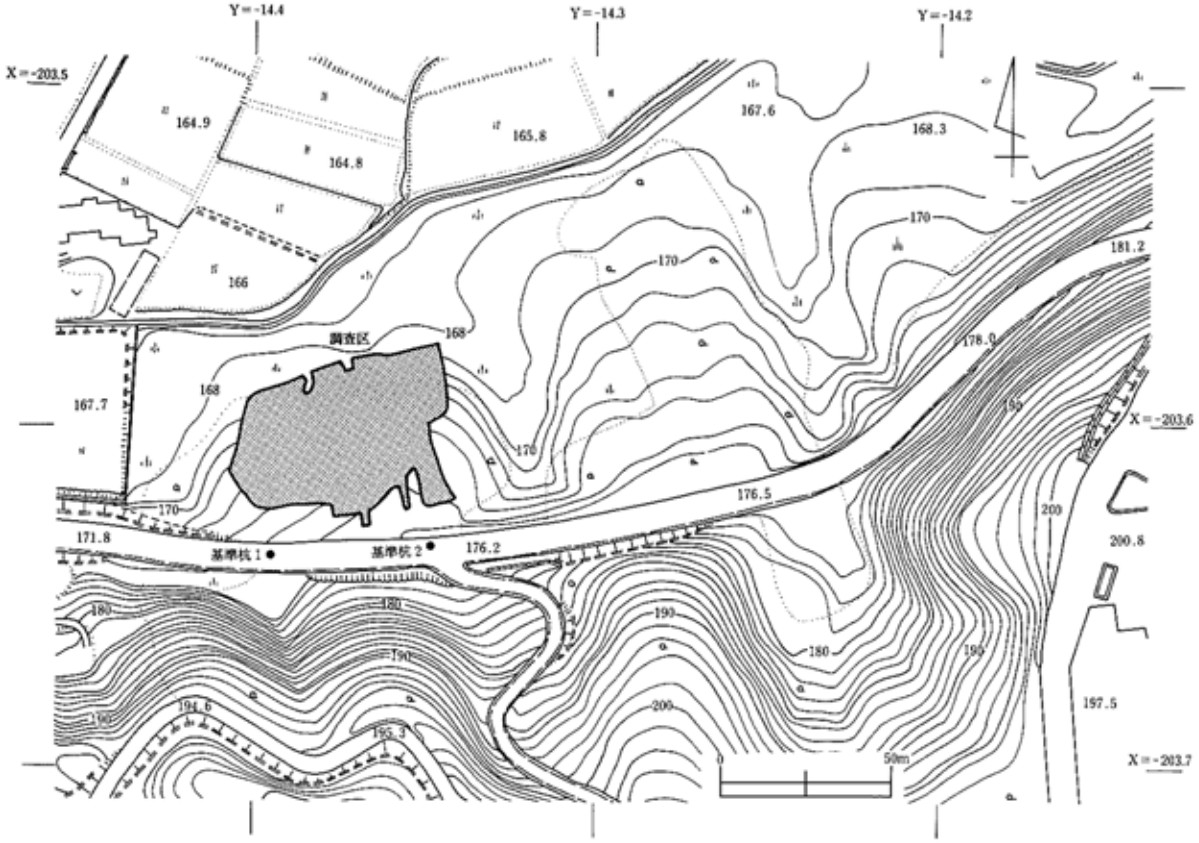
【Ⅰ類】

平面形が長楕円形を呈するもので、短軸方向の断面形は「V」字状である。7 基認められ、この内第6号土壙は第5号土壙(Ⅲ類)、第17号土壙は第6号土壙(Ⅲ類)、第22号土壙は第21号土壙(Ⅱ類)

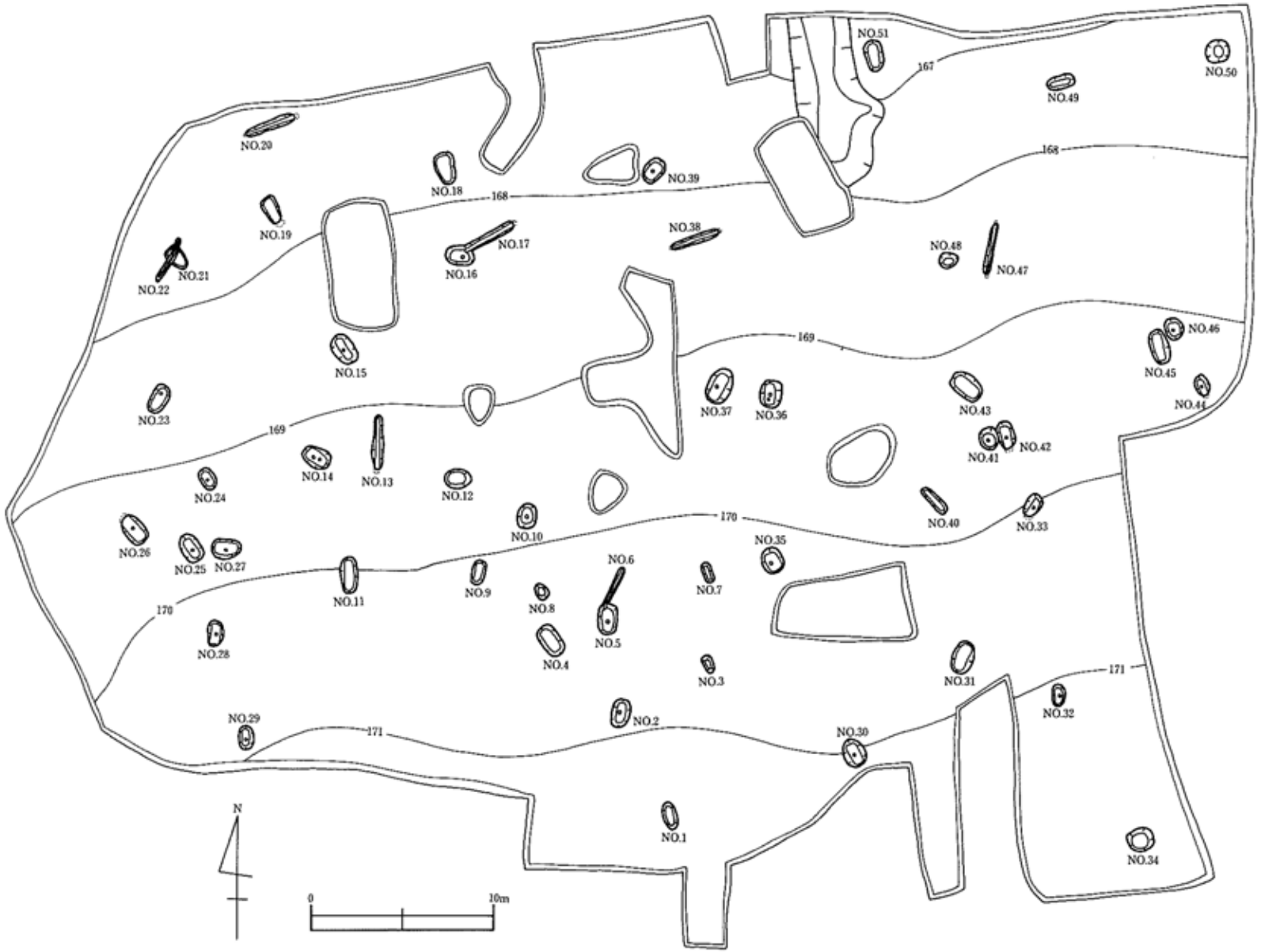


番号	遺跡名	時代
1	大針遺跡	縄文・平安
2	河原田古墳	古墳後
3	中沢遺跡	縄文早～晩・弥生
4	伊勢原遺跡	弥生
5	河原田遺跡	縄文早・前・晩・古代
6	下窪遺跡	縄文早～晩・弥生・古代
7	二本松遺跡	縄文中・弥生・古墳・平安
8	中の内A遺跡	縄文中
9	下新田遺跡	縄文・古墳
10	七曲山A遺跡	縄文中
11	藤折遺跡	縄文前
12	七曲山B遺跡	縄文・弥生
13	大向遺跡	縄文中～晩・弥生
14	八幡遺跡	縄文・弥生・古代
15	高山官林遺跡	縄文中・後・弥生
16	川村開拓A遺跡	縄文早・後・弥生・古代
17	太平山A遺跡	縄文前・晩・古代
18	太平山B遺跡	縄文
19	太平山C遺跡	縄文・古代
20	太平山D遺跡	縄文早～後
21	支倉遺跡	旧石器・縄文

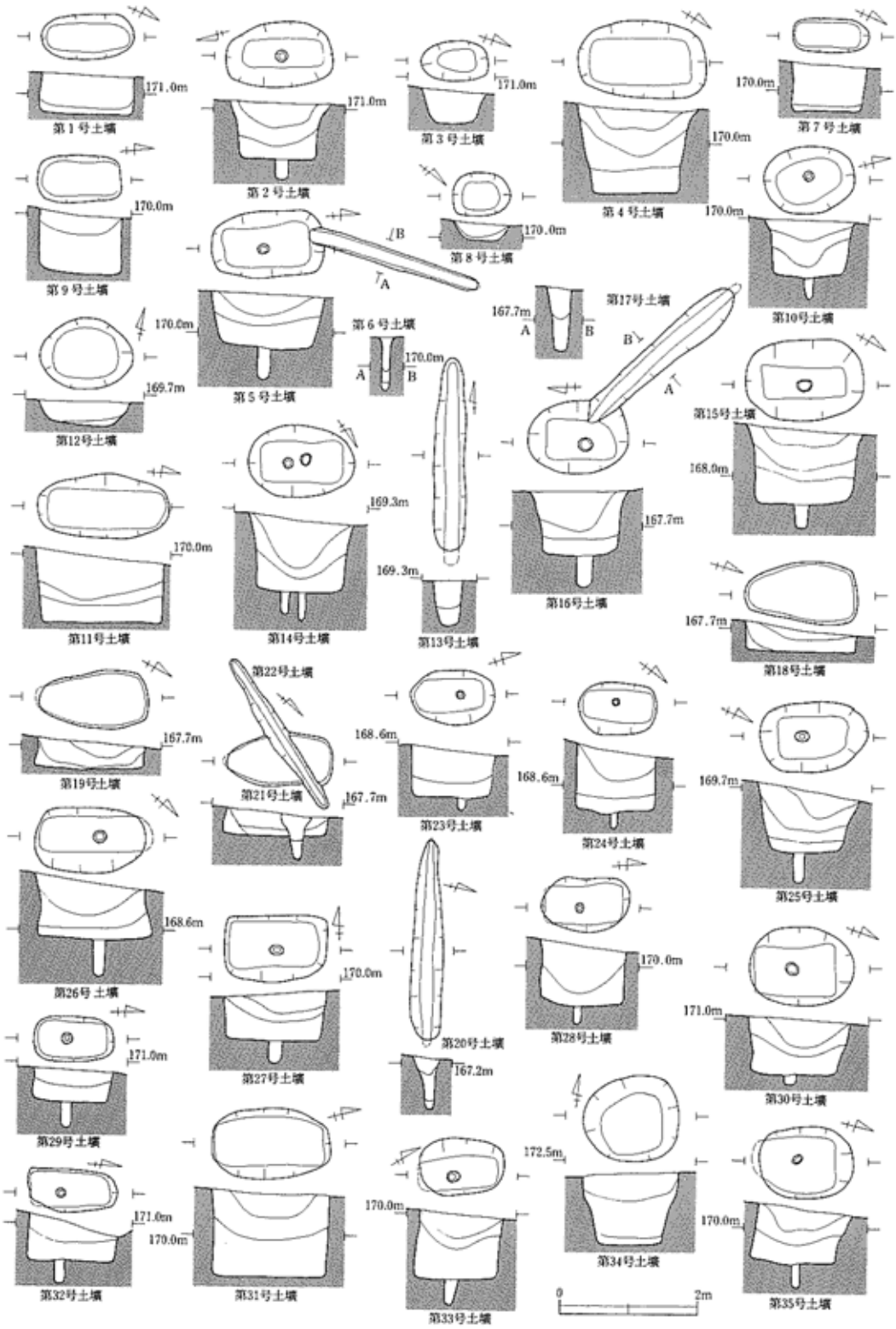
第１図　周辺の遺跡



第２図　調査区位置図

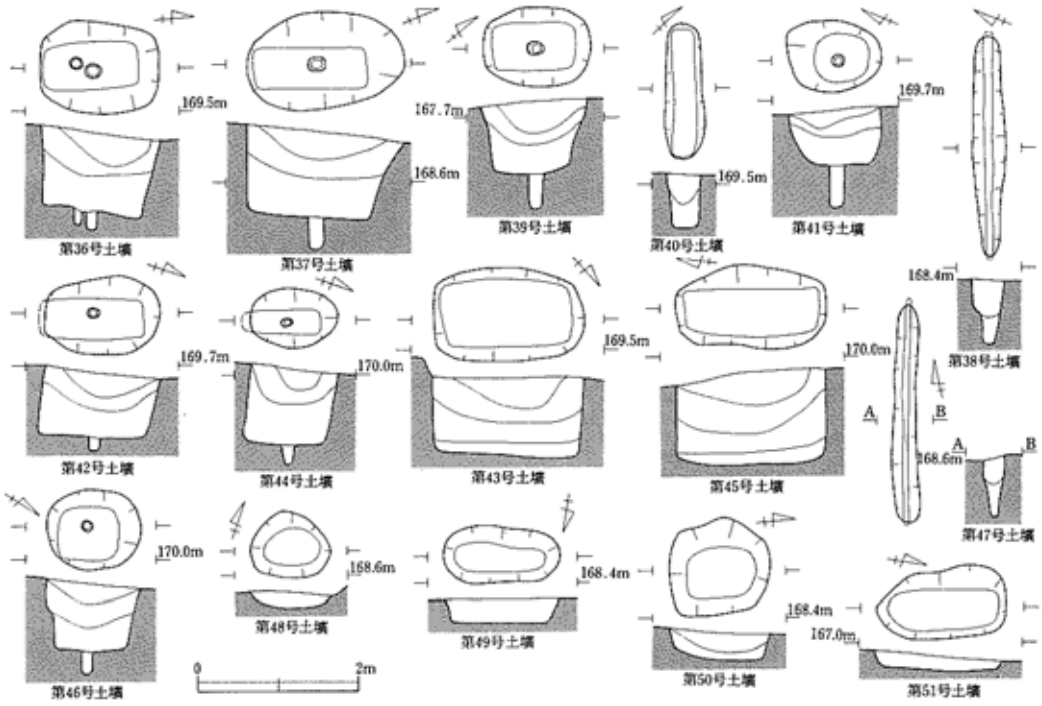

NO.51
167
NO.50
NO.49
NO.20
168
NO.18
168
NO.39
NO.19
NO.38
NO.17
NO.48
NO.21
NO.16
NO.47
NO.22
169
NO.46
NO.15
NO.45
NO.23
NO.37
NO.36
NO.43
NO.44
169
NO.41
NO.42
NO.14
NO.13
NO.12
NO.24
NO.40
NO.33
170
NO.10
NO.26
NO.35
NO.25
NO.27
NO.6
NO.11
NO.9
NO.7
NO.8
170
NO.5
NO.28
NO.4
NO.3
NO.31
171
NO.32
NO.29
NO.2
171
NO.30
N
NO.1
NO.34
0
10m

第３図　遺構配置図



第4図　土壙(1)

と重複しており、いずれもⅠ類のものが新しい。規模は長軸240㎝～285㎝、短軸25㎝～45㎝、深さが45㎝～85㎝である。堆積土は自然流入土であり、2層～3層に分けられる。第1層は地山ブロックを含む黒褐色土、第2層は黒色土、第3層は黒褐色土でいずれも粘性のあるシルトである。これら



第5図　土壙(2)

第1表

遺構番号	規模(長軸cm×短軸cm)	深さ(cm)	平面形	分類	備考
第1号土壙	135×86	57	隅丸長方形	Ⅱ類	
第2号土壙	155×97	83	隅丸長方形	Ⅱ類	底面に小ピット1個。
第3号土壙	98×58	46	隅丸長方形	Ⅱ類	
第4号土壙	184×113	137	隅丸長方形	Ⅱ類	
第5号土壙	164×96	76	隅丸長方形	Ⅱ類	底面に小ピット1個。第6号土壙に切られる。
第6号土壙	240以上×25	52	長楕円形	Ⅰ類	第5号土壙を切る。
第7号土壙	110×48	67	隅丸長方形	Ⅱ類	
第8号土壙	83×63	23	円形	Ⅱ類	
第9号土壙	122×69	86	隅丸長方形	Ⅱ類	
第10号土壙	130×99	73	円形	Ⅱ類	底面に小ピット1個。
第11号土壙	190×95	102	隅丸長方形	Ⅱ類	
第12号土壙	135×105	33	円形	Ⅱ類	
第13号土壙	284×44	61	長楕円形	Ⅰ類	
第14号土壙	154×105	105	隅丸長方形	Ⅱ類	底面に小ピット2個。
第15号土壙	185×120	114	隅丸長方形	Ⅱ類	底面に小ピット1個。
第16号土壙	147×106	88	隅丸長方形	Ⅱ類	底面に小ピット1個。第17号土壙に切られる。
第17号土壙	260以上×39	83	長楕円形	Ⅰ類	第16号土壙を切る。
第18号土壙	164×88	38	隅丸長方形	Ⅱ類	
第19号土壙	156×80	21	隅丸長方形	Ⅱ類	
第20号土壙	268×46	82	長楕円形	Ⅰ類	
第21号土壙	154×77	33	隅丸長方形	Ⅱ類	第22号土壙に切られる。
第22号土壙	254×29	45	長楕円形	Ⅰ類	第21号土壙を切る。
第23号土壙	122×76	68	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第24号土壙	114×76	90	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第25号土壙	154×100	77	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第26号土壙	160×95	83	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第27号土壙	149×97	66	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第28号土壙	126×77	85	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第29号土壙	116×66	45	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第30号土壙	150×114	80	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第31号土壙	172×106	121	隅丸長方形	Ⅱ類	
第32号土壙	121×63	52	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第33号土壙	123×82	94	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第34号土壙	139×126	102	円形	Ⅱ類	
第35号土壙	136×106	77	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第36号土壙	149×115	99	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット2個。
第37号土壙	195×121	104	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第38号土壙	274×41	77	長楕円形	Ⅰ類	
第39号土壙	132×99	85	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第40号土壙	168×43	61	隅丸長方形	Ⅱ類	
第41号土壙	114×89	68	円形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第42号土壙	141×95	78	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第43号土壙	187×118	95	隅丸長方形	Ⅱ類	
第44号土壙	198×76	92	隅丸長方形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第45号土壙	186×102	103	隅丸長方形	Ⅱ類	
第46号土壙	116×98	81	円形	Ⅲ類	底面に小ピット1個。
第47号土壙	269×26	67	長楕円形	Ⅰ類	
第48号土壙	109×82	16	円形	Ⅱ類	
第49号土壙	144×66	28	隅丸長方形	Ⅱ類	
第50号土壙	125×119	30	円形	Ⅱ類	
第51号土壙	159×85	16	隅丸長方形	Ⅱ類	

は丘陵北斜面を斜めに下るように南東から北西にかけ10m～15m間隔で配されており、その並びは大きくみて2列に分けられる。斜面の傾斜に対して、長軸の方向は統一されていない。

【Ⅱ類】

平面形が隅丸長方形・正方形を呈するもので、底面にピットがないものである。壁はほぼ垂直に立ち上がり(正方形を呈する土壙には緩やかに立ち上るものもある)、底面はほぼ平坦である。20基（隅丸長方形15基・正方形5基）認められる。この内第21号土壙が第22号土壙(Ⅰ類)と重複しており、これより古い。規模は長辺150㎝前後×短辺90㎝前後のものを中心としており、最大が第11号土壙で190㎝×95㎝、最小が第8号土壙の85㎝×65㎝である。深さは第4号土壙の135㎝が最も深い。堆積土はすべて自然流入土であり、1層～4層に分けられる。第1層は小礫を含む黒褐色土、第2層は黒色土、第3層は小礫・地山ブロックを含む黒褐色土、第4層は小礫・地山ブロックを含む褐灰色土でいずれも粘性のあるシルトである。調査区全体に分布しており、配置に規則性はみられない。

【Ⅲ類】

平面形が隅丸長方形・正方形を呈するもので、底面にピットが 1・2 個認められるものである。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がるが、第 2 号土壙のように途中からやや開き気味に立ち上がるものもあり、上部の壁が崩落している可能性がある。底面はほぼ平坦である。今回検出された中で最も多く全体の 47%の割合を占めており、24 基（隅丸長方形 21 基･正方形 3 基）認められる。この内第 5 号土壙は第 6 号土壙(Ⅰ類)と、第 16 号土壙は第 17 号土壙(Ⅰ類)と重複しており、いずれも前者が古い。規模は長辺150㎝前後×短辺90㎝前後のものを中心としており、最大が第37号土壙で195㎝×120㎝、最小が第 44 号土壙の 105㎝×75㎝である。深さは第 15 号土壙の 115㎝が最も深い。底面で検出された小ピットは直径 10㎝～20㎝、深さ 5㎝～50㎝の円形を呈し、ほぼ中央に位置している。断面観察では、底面より上部への立ち上がりは確認されなかったものの、杭の痕跡の可能性がある。あるいは小ピットの直径がやや大きいことから杭を抜いた可能性も考えられる。堆積土は小ピットを除きすべて自然流入土であり、2 層～4 層に分けられる。第 1 層は小礫を含む黒褐色土、第 2 層は小礫を含む黒色土、第 3 層は小礫・地山ブロックを含む黒褐色土、第 4 層は小礫・地山ブロックを含む褐灰色土である。小ピットの堆積土は黒褐色土である。いずれも粘性のあるシルトである。調査区全体に分布しており、配置に規則性はみられない。

今回の調査では丘陵裾部の北側斜面上で、土壙 51 基が確認された。各類の土壙の分布状況をみると、Ⅰ類には 10m～15m間隔で北西方向に配されており、Ⅱ・Ⅲ類土壙については規則性がみられない。またⅡ類とⅢ類は底面のピットの有無を除けば、規模や平面形、断面形に大きな違いはない。このような特徴をもつ土壙は、大針遺跡から南東方向へ約 2ｋm、同じ高館丘陵の支倉遺跡（手塚・小川：1986）でも報告されている。支倉遺跡では検出した土壙 13 基をＡ・Ｂに分類し、その機能についてはいずれも陥し穴とされている。本遺跡の土壙もⅡ・Ⅲ類が支倉遺跡のＡ類に、Ⅰ類がＢ類に形態的特徴が類似しており、同様に陥し穴と考えられる。尚、陥し穴には重複関係が認められるものや、近接しているものもある。ある程度の時間差はあるが、現時点で具体的な変遷を捉えることはできない。

引用・参考文献

川崎町史編纂委員会（1975）：『川崎町史通史編』

小山田正男　（1985）：「二本松遺跡・河原田遺跡」宮城県文化財調査報告書第 112 集　宮城県教育委員会

手塚　均・小川　出（1986）：「支倉遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第 120 集　宮城県教育委員会

古川一明・手塚　均・須田良平・相原淳一・鈴木真一郎（1987）：「中ノ内Ａ遺跡・本屋敷遺跡他」宮城県文化財調査報告書第 121 集　宮城県教育委員会・日本道路公団

石岡憲雄　（1991）：「Ｔピットについて（再論）」『埼玉考古学論集』

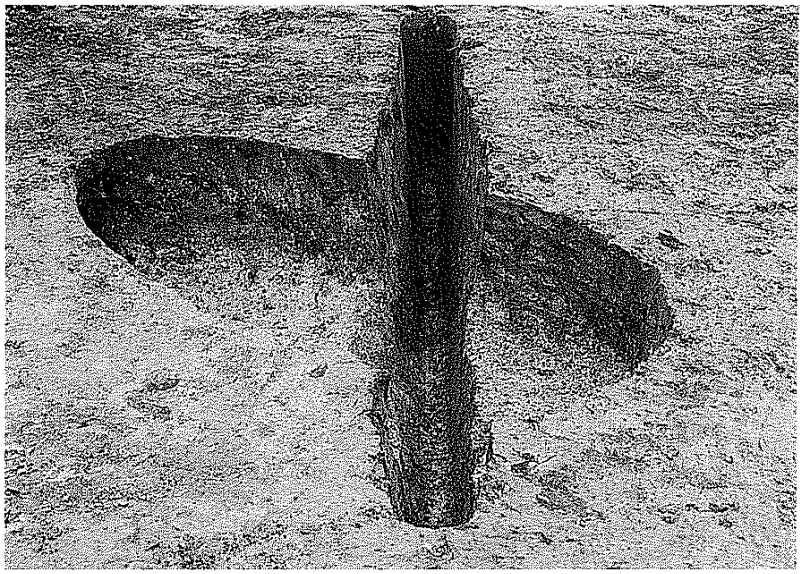
今村啓爾　（1983）：「陥穴（おとしあな）」『縄文文化の研究 2－生業』

村田文男　（1982）：「おとし穴」『季刊考古学創刊号』

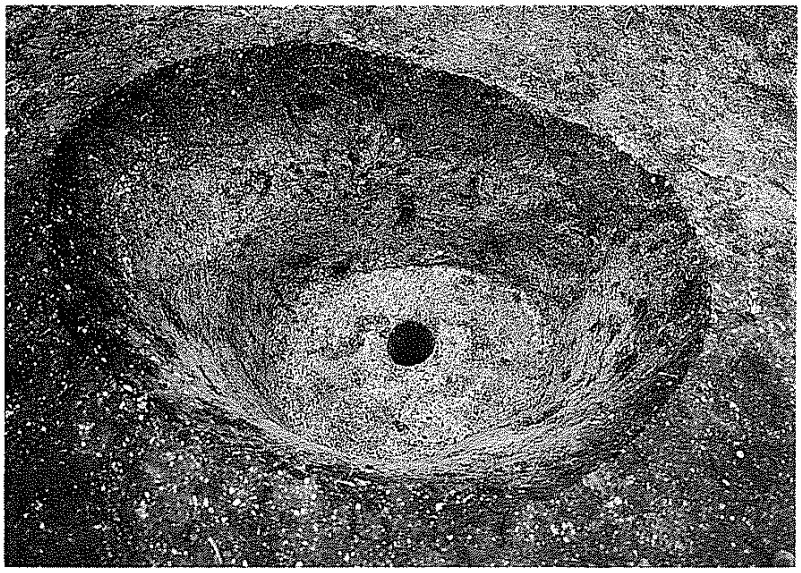
1．調査区遠景
（北より）

2．調査区全景
（西より）

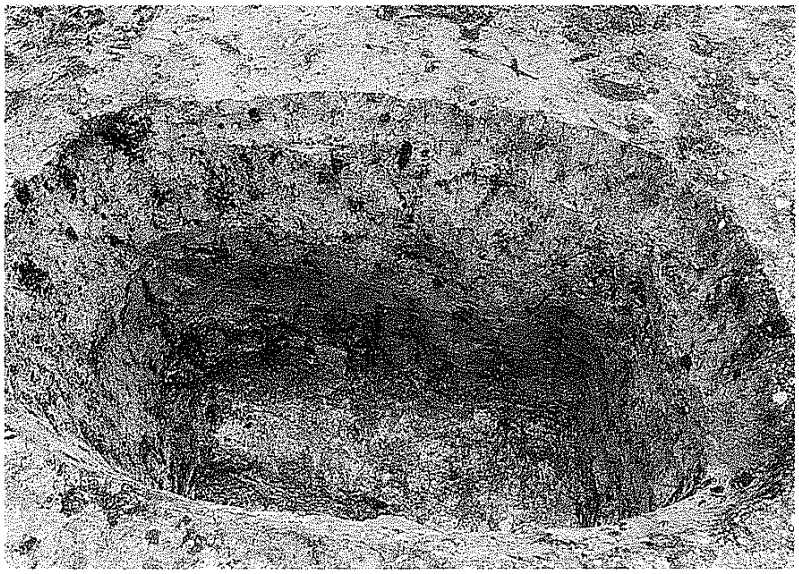
3．調査区全景
（東より）



4．第21・22号土壙
（北より）



5．第10号土壙
（東より）



6．第４号土壙
（東より）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもくさこじょうあと
書 名	下草古城跡ほか
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	169集
編 著 者 名	天野順陽、山田晃弘、東理浩明、高橋栄一、笠原俊哉
編 集 機 関	宮城県教育委員会
所 在 地	〒980 宮城県青葉区本町三丁目8の1 TEL 022-211-3685
発 行 年 月 日	西暦 1996年 3月 29日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
しもくさこじょうあと 下草古城跡	みやぎけんくろかわぐん 宮城県黒川郡 たいわちようつるすしもくさ 大和町鶴巣下草	044211	23068	38度 25分	140度 52分 40秒	19950413～ 19951025	5,380	圃場整備に伴う事前調査
まちだいせき 町田遺跡	みやぎけんくりはらぐんいちはきま 宮城県栗原郡一 迫 まちおおかわぐちあざまちだ 町大川口字町田	045250	45069	38度 43分 30秒	140度 55分 57秒	19951030～ 19951107	960	道路改良に伴う事前調査
りつげんじあと 栗原寺跡	みやぎけんくりはらぐん 宮城県栗原郡 くりこままちくりはらにしざわ 栗駒町栗原西沢	045233	43003	38度 47分 41秒	140度 02分 03秒	19950911～ 19950920	380	史跡公園整備に伴う事前調査
かめおかいせき 亀岡遺跡	みやぎけんくろかわぐん 宮城県黒川郡 おおひらむらおおひらあざかめおか 大衡村大衡字亀岡	044245	26003	38度 27分 28秒	140度 52分 14秒	19950529～ 19950531	1,970	駐車場造成に伴う事前調査
ひこえもんばしかまあと 彦右ヱ門橋窯跡	みやぎけんくろかわぐんおおひらむら 宮城県黒川郡大衡村 こまばあざひこえもんばし 駒場字彦右ヱ門橋	044245	26010	38度 29分 56秒	141度 53分 41秒	19950911～ 19950912	200	道路改良に伴う事前調査
おおはりいせき 大針遺跡	みやぎけんしばたぐん 宮城県柴田郡 かわさきまちはせくらあざうわはり 川崎町支倉字上針	043249	09009	38度 10分 00秒	140度 40分 00秒	19950410～ 19950425	2,000	ポートピア川崎開発工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
下草古城跡	集落・城跡	中近世 (16末～17初) 古墳 (塩釜式期)	掘立柱建物跡 73棟 柱穴列跡 11列 井戸跡 31基 溝跡 94条 土壙 12基 焼け面跡 4基 炭化物集中遺構 1基 道跡跡 2条 集石遺構 1基 竪穴状遺構 1基 整地層 3カ所	陶磁器(16末～17初) 1箱 木製品 2箱 土製品 1箱 石製品 2箱 金属製品 1箱 古銭 1箱 土師器(塩釜式期) 10箱	下草古城の城下町 (17世紀初頭頃)
町田遺跡	集落跡	縄文時代	土壙1基、包含層1カ所	縄文土器、石器	前期初頭上川名II式
栗原寺跡	寺院跡 包含地	平安時代	池跡1基杭列跡3列、溝跡4条	土師器、須恵器、赤焼き土器	
亀岡遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡1軒、溝跡1条土壙1基	土師器、須恵器	
彦右ヱ門橋窯跡	窯跡	奈良・平安時代	土壙3基、溝状土壙1基	土師器、須恵器2箱	
大針遺構	陥し穴	縄文時代	土壙51基	なし	

第４図　遺構全体図　（１／750）